

---

# 魔法少女リリカルなのはACE

コエンマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはACE

### 【Nコード】

N5083N

### 【作者名】

コエンマ

### 【あらすじ】

”大海賊時代”開幕以来最大の戦い、『マリソフォード頂上戦争』は、数多の命の散り華として幕を閉じた。そして戦争の引き金となつた男、火拳のエースは恩人白ひげと共に死んだと思われた。だが、運命は彼の死を受け入れない。死んだはずのエースが再び目を開けると、そこには一人の少女とフェレットが自分を見つめていた。『魔法少女リリカルなのはACE』、堂々の開幕っ！！



## プロローグ（前書き）

はじめに書いておきます。

これは、作者であるコエンマが今書いている小説の息抜きとして書いたものです。

ですから、超絶なご都合主義が入ってますし、これ以外の小説をメインとするため更新頻度はまったく安定せず、作者の書く小説を知る人は分かるとおり、見る人を選びます。

なので改めてあげておきますが、原作崩壊、低文章力、パワーインフレ、設定改変、矛盾、誤字脱字、キャラ違っつていうか別人だろぅがよ、自由解釈ここに極まれり、などなど、あると思いますが、それを深い心で許容し、かつ納得できる方のみご覧下さい。

それ以外での苦情は一切受け付けておりません。

では、『魔法少女リリカルなのはACE』のはじまりはじまり  
〜。

## プロローグ

飛び交う怒号に地を這う悲鳴。響き渡る轟音、迸る鮮血、そして消えていく命が、再三にわたり、ここが戦場なのだということを主張する。

目の前には、驚愕に彩られた表情の弟が見える。自分という存在を巡って起こった戦いの最中、おれは決定的な傷を負ってしまった。

熱い。おれの火よりも、今までに感じたどんな傷よりもずっと熱く痛い、芯から焼かれるような熱。だが、同時に抑えきれないほどの寒気を感じ、おれは気づけば膝を付いていた。

赤犬によって穿たれた傷は熱を持ち、背中から腹部を完全に貫いている。やっちなまったなとは思ったが、もはやすべてが遅いのは自分が一番よくわかっていた。年貢の納め時ってヤツか。

おれを抱きとめた弟が、誰か助けてくれと叫びを上げる。ちゃんと助けてもらうことはできなかった。だが、おれは自分のことよりも、それによって己を責めるであろう弟のことばかりを考える。

その悲痛な叫びに応じるように、仲間の船医が飛び出してきた。しかし、すべてを悟っていたおれは一言無駄だと言ってそれを押し留める。

時間はもう、ほとんどないのだ。 ” 悔い ” は残しなくなっ

た。

「自分の命の終わりくらいわかる・・・内蔵を焼かれたんだ・・・もう、もたねエ・・・だから・・・聞けよルフィ・・・」

「何言つてんだ・・・エース・・・死ぬのか?・・・い・・・約束したじゃねエかよ!!!ハアハア・・・お前、絶対死なねえつて・・・言っただじゃねエかよオ、エースウ~~~~!!!」

大切な弟、ルフィの叫びが戦場に木霊する。そうだな・・・確かにサボやお前がいなかったら、誰からも望まれなかったおれは生きようとは思わなかった。だから、お前が・・・オヤジや皆が生きると言ってくれたこと、助けようとしてくれたこと・・・本当に感謝してるんだぜ・・・?

おれは、そう心に刻み込み、震えるルフィへと言葉を紡いだ。

「心残りは・・・一つ、ある。お前の”夢の果て”を見れねエことだ・・・だけどお前なら必ずやれる・・・おれの弟だ・・・！昔誓い合った通り・・・おれの人生には・・・悔いはない！」

「・・・ウソだ。ウソつけ!!!」

ルフィはおれの言葉を弱気だと思ったのか、半ば叫ぶようにして叱咤する。だが、答えは同じだ。激痛みで歪みそうになる表情を押し殺しながら、物心付いた頃からずっと考え続けていたことを吐き出した。

「ウソじゃねエ・・・おれが本当に欲しかったものは・・・どうやら”名声”なんかじゃなかったんだ・・・おれは”生まれて

きてもよかったのか” 欲しかったのは・・・その答えだった」

もうほとんど声が出ない。おれは自らの遺志を告げるべく、這い上がってくる吐き気を押しやり、焼けた喉の激痛を無視して、ルフィへと力の限り声を張った。

「オヤジ・・・みんな・・・そしてルフィ・・・今日までこんなどうしようもねエおれを・・・鬼の血を引くこのおれを・・・愛してくれて・・・ありがとう・・・！！！！」

「『『『『『エース・・・！！！！』』』』」

仲間達が自分の名を口々に呼ぶ。皆は一樣に涙を流し、悲しんでくれている。

嬉しい。不謹慎だと分かっているけど、この上なく嬉しかった。自分の死を、悲しんでくれる人たちがいる。たったそれだけ、だがどんなに得ようとしても届かなかったものが今、自分のすぐ目の前にあることに、おれは満たされた気持ちになっていた。

涙で滲み、泣きそうになる顔を抑えるために歯を食いしばる。そして、おれは生涯で一番の、精一杯の笑みを見せた。その途端、身体力が抜けていくのをどこか他人事のように感じていた。

仲間達の声を聞き届けながら、おれの身体は崩れ落ちる。地に伏した身体から、急速に感覚が消えていく。声がどんどん遠くなり、もはや聞き取れることもままならない。

そして傍に落ちていた・・・ルフィに渡したおれのビブルカードが、爪の先ほどに小さくなり・・・そして燃え尽きた。

「エース・・・？」

言葉は聞こえない。おれは暗く遠い、どこかへと運ばれていく。

「おれが死んだと思ったのか？」

「約束だ！おれは絶対に死なねエ！お前みたいな弱虫の弟を残して死ねるか！！」

いつかルフィに誓った言葉が蘇る。はは、約束は半分破っちゃまったな。けど、お前はもう大丈夫だろルフィ？

強くなった、自分を超えると言ってくれた弟はまだまだ先があるだろう。きつとおれには出来なかった事を、お前やおれが描き続けた夢を果たしてくれるに違いない。

そうさ。もうお前は弱虫じゃない。たくさんの仲間もいる。どんな困難も乗り越えていける・・・立派な海賊だ。

だから、負けるんじゃないねエぞ・・・見届けることはできねエが・・・お前が夢の果てへと届くことを、おれは祈ってるぜ・・・あばよ・・・ルフィ・・・

弟の未来を祈り、おれは自分自身を手放した。

おれの意識はもうここには・・・ない。ここにあることは許されない。

死んだらどこに行くのか。そんな柄にもないことを考える。

もうなにもわからないはずだ。オヤジの涙も、仲間の声も、おれ自身のことさえも。

何もかも、すべてがない。だが、何も無いはずのおれの心には、

『エース~~~~~!!!!!!』

誰よりもおれのことを思い、誰よりもおれのことを理解し、そして誰よりもおれを必要としてくれた、愛すべき弟の声が響いていた。

TO BE CONTINUED . . .



## プロローグ（後書き）

プロローグの終了です。

いやー、やっちゃまったなって感じは強いんですが、唐突に思いついたこの作品になぜか愛着がわき、どうしても投稿せずにはいられなくなってしまうました。

再三にわたって述べておきますが、この小説は私が手がけているもうひとつのクロス小説、『魔法少女リリカルなのは』 炎殺の邪眼師』の筆休めとして書き始めたものです。

メインはそちら側にあるので、更新は亀より遅い・・・と思います。ですが、それでも読みたい！と思ってくださる方がいるのなら、ちよくちよく書いていくつもりなので、ご拝読のほうをよろしくお願い致します。

勝手に申し訳ありません。駄文小説家見習い、コエンマでした。

第一話 邂逅 〱 共鳴する願い（前書き）

ようやくの第一話投稿です。

現在メインは他の小説にあるので、かなり間が空いてしまいました。しかも短い上に文章が粗い・・・ああ、もっと早く上手に書けるようになっていけばなあ・・・

と、愚痴っけていても仕方ありません。

それでは、記念すべき第一話です。どうぞぞー！

第一話 邂逅 〱 共鳴する願い

『この世は全て、強い望みの赴くままに  
歯車なのである』  
・・・巡り合う、

黒ひげ海賊団狙撃手 ?音越え? ヴァン・オーガー

- Side N a n o h a & Y u n o -

海鳴市と呼ばれる都市、普段は閑静な住宅街に立つビルの屋上。  
夕焼けに染まるその場所に一人の少女の姿があった。

出で立ちは白い制服姿に赤色のリボン。茶色がかった髪を白いリボンでツインテールに纏め上げ、手には大きな赤色の宝石を携えた杖を持ち、肩には子狐色のフェレットが乗っていた。

言葉を元に想像すると、それは小さい子供がごっこ遊びなどでよくやる格好、魔法少女とその使い魔である。小学校中学年ぐらいの容姿からしても、違和感はない。大人なら、きっと微笑ましく彼女を見守るだろう。

しかし本人『達』は至って真剣であった。何を隠そうこの少女、

なんと本物の魔法少女なのである。そんな存在になったのは、つい先日のことであるが。

その少女の元に、一筋の光が飛んでくる。青い煌きを放ちながら飛翔し、それは彼女の目の前で止まった。親指大ほどのひし形で、その表面には『X』とシリアルナンバーが走っている。

彼女の目の前に浮き漂うのは、『ジュエルシード』と呼ばれる次元干渉型の魔法具だ。通称『ロストロギア』と名づけられた古代の遺産の一つであり、手にした者の願いを叶えるとされる魔法の石なのである。

ジュエルシードは通常21個存在し、本来は厳重に保管されるのだが、それを運搬していた次元航行船が何らかのトラブルに合い、この世界に散らばってしまったのである。

そしてそれを発掘してしまったが故の責任を取るため、ここにいるユーノ・スクライアなるフェレットがこの世界へと足を踏み入れたのだが、ジュエルシードを取り込んだ生物の反撃に遭い負傷。そこで偶然知り合ったこの少女、高町なのはへと協力を仰ぎ、晴れて魔法少女の誕生と相成ったわけである。

しかし、そんな衝撃的な人生を歩み始めたなのはの気持ちは、現在少し沈んでいた。

事の発端は数時間前に遡る。当時、彼女は父親の組んだサッカーチームの応援の折、ジュエルシードを持っていた少年を確認していた。見つければ封印すべきであったのは自明の理である。

だがしかし、感じた気配は確信的なものではなかったため、彼女

は気のせいだとして放置。結果、ジュエルシードの暴走により、一般人を含んだ一帯に被害が出てしまった。

幸い死人はなかったが、倒壊した建築物は多く被害レベルは甚大といえるものであった。

「いろんな人に、迷惑かけちゃったね・・・」

「そんな！なのははよくやってくれてるよ！本当は、僕が全部やらなきゃならないんだから・・・」

夕日に向かって立ちながら後悔を口にするなのはに、ユーノは気にしないでと何度も呼びかける。だが、彼女の顔が晴れることはなかった。平和のなかで育ってきた九歳の女の子にとっては、重過ぎる出来事だったからだろう。

ユーノの言葉を己の中で咀嚼し、なのはは自分がした行動と照らし合わせる。それからしばらくして何かを決意したような顔になり、ずっと眼下の街を見下ろしながら言った。

「私・・・自分なりの精一杯じゃなくて本当の全力で・・・自分の意志でジュエルシードを集めるよ・・・皆を守るために・・・皆が笑顔でいられるように・・・」

「なのは・・・」

それは少女のはじめての覚悟。魔法少女として選ばれたからやるのではない。幼いながらも、自分自身の意志で事件を解決することを決めた瞬間だった。

「もう誰も・・・誰も泣いたり悲しんだりしないように・・・誰も不幸にならないように・・・誰も・・・死ぬなんてことがないように・・・」

かつて家族の中で起こった記憶をその胸の内に投影しながら、なのは決意を新たに地を踏みしめる。そこに影はなく、また一つ成長した少女がいた。だが、宝石に戻ったレイジングハートをなのはが握り締めたその時、その内側から強烈な光が迸った。

「えっ!?!」

「な、何だ!?!」

突然の事態に、なのはとユーノは泡を食ったように落ち着き無くす。そこへさらに追い討ちをかけるように、レイジングハートから切羽詰った声が飛んだ。

「Master! It is Emergency!」

それに呼応するようにして、空気が揺れる。瞬間、漏れ出していた光が一際強く煌き、レイジングハートの中から何かが飛び出した。

現れたのは、先ほど封印したはずのジュエルシールドだった。シリアルナンバーに『X』と書かれた青い宝石が二人の前で浮遊する。神秘的な光を放ち、膨大な魔力の風が外殻を貫いた。

そこから放出される魔力は凄まじかった。その強大さを感じ取ったユーノが、焦ったように叫ぶ。

「なっ・・・ど、どうしてなんだ!?!ちゃんと封印状態になってい

たはずだ！それが、何もしてないのに解けるなんて！」

「Resealing, Master! Hurry!」

再封印を促すレイジングハートの声が辺りに響く。だが、それより早く、ジュエルシールドはなのはと己を繋ぐように魔力の線を描き、激しい明滅を開始した。その様子に、ユーノがはっとしたようになるのを見る。

「ま、まさか……なのはの魔力と今の意志に反応して……！？  
いけない！そこからすぐに……早く離れるんだなのは！」

「え……き、きゃあああつ！？」

声が響くとほぼ同時、彼女たちを強烈な光が包み込んだ。目を開けることなどできない、燐光のような青さを含んだ輝きが放たれる。なのはは目蓋の上から目を覆い、瞳を焼かれないように抑え続けた。

そして十秒か、十分か。天を覆いつくさんばかりに煌いたジュエルシールドの反応が薄れ始めた。そのまま徐徐に光を治めていき、ついには完全に消えてしまう。そしてゆっくり目を開けると、再び舞い戻った夕焼けが一人と一匹を包み込んでいた。

なのはは目蓋を擦り、白く濁った視界を正常なそれに戻す。

「う……一体何が……え？」

ジュエルシールドを探すために視線を巡らせる。だが程なくして、彼女は出掛けていた言葉を呑み込むこととなった。

目標たるジュエルシードについては、すぐに見つけることができ  
た。先ほどまで浮いていた場所、そのちょうど真下に落ちている。  
あの強烈な光はとうに消えているが、蒼色の魔力光は夕闇の中でも  
神秘的な輝きを放っていたので、見つけるのは容易だった。

だが、注目すべきはそこではない。見るべきは、ジュエルシード  
の下にある『何か』であった。

魔法石が転がっていたのは床ではなく、ついさつきまでなかった  
屋上に突如として現れた物体の上。夕日を受けながら盛り上がった  
物言わぬシルエットがただ存在していた。落ちたジュエルシードと  
寄り添うように横たわる姿に、二人はごくりと唾を呑み込む。

「な、なんだろう・・・？」

「わからない・・・でも気をつけてなのは」

流石にそのままというわけにもいかず、なのはとユーノは恐る恐  
るそれに近寄っていく。そおつとそおつと、虫も殺さないような足  
取りでゆっくりと。だが、傍まで来て『それ』を真上からそつと覗  
き込んだ二人は、驚きに声を上げることとなった。

「ひ、人・・・？」

なのはは呆然として言葉を零す。自分の目に見えているのは、紛  
れもなく人の姿をしていた。逆光がきつくてわかりにくいのが、そう  
としか思えない影が夕日の中に浮かび上がっている。

「男の・・・子、だよな？」

「う、うん・・・僕にもそう見える・・・」

倒れていたのは、男子であった。それも、なのはと同年ぐらいの姿をしたまま眠っている少年。その胸の上には、先ほどのジュエルシールドが鈍い光を放ち転がっている。

なのはは寝ている彼の上から、その全身を見渡していった。顔立ちや髪の色から、日本人にも見えないことはない。だが彼の姿は、おおよそ普通の少年とは懸け離れたものであった。

上半身は服等の覆うものは一切なく、胸元から腹までが完全に肌蹴られていた。その胸の中央、鳩尾の辺りは少し黒い染みが見え、体のいたるところに傷が見える。かなり鍛えられてもいるようで、全身にわたってすらりとした筋肉がついていた。

首にはオレンジ色をした真珠のようなものを連ねたネックレス、左腕には黒いバンドのようなものが通され、同じ色のハーフズボンを着ている。だが、そのどれもが丈の合わない服を着たようにぶかぶかな上、すべて傷だらけのボロボロだった。

左腕には『ASE』のSの字にバツテンが重なり、そのあとに同じ大きさでCが書いてあるという、なんとも奇抜な刺青が走っている。普通考えられないが、彫る文字を間違えたのだろうか。

髪はストレートと癖っ毛の中間ほどで、色は漆黒。長さは首の中ぐらいまで伸び、前髪は掻き揚げられておでこが覗いていた。手入れをしていないのか、随分と荒れ放題でボサボサであるが、それほどだらしのない印象は受けられないのが不思議だ。

頬にはそばかすが浮かび、その雰囲気は愛嬌を添えている。同時

に、整った彼の顔立ちに優しい印象を混ぜ込ませていた。

そんな彼が自分達の目の前で眠っている。等刻みに静かな息の音が聞こえてきていた。とりあえず、命に別状はないようである。

「え、えつと、ユーノくん……これって……」

おずおずと目を向けるなのは戸惑いを隠せずにいる。そんな彼女に向け、ユーノは表情を少し硬くしながら頷いた。

「ジュエルシードから人が出てくるなんて……同じような次元干渉型のロストロギアでもそんな前例は聞いた事がないけど、でも夢じゃないみたいだ……ジュエルシードをはじめ、ロストロギアにはまだまだ不確かな部分が多いから、何が起ころうとも……まったく不思議じゃない」

ユーノはそう言うと、倒れた少年の胸の上に落ちているジュエルシードを掴んだ。そこに先ほどまでの輝きや不安定さはない。今の相当の力を放出したためか、安定領域に達して沈黙していた。数日ほどすれば、力を自己回復させて輝きを取り戻すだろうが。

「と、とにかく、このままじゃいけないよね。救急車……はまずいかな……たぶん連れて帰ったほうがいいんだろうし、私もそうしたいんだけど……どうしよう、ユーノくん……?」

「うん……僕もなのは家に保護したほうがいいと思う。ご両親に説明するのは少し大変だけど、今回はジュエルシードが関わっているからね……十中八九、ただの一般人じゃない」

ユーノの言葉にそうだよな、となのはも同意する。元よりそのつ

もりであったが、これで方針は決まった。

とはいえ眠った相手、それも男の子を担ぎ上げるのは彼女一人では難しい。なのははユーノの魔法を補助としつつ、彼を家へと運んで行くのだった。

道すがら、なのはは眠ったままの少年を見る。その無垢な寝顔に、彼女はくすつと笑った。視線を戻し、少女は再び歩き出す。

出会いは突然。途切れたはずの物語が、また紡がれ始める。

強い願いが為した必然と共に。消えたはずの命を以って。

歯車を挿げ替えられた世界はそれでも進み続ける。それが彼女達だけでなく、これから先に数多の世界を大きく変える出会いであるということには、まだ気づかぬまま。

- Side out -

TO BE CONTINUED . . .

第一話 邂逅（共鳴する願い（後書き））

なのはと邂逅・・・というか世界を超えたところまでを書いた場面でした。

シーン展開が遅い！遅すぎる！！ああ、合間にちよくちよくやっていたせいかどこか文章も不自然に見えるし、全然話が進んでいない！もしかしたら、次回もこんな感じになってしまうやもしれませんが・  
・そこは作者の力量不足ゆえ、どうかご了承のほどをお願い致します。

散々な出だしとなってしまいましたが、これから頑張っていきますので、よろしければご拝読お願い致します。

それでは、また次回にて！

第二話 目覚めと生存 ～ 新たな世界（前書き）

長らくお待たせしてしまい申し訳ありませんでした。

タイトルからも分かる通りエースが目覚める、なのは達との邂逅編です。

それでは、どごぞー。

## 第二話 目覚めと生存 へ 新たな世界

『なははは、やっぱり生きてた。もうけっ』

海賊 ？ 麦わら？ モンキー・D・ルフィ

まどろみの中に光が見える。温かく優しい光。だが、どこか無機質な色を見せる不思議な光。

闇一色だったおれは、青く輝くそれに導かれるようにして、光が注ぎこむほうへと歩き出す。どことなく、マルコの再生の炎と重なって見えた。

光は徐々に強くなっていく。遠近感がはっきりとしないが、『近づいている』ことは本能的に感じ取れた。

『……………』  
『……………』  
何かか聞こえる。導き手となる光の先から、自分の耳に響いてくるものがある。彼はその方向に向かって、進み続ける。

『も……………』  
『いよに……………』

声はいまだに響いている。着実に近づいているはずだが、遠ざか

っているようにも感じた。なんとも不思議な響きだ。

『 - れも…… めな こと いやつに……… 』

諦めず、必死に手を伸ばす。いつしか、自分は急かされるように駆け出していた。

聞こえたそれは、願いだ。自分が弟の幸せを願ったように、これは誰かの願いなのだ。しかし、彼はその願いに何か危うげなものを感じ取っていた。

強く、そして温かき願い。それは止める事の出来ない、人の内にこそあるものだ。だが、それから寂しさを感じるのは何故だろうか。悲しさを押し殺す声が混じっているのは気のせいだろうか。

だから自分はそれを追う。走り続ければ、手を伸ばし続けられさつと届くと、そう信じて。

理由はと問われれば、答えるべくは何も無い。いや、彼にとってそんなものなど必要ないのだ。ただこの思いは放っておけない、彼の頭に浮かんでいるのはそれだけだった。

そして、追い続けること幾許だろうか。遠き先に見えていたそれと自分がだんだん近づいていく。そして遠く輝いていた光と、おれの心が触れあった。

『 誰も …………… 』

琴を鳴らしたような音を響かせ、感情の奔流が自分を包み込んでくる。温かくも切なく、儂くも強く編まれた思いは彼の心に一つの

言葉を残した。

吞まれていく意識の中に声が聞こえる。それが綴るのは人として本当に当たり前で、

『誰も……………死ぬなんてことがないように……………』

そして生きる上で尤も得難く、何よりも貴い願いであった。

「ん……………」

呻き声を僅かに上げ、おれは重いまぶたを押し開いた。

知らない天井だ。どっかで聞いたことがあるような語りはじめだったが、まじまじと見てもやっぱり知らない天井だった。

身体が温かい。柔らかく感じるのは上に乗っている布団のようなものだろう。

まどろみが再び自分を夢心地へと誘う。ゆっくり眠るのは久々で、柔らかい布団の感触が心地よい。この分ならいつまでも眠れそうだ。

自分を包む温もりに後押しされ、二度寝をしようと思いを閉じる。だがそこで、おれはふと看過できないモノを感じた。

感覚があるのは人として当然だ。しかし、そのことに豪く疑問を感じる。どうしてだろう、当たり前のことだというのに。

さつき何を見たのは天井と部屋。背中と正面に感じるのは柔らかい布の感触だ。それはいい。そのことに疑問は感じない。

おかしいのは、それを感じる自分自身。そして、そのことについて『考えることができること』だ。

(どこだ……………?)

頭がだんだんとクリアになってくる。そして、自分の置かれた状況をもう一度整理していく。常人にとっては明らかにおかしい疑問だが、エースは至って真剣だった。再度浮かんだ疑念を払拭するために思い出しタイムに入る。

時間にして数秒ほどだろうか。瞬間、電撃が走ったようにおれは覚醒した。今まで自分が経て来たことが大小を問わず、次々と頭の中を駆け抜けていく。

「っ!!」

動揺が極大に達し、混乱が心を支配する。衝動を抑えきれず、おれはまどろみを吹き飛ばして凄まじい勢い起き上がった。

(そうだ……………一番重要なことを何故忘れてた!?ここが何処かなんざどうだっていい!それより、何でおれは『生きてる』んだ!?)

跳ね除けられた布団がばさつと脇に落ちる。状況から見るに、自

分はやはりベッドに寝かされていたようだ。

目に映るのは明るい色を基調として整えられた部屋。そして少し不思議な、甘いような匂いもする。窓の外からは鳥の囀りも聞こえてきていた。

この感覚は正に『生きた』のものである。視覚、聴覚、嗅覚、それに手に感じる触覚も、何不自由なく機能していた。だが、そのことがおれを混乱させる。普通なら当たり前なことでも、彼にとってはこの上なく異常な事態であった。

(どうなってんだ……………おれは確かにあのとき……………)

過ぎつた感覚に頭を振り、着せられていた大きめのTシャツを恐る恐る捲る。すると、少し黒ずんだ自分の胸元がそこにあった。摩ると多少は痛むが腐ってはいないし、いきなり穴が空くなどということもない。

(……………在り得ねエと思うが……………おれは……………助かった、のか?)

奇跡が起きてすら不可能そうな可能性だったが、今ここにいるのだから仕方がない。おれは一つ息を吐き、見慣れているはずの自分の手をまじまじと見つめた。

(ま、分けわかんねエんだから考えても仕方ねエな。とりあえずは状況を整理するか……………ちっこいが手もちゃんとあるみてエだし、別になんとも……………ん?)

そこまで考えたとき、おれは頭によぎった何かに動きを止められた。もう一度、自分の手を見つめる。ひっくり返したり掲げたりし

て、平や甲をじっくりと観察しなおした。

見える手に変わったところはない。指が飛んでいるということもないし、甲に見慣れない文様が三つ付いていたり、指が六本や七本に増えているということも無い。至って普通の、自分の手のはずだ。

だが、それならこの違和感は一切なんなのだろうか。そもそも、何故自分の手に『見慣れない』などというものを感じるのか。いや、見慣れないというのは少し違う。

何だ、この感覚は。懐かしさ、いや何でそんな感覚が……、

(つて、ちょっと待て! ? なんだよ、このちっこさは! ?)

今の自分はベッドから上半身だけ起き上がった体勢だ。しかし、なんだか部屋がやけに大きく見える。見える視点もいつもより低い。

混乱しつつ、ベッドから飛び起きる。立った状態でも、天井がかなり高く見えた。だが最後の確信を得るため、おれは傍にあった化粧台の鏡に走り寄る。

そこに至り、ついに映し出された自分の全体像に目が飛び出そうなほどにぶつたまげた。

(な、なんじゃこりゃああああ　　っ! ?)

あまりのことに声すら出せない。思わず、ナイスリアクションとツッコミが入らんばかりのポーズを決めてしまう。何故か青キジのことを思い出したが、きつと気のせいだ。

まあそれはさておき、ほとんどを軽く流すおれがここまで驚くのは珍しいと言えた。しかし、それも無理ないことである。現在彼の身体は元のそれではなく、

(な、なんで……ガキの頃の姿になつてんだよ!！)

子供時代に戻ったようにその体躯が縮んでいたからである。見た目からして十年ぐらい前、サボヤルフィと悪ガキやつてた頃ぐらいに見える。

(何だよこのミニマムさは!そもそも何で身体が縮んでやがんだ!も、もしかすると、死んだら皆ガキになっちまうのか!?)

そんな話は聞いたことが無い。というか、当然のことだろう。今思えば、死んだら聞けないことをすっかり失念していたように感じる。

溜息を一つ吐き、脱力した体に力を込めながら大音量を喉に掻き込む。とりあえず出来ることと言えば、

「ったく………いったい何がどうなってるってんだっ!！」

起きている事態について行けず、思わず思い切りよく叫ぶことだけだ。意味などない、やり場のない感情の発露である。これくらいしないとやってられん。

ともあれ、叫んだら少しすっきりした。ともかく冷静にならなければと気を静める。と、エコーっぽく周りに反響していく声をBGMに添えつつ、もう一度考えに耽ろうとすると、

「きゃあっ!?!」

どこからか、くぐもりながらも甲高い悲鳴が響き渡った。その後、どさっという音がドアの向こう側から聞こえる。随分と幼く可愛らしい声色のようだったが、誰かがいるのは間違いないようだ。

しかしその実がどうであれ、この目で確認はしなければならぬ。おれは自分を写していた鏡を離れ、迷いなく歩いていく。そして、声が聞こえた方向にあるドアの前で止まると、それをゆっくりと押し開いた。

「……………へ?」

間の抜けた声が自分の口から聞こえる。視線は少し下気味に落としたまま、おれの顔は見事に固まっていた。

そこにいたのは尻餅をついている少女だった。今の自分と同じぐらいの年で、長めの髪をツインテールで結び、年相応のあどけなさを醸し出している普通の女の子である。肩にはペットであるうさぎが乗っかっていた。焼いて食ったら美味そうだ。

部屋の内装や見たことが無いタイプの可愛らしい服を着ていることからすると、一般家庭より少し裕福といったあたりだろう。しかし、自分はたぶん死んだ身だ。そうすると、こいつもこの世のものではないということになる。もしかすると自分と同じく幽霊、いや、はたまた死神と呼ばれる存在かもしれない。

ふむ。あの世の使いは鎌にガイコツつてのが相場っていうか、自分の中でのイメージだったんだが。この際どうでもいいか。

さて、突っ立っついても始まらない。そんな感じでまとめると、おれはとりあえず尻餅を付いていた女の子を引き上げる。そして自分の目で見た通り、思ったままを正直に口にした。

「へえ。死神にしちゃあ、随分と可愛いげのあるのが出てきたな」

「ふえっ！？え、えつと……あ、あの……ありが、とう……？」

褒められ慣れていないのか、そもそも褒められているのか微妙であるが、少女は頬を赤く染め上げる。おれの言葉に動揺しているようだ。顔の横にいる小動物が少し睨んでいる様な気がしたが、無視して視線を彼女に戻す。

そして状況は漸くの進展を見せる。しばらく赤くなっていた少女だったが、おれが放った言葉を完全に理解し終えたのだろう。はつとしたような表情をしたあと、手を思い切りわたわたと振り出した。

「……………つて私、死神なんかじゃないよ！？なのは、高町なのは！私立聖祥大付属小学校の三年生だよ！」

「ほ……………そのシリーズ製氷大工の風俗氷河期三年目つてのはよくわかんねエが、なのはが名前か。いい名前の死神ちゃんだな……………それはそうと、これからおれをどこに連れてつてくれんだ？まずは閻魔のおっさんに挨拶でもすんのか？それとも、お嬢ちゃんも死んで逝き先を待つクチか？」

「まだ誤解してる！？だからあ！私は高町なのはだよ！死神なんかじゃないし、幽霊でもないんだってばあ　　っ！！！！」

なのははギャグゲツサンの崩し顔になったまま、必死に叫ぶ。見たところは微笑ましい光景で、今は可憐な少女の姿であった。が、この後の人生で悪魔だの魔王だの呼ばれる日が来ることを、彼女はまだ知らない。

「あ、あの、なのは。とりあえずこの人に説明をしないと……………」

わたわたするなのはの肩に乗っていた小動物が、彼女を諭すように言う。まさか喋れるとは思っていなかったおれは僅かに目を見開き、不意を突かれたように声を上げた。

「うおっ、オコジョが喋った！能力者か！？」

「オコジョじゃないっ、フェレット！はあ……………あなたは一体何者なんですか……………僕が喋ることに対する驚きも普通より小さいですし、一般人じゃないとは思いますが……………やっぱり、魔法に連なる関係者なんですか？まさか次元漂流者なんてことは……………」

「次元漂流者？それに魔法だと……………？」

いきなり飛び込んできたファンタスティックな単語に、思わず首を傾げてしまう。それに対して少し驚きつつも、喋るフェレット

名をユーノ・スクライアというらしいが　　彼が事細かに説明してくれた。

自分の生まれのこと。世界へと散ってしまった21個の魔石『ジュエルシード』のこと。隣にいる少女、高町なのはとの出会いのこと。

と。そして……魔法のこと。中でも魔法の存在は、おれも初めてのものだった。

魔法とは、曰く、発動体に組み込んだ『プログラム』と呼ばれる方式であり、その方式を発動させることで起きる現象の総称。その方式の発動の為には魔力　術者に内在する精神エネルギーと呼ばれるものらしいが　を消費しなければならないのだという。

そして偶然も偶然だが、ここにいる高町なのはが異常なほどの魔力の保持者であったため、元から持っていたデバイス、レイジングハートを彼女に託し、搜索を手伝ってもらっていることなどを聞かせてもらった。前半はほとんど理解不能であったが。

そして自分がいる立場も、現在は次元漂流者ということでは落ち着いている。おれはユーノと入れ替わるように、自分の世界のことを話した。世界に広がる四つの海に偉大なる航路、ケラントライン『赤い大陸』レレットラインと呼ばれる大地、世界政府や七武海、四皇のことなどを事細かに、知りうる限りの世界のことを語り、内容は海賊王ゴールド・ロジャーのことにまで至った。

だが、なのはとユーノはエースの話に出てくるすべてに首を傾げ、その何一つとして聞いたこともないと言ったのである。子供でも知っている事柄や名前を次々に問いただが、二人は覚えも無いと首を振るのみ。おれにとっては、これが尤も驚くべきことであった。

そして、ユーノはエースの話から一つの推測を導き出す。非常に珍しい事例だが、おれという存在は、まだ未発見の次元世界（エースは理解できずに相変わらず首を傾げていた）から飛ばされてきた人間である可能性が高い、というものであった。詳細は不明だが、何からの弾みで世界の壁を超え、偶然にもこの世界に来てしまった

のかもしれない、とユーノは語る。

もつとも、自分のいた世界とはまったく違う世界に来たなどいきなり言われても、当の本人はイマイチピンと来ない。なのは達には話していないが、おれ自身はあの時間違いなく死んだと思っていたのだから。

それが何故か縮んでしまっただけはいるが、ちゃんと生きている。そのことだけでも驚嘆モノだというのに、いきなり世界を超えたただの、その理由がロストログアとかいう道具の影響だのと聞かされても、実感など湧くはずもなかった。

そもそも魔法や次元漂流などというのは、ユーノ達の世界の常識である。土台としての知識がない人間では、説明をされてもほとんど意味を成さない。おおよそ程度でも理解できれば上等ものだろう。

小難しい話におれは頭を捻る。そして、眉を寄せながら二人を見て唸った。

「正直まったくわからねエ……………これこそ未知との遭遇か。それにしても、魔法ね……………おとぎ話とかではよく聞いたが、そんなものがホントにあるなんてのは初耳だな」

それは本当のことである。自分が元いた世界では、？魔術師？、？悪魔？などファンタジー感あふれる肩書きを持つ海賊はいるが、ストレートで自分が魔法使いなどという人物は初めてだった。

（まア、おれがここに『いる』んだ。その時点で、何があってもおかしくねエとは思ってたけどよ……………それにしても……………）

腕組みを解いて交互に二人を見回す。考えている素振りを見せながら　　本当にそうなのかは不明だが　　顎に手を当て、興味深い生き物を見るように首を捻った。

「ふくん……………お前ら、魔法使いなのか」

さしたる感動もなく、ただ淡々とした感想を口にする。おれ自身も少し意外だが、まるで動じていないようだった。その態度に目を見開いたなのはが、恐る恐る尋ね返した。

「お、驚かないの？魔法のこと、今までまったく聞いたこともなかったんだよね……………」

「ああ、いや……………魔法使いつてのを聞いたのは今が初めてだし、確かに驚きもしたぜ？けどおれの世界じゃ、そんなもんよりずっとぶっ飛んだレベルの連中がいくらでもいたからな。それもおれの周りにわんさか、世界規模じゃ数えきれねエぐらいだった。それを今更この程度じゃ、そこまで驚かねエよ」

「ま、魔法を『そんなもん』とか『この程度』って……………い、一体あなたはどんな世界から……………」

ユーノが驚き半分、呆れ半分といった表情で見つめてくる。だがそれはお互い様だった。こっちからすれば、世界政府や海軍本部、白ひげの名前など、世に知れ渡るモノを知らないという方がびっくりなのだ。それに比べればなんてことはない。

一人と一匹の間に座っていたなのはが、「は……………」とおれを感心した風に見つめて言った。

「ふええ、私はすごく驚いたのに……でもそう言うってことは、あなたの世界にも特別な力があるってこと？そういえばさっき、ユ一ノくんのことを『能力者』って言ってたけど……」

「あー、それは「なのは」、どうしたの？」

彼女の質問に答えようとした時、それを遮るように声が聞こえてきた。温かさを感じる女性の声だ。同時にトントンと階段を上がる音が響いてくる。

すると、なのはが慌てたように手を振った。

「あつ、もう帰ってきちゃった！あのつ、お話はまた後で！今から来るのは私のお母さんなの。そこでちょっとお話というか、説明をするかもしれないんだけど、慌てないでね！」

「そいつはかまわねエが……おれはどうすりゃいいんだ？」

「そうですね……とりあえずなのはに話をあわせて下さい。それとなのはが魔法使いだってことや、僕が喋れることとかは他言無用でお願いします」

ユ一ノの念押しに「おう」と頷く。足音はすぐそこまで迫ってきていた。

とりあえず様子を見るべきだ。今分かっていることは、自分がいる場所がどうやらあの世じゃないらしいこと、そして小さくなってもいまだ生きていること。そして、それを為したのが魔法とかいう力で、ここにいる二人がその関係者だということだ。

だが、それだけ分ければ十分だ。この二人も敵対する気ではないようだし、ウソを言っているようにも見えない。加えて世界が違っているという言葉を採用すれば、別段急ぐこともないだろう。自分の名前を聞いても驚かないのがいい証拠だ。

もう少し時間を置いてみよう。今は、まだ動くには早すぎる。と、そこまで考えたとき、部屋の扉が開かれ声の主が現れた。

「なのは、ただいま。お留守番ありがとう、お土産買ってきたから一緒に食べ……あら？」

「あ、お邪魔させてもらってます」

なのはに帰宅を告げようとした女性が、ベッドに腰掛けたおれを見とめた。おれがお辞儀したことにか、それとは全く違うことには分からないが、なのはは少し驚いている。だが、桃子の方は優しい表情を見せると腰を折って視線を合わせてきた。

「やっと目が覚めたのね。私はなのはの母で、高町桃子と言います。なのはがいきなり貴方を連れてきたときは本当にびっくりしたけど、元氣そうで何よりだわ」

そう言うのにこりと微笑む桃子。笑った感じがなのはとそっくりだ。何となく、母親という言葉が頭に浮かんだ。今は幼い彼女も、将来はこんなふうに温かく優しさを持つ女性に育つのだろうか。

いや、人生いろいろあるからな、まだ分かんねエか。

「お、おかえりお母さん。あのね、目が覚めたから私がお世話してたの。えっと……その、この人はね旅人なの！とつても遠い場所

から来たんだって！」

さっそくなのはが母におれの説明を開始する。身振り手振りを織り交ぜながら、一生懸命に桃子を説き伏せようとしている。しかし、遠くから来た旅人か……あまりに在り来たりすぎて、子供でも分かりそうな言い訳だな。

見ると、黙っていると言ったユーノも頭を抱えていた。彼女の説明に気が抜けずにいる感じが、此方にまでひしひしと伝わってくる。

しかし天然なのかいい人なのか、それとも全て分かって見逃してくれているのか、桃子は「まあ、そうなの」と柔らかな笑みで相槌を打つ桃子母。「そ、そうなんだよ」と引き攣った笑みを母親に返している娘。

こちらへんはやっぱり親子だな。

「遠いところから……見たところなのはと同年ぐらいなのに、一人で旅なんてすごいわね。でも、それならご両親が心配してるんじゃないかしら？」

「えうっ！？あ、あのその、それは……」

「いくら旅をしてるって言っても、彼はまだ子供でしょう？倒れたんだから連絡ぐらいいは入れた方がいいわ。それに、保護した側にはそういう義務もあるのよ？」

「ふええ、ええと……あうあう……」

しかし当たり前だが、彼女のほうが一枚も二枚も上手だった。ザ

ツクリと核心を突かれたのはが、慌てて答えを探すように視線を泳がせる。そもそも連絡する先がないのだから、焦りもするだろうが。

まさか自分が集めていた魔法の石が突如として光って、その中から唐突に現れました、なんて言えるわけがない。バカ正直に言ったところで信じてもらえるか分からないし、それではなのは達との約束を破ることになる。

それに加え、仮に彼女が信じてくれたとしても、その場合はユーノの正体や彼女が今いる状況まで、すべてを説明しなければならなくなってしまう。それでは元も子もないのだ。

とはいえ、この差し迫った状況の打破を彼女だけに任せるのは少し酷かもしれない。そんな感じでユーノが頭を悩ませている横で、桃子は娘の様子に首を傾げながらもすつと立ち上がった。

「目が覚めたならちようどいいわね。とりあえず彼に連絡先を親なんざいねエよ」 「「えっ？」」

桃子は、おれがいきなり言葉を発したことと、聞こえた台詞に動きを止める。なのはも驚いているらしく、その声は見事に母親と重なっていた。フェレット形態のユーノも、驚いたように此方を見ている。

おれは三人分の視線が集まったのを確認すると、淡々とした口調で語り出した。

「物心つく前から、おれには両親なんていなかった。顔も覚えちゃいねエ。育ての親はいたが、それも随分前に別れてそれっきりだし

な。それに途中で倒れてたのも単なる空腹のせいだって、さつきそう話したろ？おれに気を遣ってくれんのは嬉しいが、無理に隠さなくてもいい」

「……………え、あ……………う、うん！そういえばそう言ってたね！すっかり忘れてたよ……………うん、そうだったそうだった」

おれが放った言葉に、なのはは引き攣った顔を隠すように何度も頷いた。どうやら今の進言を自分への助け舟だと思っただらしい。ユノと顔を見合わせながら、心から安堵の息を零している。

反対に桃子は、その表情に申し訳なさそうな色を宿していた。

「そんな事情が……………ごめんなさい、踏み込んだことを聞いてしまったわね……………少し無神経だったわ……………」

「気にしないでくれよ。こっちは助けてもらったんだ、礼を言うことはあっても、文句なんてあるわけがねエ。それにいくら助けたって、相手の素性ぐらいははつきりさせておきたいだろうからな。そう言うのは当たり前さ」

おれはできるだけカラツとした口調で、桃子の謝罪を押しとどめる。桃子はそのことに僅かに目を見開くが、すぐにもう一度微笑みを浮かべ、「ありがとう」と返した。

そこで、桃子が何かに気づいたようにポンと手を打った。その視線が再びこちらに戻ってくる。

「そう言えば、貴方の名前をまだ聞いていなかったわね、なのはは聞いたの？」

窺うような視線で尋ねる母に、なのはも「あ……」と口を開けた。どこか抜けているように思えるのは、きっと親子だからだろう。彼女らしいと言えば、これ以上ない褒め言葉だ。

ちなみにユーノは分かっていたのだが、フェレットなので喋れるはずもなく、またおそらく知らないであろう念話でこっちを驚かせてもまずいと思い、なのはが切り出すのを待っていたらしい。

この心遣い、どこかの空気の読めない男に『エアリーディング講座』として教授して欲しいものである。もつとも違う意味では、現在渦中の人物である『彼』も『彼の弟』もかなりのエアブレイカーだが。閑話休題。

「そ、そう言えば、まだだったよ、あ、あははは……えっと……」

一番重要なことを忘れていたのが恥ずかしいのか、少し赤い顔でこっちを見つめるのは。桃子とユーノも言葉を待つように見つめてくる。おれは自分から名乗らなかつたことを少しだけ悔やみながら、口元をニイツと吊り上げて自らの名を告げた。

「エースだ。ポルトガス・D・エース」

TO BE CONTINUED . . .



## 第二話 目覚めと生存 〱 新たな世界（後書き）

第二話でした。

相も変わらずの駄文、申し訳ありません。

というか、またもや話が進まない！！ 次回は少し時間が飛びますが、はてさていつになることやら……

しかし、細々ではありますが、書いていくつもりなので、よろしければこれからもお付き合い頂きたい思います。

では、また皆様にご拝読していただけることを願っております。

ツァイツェン  
再見！

### 第三話 温かなる友 〱 胎動（前書き）

予告にあった通り、ストックとして残っていたものを修正しての投稿です。

完成しているストックは残り一つ、もう一つはあと少しで完成するのが一つありますが、果たして忙しい中で可能かどうか。

ともかく、第三話いってみましょう！

### 第三話 温かなる友 〱 胎動

『ガキの頃から欲しかったものがある

……………家族』

白ひげ海賊団船長 四皇？白ひげ？エドワード・ニュー  
ゲート

「ねえ、エースくん。本当に来ないの？」

「ああ。今日は桃子さん達が働いてる、翠屋つてのの手伝いをする  
つて昨日言っちゃったしな」

廊下の手前、玄関へと続くドアのノブに手を描けたなのはが、振  
り返りながら言った。彼女の視線と声の先には、黒いハーフズボン  
に白いTシャツを着込んだエースの姿があつた。今はフェレット然  
としてゐるユーノも、気が引けたような雰囲気を感じさせてゐる。

エースがこの世界に来てから早いもので、もうすぐ一週間が経と  
うとしてゐた。目覚めた日にした説明で、エースは親なしの旅人と  
いう立場になつてゐる。後から帰ってきた恭也や美由希も、桃子か  
らエースの事情を聞かされて驚いてゐたが、そのことを彼自身が欠  
片も気に留めてゐないことに感心し、特に温和な美由希はすぐに彼  
と打ち解けてゐた。

エースはそのまま夕食をご馳走になり、その後次の日には出て行  
くから一晩だけ置いて欲しいという旨を高町夫妻に申し出た。だが、

それはすぐに却下されてしまった。

そして、気落ちする彼が代わりに言い渡されたのは、

『行く当てがないのなら、しばらくウチに住むといい』

という魅力的な提案であった。

初日に言われたことを思い出す。ユーノは、『この世界』がエースのいた世界とは全く違う世界だと言っていた。通常には不思議な力が存在しない世界だとも。

その言葉を信用し、ここが自分の常識が通じないような場所だとするならば、生きていくのも前と同じやり方というわけにはいかなくなる。歯痒いが自分から騒ぎを起こしたくないし、大恩ある高町家の人々に迷惑を掛けるのはもってのほかだ。

それにまだ話してはいないが、自分は魔導師でなくとも『海賊』で、その上『能力者』なのだ。その力は、元の世界ですら伝説とまで呼ぶこともあるほどの異質なモノ。

力の行使を見られるのがご法度なのは言わずもがなであるし、比較的平和なこの世界は、前の世界以上に『そういう要素』を嫌悪や好奇の対象とすることも聞いていた。不用意な行動や立場を避ける上でも、桃子たちのバックアップは必要だった。

それに、協力者が近くにいるという点も大きい。事情を知っているのは、今のところなのはとユーノだけだ。この世界で唯一腹を割って話し合えるこの二人といつでも連絡が取れることを考えれば、実に願ったり叶ったりの話ではあった。

だが、見ず知らずの自分を助けてくれ、一飯を施してくれただけでも忍びないのに、そのうえ好意に甘えて転がり込むなどというのはあまりにも図々しすぎる。そして、そこまでしてもらおうのは流石に悪いと思っただけでもあり、エースも当初は断っていた。

しかし、「子供なんだから遠慮しないの」と優しげに諭す桃子と、「一緒に住もうよ!」と押してくるなのはをかわしきれず、結局根負けする形となってしまった。その代わりに、住まわせてもらう間は家の手伝いをするという条件を半ば強引に認めさせたのだが。

そして本日は翠屋のホール手伝いに落ち着き、話は冒頭に戻るというわけである。エースは手をひらひらと振りながら、二人(?)に向かってにこやかに笑って見せた。

「それに、そもそもお前の友達に会いに行くんだろ? そんなら尚更だ。なのはとは友達でも、初対面のおれがいきなり行ったら気を遣わせちまうからな」

「そんなことないよ! アリサちゃんやすずかちゃんはとつてもいい子だから、きっとエースくんも友達になれると思う!」

胸の前で拳を握り締め、なのはが力説する。その後ろから桃子がゆっくりと歩いてきた。

「エースくん………翠屋は私達だけでも大丈夫だから、二人と行って来たら?」

桃子がバツの悪そうな顔で再三の進言を口にした。

昨日の昼間、エースに手伝いを頼んだのは他ならぬ彼女だ。その時は軽いお願い程度であつたため何も問題はなかつたのだが、その日の夕食でなのはが友人である月村すずかの家にお呼ばれされたことを告げた時、事態は発覚した。

なのははウキウキ気分でエースもどうかと誘つたのだが、彼は手伝いがあるといつてこれを断つたのである。まさか断られるとは思つていなかったようで、なのはは夕食の最中、ずつとしょんぼりしていた。そんな心底残念そうな表情をする娘を見た桃子は、

『店のことは気にしないでいいから、行っていらつしやい』

と、手伝いを白紙撤回することを述べて、何度も彼と一緒に行くことを勧めた。だが周りの人間がどんなに言おうとも、エースは頑として譲らなかつたのだ。そして、そのまま今に至るわけである。

「気遣いがありがてエが、店の手伝いをするのはおれ自身が決めたことだ。頼まれ事だとはいえ、元々筋はきつちり通すのが性分なんぞでな。今回はおれの顔を立てるつてことで勘弁してやってくれ。それに、知り合う機会ならこの先いくらでもある。とりあえず、今回はお前からで思い切り楽しんで来いよ」

一点の曇りもない、さわやかな表情でエースが笑つた。今時の少年ですら、ここまで真つ直ぐな表情を出来る者は早々いないであろう。我慢をした様子はなく、心を真つ直ぐに投影したような笑みに、なのは達の視線はエースに引き付けられる。

そう言われてはもはや何も言えない。今回は諦めるしかなさそう  
だ。

なのはは少し残念そうに肩を落としたが、エースの顔を見て少し気持ちが軽くなったのかしつかりと頷いた。美由希と桃子の二人がそれに苦笑しつつフォローに回っている。恭也が少し驚いたようにエースを見据えた。

「ほう？まだ若いっていうのに、随分といい心がけじゃないか。なのはのことを察して思いやるだけでなく、その歳で一度決めたことを曲げないとは大したもんだ。大人びているのも、一人旅してきて得た『強さ』か。美由希もポートガスを見習えよ？」

エースの芯の強さを見抜いたのか、恭也が珍しく賞賛を口にした。さも高く評価しているような口ぶりであるが、なんだか当てつけのように聞こえる。桃子となのははそんな兄の様子に苦笑いを零していた。

事実、エースがこの家に 正確にはなのはの隣の部屋に住むといった際に一番手間取ったのが、実は彼とその父の説得作業であったりする。

「むっ、それは恭ちゃんもでしょ。エースがウチに住むって言った時、お父さんと一緒にすごく渋い顔してたのは一体どこの誰だったかな？ ま、心配なのはわかるし、なのはが可愛いのも本当だけど、あんまり気にかげすぎるとシスコンだって嫌われちゃうよ？」

「なっ！？ だ、誰がシスコンだ！ それに、俺は別に反対してない……」

相変わらずの仲のよさで、二人はいつものようにぎゃいのぎゃいのやり始める。なのはもそれを見て、少しではあるが気が晴れたよ

うだ。肩に乗ったユーノと笑い合っている。

エースは、真正面から言い合いを続ける二人に肩を竦めながら礼を言った。

「すまねエな恭也。美由希ちゃんも、おれが住むのを許可してくれてありがとよ。いきなりだったのに受け入れてくれたこと、ホントに感謝してるぜ」

「…………困っている者を放っておくのは、俺の矜持が許さないだけだ。それよりポートガス！ 呼び方は恭也『さん』だと、昨日もあれほど言っただろう！」

「あはは、相変わらず恭ちゃんは神経質だね。けど、無理に敬称とかを付けられても居心地悪いから、私はそのままでもいいよ。確かに年は離れてるけど、エースくんが言う何だか全然違和感ないし」

厳格な注意を口にする恭也に対し、美由希はカラカラ笑いながら軽くOKサインを出す。堅物の兄と快活でおおらかな姉という二人らしい反応であった。しかし今はどうあれ、生きてきた実年齢から言えば違和感がないのは当然なのだ。

「はは、わかった。とりあえず、なのはへのフォローを頼むぜキョウ。それから、あとで手伝いの指導をよろしくな、美由希ちゃん」

「親しく呼べとは言ってない！ 人の話を聞け！」

「あはは、こちらこそよろしくね」

騒がしいものの、いやな空気はない。恭也の方はまだやりとりに

若干の硬さが残るものの、美由希はなのはと並んで新しい弟分ができたことに、嬉しそうに笑っている。恭也は一連のやり取りに疲れ、たよように息を吐いた後、玄関を出た先でリュックサックを背負っていたなのはに近寄った。

「さあなのは、そろそろ行かないとバスに間に合わないぞ。ポートガスを紹介するのは、また今度の楽しみに取っておけばいい」

「うん、わかった……じゃあ、次は絶対一緒に行こうね、エースくん！」

残念だった気持ちが続を待つ楽しみに変わったのか、なのはが満面の笑みで手を振ってくる。エースはどこか懐かしさを覚えながら、二人へと手を振り返した。

「おう！ 約束だ！」

エースが力強く宣言するのと同じくして、恭也に急かされたなのはが急いで門を潜っていった。ギリギリになってしまったのは時間いっぱいまで自分を待っていたせいだと思つと、少し悪いことをしてしまった気分になる。が、なのはも納得したようだし結果オーライでいいだろう。

二人の姿が通りの先へと消える。エースは振っていた手を下ろし空を見上げた。天気は快晴。絶好のお出かけ日和である。

それを見てふつと笑い、エースは視線を戻した。後ろから自分を呼ぶ桃子の声が聞こえる。おそらく今日の仕事に関することだろう。

スパツと気持ちを切り替えるべく、エースは自分の頬を軽く張っ

た。

（なのはの誘いをケツてまで残ったんだ、キツチリ仕事しねエとな  
！）

なのはの実家であり、高町家が経営する喫茶翠屋は、地元密着型の多目的飲食店である。集客率も高く、小学生ぐらいの子供から老年寄り、カップルや買い物帰りの主婦までと、客層はほぼ全年齢に及ぶほどだ。

しかも単なる昼時の食事処としてだけではなく、ケーキや紅茶などがおいしいことや店員が美人や美男子であること、また内装が洒落ていることも有名で、多くの人々にとっても憩いの場としても幅広く利用されている。

翠屋の概要を述べれば、大体そんな感じだ。説明されれば分かるとおり平日から客足の絶えない店ではある。がしかし、誰もが時間を作れる休日ともなればその傾向もより強まるのだ。

さらにそれが開店直後ともなれば、てんてこ舞いな忙しさになるのはいつものことであった。

「エースくん！ これ三番テーブルにお願いできるかしら？」

「おう、まかしとけ！」

決して広くはないが、満席状態にある翠屋店内。その隙間をすい

すい走りながら、エースはカウンターとテーブル席を往復していた。新たにカウンターに上がった、二品を片手に叫ぶ。

「こつちはどうすんだ士郎さん！」

「ああ、その二つは五番と七番だ！ あと、それが終わったら一番からの注文を取ってきてくれないか！」

「了解だ！」

「お母さん、新しいお客さんが三人来たよ！」

「空いた六番に案内してくれるかしら！」

そしてエースだけでなく、高町夫妻や娘の美由希もお菓子や料理を作ったり、店内のお客を捌いたりと大忙しだった。美由希や桃子は流石に慣れているのか、接客や作業に淀みがない。しかしエースもかなり器用で、初っ端から作業を効率よく勧め、客受けもいい。

お客が入ってはそれに應對し、注文を聞いて食事を運び、そしてお会計。流れとしては単純であるが、翠屋のそれは人数が多いため、皆汗を流しながら働いていた。しかも、これでいつもに比べて少ないのだから驚きである。

しかし、そんな鬼のような時間も終わりは来る。開店から二時間、ピークを過ぎて客足がようやく落ち着いてきた。そして、そのときを見計らっていたかのように、桃子がエースを呼びつけた。

「エースくん。少し遠くなるんだけど、ちょっとお使いを頼まれてくれないかしら？」

内容はお届け、まあ早い話が出前みたいなものだった。内容はケーキの配達である。しかし、そのことに関しての説明を受けながら、エースは軽く首を捻っていた。

「そりゃあいいが……おれはまだこの辺りのことは知らねエぞ？それに、いつもならこれからが忙しくなる時間なんじゃあ……？」

「ふふ、そうね。でも、今日は他でちょっとしたイベントがあるから、夜まではあまり人が来ないと思うわ。それで、私達だけでも十分なところはちゃんと回せるから、エースくんにはそちらの方をお願いしようと思ったわけなの」

成る程、といったふうにエースは納得する。いつもより人が少なかったが、朝早くから多く入っていた理由はこれだったのだ。桃子は合点したように頷くエースにこりと微笑むと、あらかじめ用意していたと思われるケーキボックスとお金、そして二枚の紙を取り出した。

言わずもがな、届けるケーキとそこまでのバス代金に地図兼案内書である。もう一つの紙は茶封筒に入れられ、誰かの宛名が書かれていた。

「地図とそこまでの行き方を書いておくから、その通りに行けば大丈夫よ。あ、読み方は分かる？」

小首をかしげながら、少し心配そうに桃子が問う。小首を傾げる感じは本当になのはとそっくり、というか幼い少女のようだ。エースはそれに苦笑すると、口元を吊り上げて自信満々に返答した。

「ああ、これでも旅人なんだな。バスも一度なのはと乗ったから大丈夫だ。そんじゃ、行って来る」

「お願いね。もう一つの封筒は、お家の人に渡してくれればいいわ」

実に頼もしい返答をし、桃子の声を背中に受けたエースが扉を潜って外へと出る。日の光が眩しい。本当に、いいお天気とはこのことだ。

エースは渡された紙へと目を落とす。そして、懇切丁寧に書いてある順路どおりに、まずはバス停の方へと向かおうとして、

「んん？ 今まで宅配なんてやってたか？」

と一瞬気になることを思い浮かべるが、その考えをこれまた一瞬で横へと放った。まだ自分はここに来てからの日が浅い。なら初めてとなることも多いだろう。

寧ろ、その仕事を自分に任せてくれた彼女達に感謝すべきかもしれない。そこまで考えた時、唐突にクラクションが鳴り響いた。見ると少し先にあるバス停に、ちょうどよく目的のバスが到着している。

「ま、取り合えずはしっかりと届けることにするか！」

気合一番、勢いよく駆け出すエース。そして、そのまま風の如く疾駆し、小学生にはありえないほどの速度でバスへと飛び乗るのだった。

同時刻、喫茶翠屋接客ホール

「うっしっし、お母さんもなかなかやるねー」

「うぶぶ、何のことかしら」

顔を付き合わせた母娘<sup>お母</sup>が、どちらも意味深な笑みを浮かべていた。

T O B E C O N T I N U E D . . .

### 第三話 温かなる友 〵 胎動（後書き）

エースがお世話になり始めてから、原作本編の第四話が始まるぐら  
いまでのお話でした。

文章量の割りに結構難産だった今回のお話ですが、次回ではついに  
あの二人とエースが邂逅を果たします。

はてさて一体どうなることやら。面白い展開を書けているといいの  
ですが・・・これからは少しでも目に留めてもらえる文章を書ける  
ように頑張りたいです。

それではまた次のお話でお会いできることを願って。

ツァイツェン  
再見！

P S

実家の仕事が忙しさを増し、パソコンへ向かえる時間も限られてき  
ました。なので、感想を返信するタイピングがバラけるやもしれま  
せんが、どうかご了承のほどをお願い致します。

それでは、風邪などお気をつけて。駄文小説家見習い、コエンマ  
でした。

第四話 お茶会 ～ 変わり出す日常（前書き）

お久しぶりです！

一ヶ月ぶりぐらいでしょうかね。いや、もつとか・・・時間が空いたので、兼ねてからお知らせしてあった最終ストックを放出いたします。

まだリアルが終わっていないので、お待たせしてしまうことになるやも知れませんが、どうかご了承のほどをよろしくです。

それでは、久々の第四話いってみましょう！

第四話 お茶会 ～ 変わり出す日常

『友達………だからよう』

Mr. 2 ボンクレー

「こんにちわーっ！ 翠屋からお届けものでーす！！」

エースは鉄製の錠が掛かった門の前で大声で叫んだ。

エースがここへ来たのは数分ほど前である。バスに揺られることしばし、加えて人に道を聞いたりすること数回ばかり。地図を頼りに目的の場所へ辿り着くことは出来ていた。

目の前にあるのは豪邸という言葉が似合うような、それはもう立派なお屋敷と門。庶民などとは比べるべくもない、明らかにお金持ちが住むような家であった。以前までもこれ以上の規模を持つモノは見たことがあるが、この世界に来てからは初めてだ。

そんな豪邸を前にしばらく感慨に耽っていたエースだったが、ここへ来た目的は宅配だ。遊びに来たわけではない。門兵がいれば取次ぎを頼めるのだが、生憎そういった人間も見当たらなかった。

そこでとりあえず、先ほどからこうして呼びかけているというわ

けだ。出来る限りの大声で、誰かに聞こえるように。だが屋敷が大きいせいか、全く反応がないことに少しだけ気落ちした。

普通にインターホンを押せば済むことなのだが、エースはその存在を知らない。そのような便利なものなど元の世界にはないので、彼にとっては呼びかけるぐらいしか方法がないのだ。この世界に関する常識のなさが、本人の与り知らぬところで早速ネツクとなっていた。

「ふう、仕方ねエな……………」

応答がないことにエースは一つ溜息を吐く。どうやらやり方を変えるようで、彼は携えていたケーキボックスを小脇に抱え、中身がぐらつかないように固定した。加えて、何度か屈伸して腱と筋を伸ばす。

そして用意が出来たのか、彼は少し後ろに下がった。もう一度袋の中を確認して、門を見上げる。そのまま足に力を込めて地を蹴り

「よいしょ……………」と。それじゃ、お邪魔します」

次の瞬間には、着地した？門の上？で直立姿勢をとって、綺麗にお辞儀をしていた。視界が広がったことでお屋敷の大きさを再確認したエースは、周りを見渡して「やっぱ、でけエなア」と好奇心に満ちた笑みを浮かべる。

軽く流されてしまったが、信じられないような光景が人知れず展開されていた。なんと彼は、自身が持つ脚力のみを使い、あろうことか巨大な鉄の門の上に飛び乗っていたのだ。ぴよんと擬音が付き

そんなほどの身軽さを以って、何の造作もなく。

もし目撃者がいたのなら、実に目を疑う光景だっただろう。何せ、どう考えても見た目にして小学生ほどの子供が碌な助走も道具もなしに、高さ五、六メートルはゆうにあるだろう門まで一息たらずで跳躍したのだから。オリンピックの高飛び選手も真つ青な、人間離れした身のこなしである。

さらに、エースは一礼しながら一言申すことも忘れていなかった。他人の邸宅に入る際の、人としての礼儀である。この丁寧さは近年常識の欠けつつある日本人も見習うべきといえよう。人家への不法侵入というその一点を除けば、であるが。

しかし、初めからそのつもりなら挨拶の意味はあったのだろうか……謎である。

そんな感じで、エースは門で仕切られていた道の先へと降り立った。慎重は期したが、飛び越えた時にケーキが型崩れしていないか一応調べる。それに何も問題がないことを確認すると安堵の息を吐き、遠くに見えるお屋敷を見つめた。

「っと、家までけっこう離れてんな。手間取って桃子さん達を待たせちまうのはアレだし、急いで人を探

「独り言を終わりにし、歩き出そうとしたエースの足が止まった。探られるような気配が満ち、場が張り詰める。エースが瞬時に気配を辿って辺りに気を配ると、もっとも大きな気配を放っていた草むらから一人分の影が現れた。

「インターホンも鳴らさずに敷地内へ足を踏み入れるとは、随分と

無作法な来訪があつたものですね」

透き通つた声で皮肉を口にしながら、一人の女性が出てきた。紫の下地に白のフリルを彩つたメイド服を着込み、薄紫色の髪を持つ年上の女性である。顔立ちは間違いなく美人の部類に入るだろうが、その目は細められ、友好的とはいいがたい視線を放っていた。

身体が不自然に膨らんでいるところを見ると、暗器か何かを仕込んでいるようである。

「顔に見覚えはありませんから、初めて来た方の方のようですね。目的は存じませんが、白昼堂々真正面からとは私も流石に驚きました。ここが月村家の私有地であることを知って侵入したのですか？」

敵意が増大する。見た目はただのメイドだが、明らかに実戦慣れしているような気配だ。尤もエースを相手取るという構図からすると、この世界常識の範囲内で、という条件付きだが。

とはいえ、エースは別に戦いに来たわけではないので、この状況には少し困っていた。力で押し切ろうと思えば容易いだろうが、それでは何をしに来たのか分からなくなってしまう。

そもそも今の自分は配達人だ。お届け物を頼まれた先で乱闘なんてした日には高町家にも迷惑がかかるし、ケーキも台無しになる。それに加え、恭也などから何を言われるか分かったものではない。

エースは相手を刺激しないよう、努めてゆつくりと穏やかな声を発した。

「侵入か……………一応、何度か声は掛けたんだが……………ま、それな

ら改めて言わせて貰う。おれはポートガス・D・エース。翠屋の高町桃子さんって人に言われて、この家に届けものをしに来ただけの配達人だ。端からそんなつもりはなかったし、こっちには敵対意志もない。門を飛び越えたのは少しやりすぎだったかもしれない。が………つと、そついや桃子さんからの手紙も預かってたっけなとりあえず、それを見て決めてくれよ」

両手を挙げて敵意がないことをアピールしながら、エースはひらりと茶封筒を振り、そして先方へと投げ渡した。メイドの女性は此方から意識を外すことなく、受け取った手紙を素早く開き、凄まじい速さで目を左右に往復させる。すると、強張っていたその表情から次第に険が抜け落ちていった。

そして、最後に手に持った手紙とエースを見比べてから、丁寧に茶封筒へと仕舞った。同時に威圧感が霧散する。そしてメイド服のスカートを掴むと、優雅ささえ感じさせる動きでゆっくりとお辞儀した。

「筆跡と文に見覚えがあります。間違いなく桃子様の書かれたものですね………申し訳ありません。なのはお嬢様のご友人とはつゆ知らず、大変な失礼を致しました。私はこの家でメイド長を務めているノエル・K・エアリヒカイトと申す者です。先の無礼をお許し下さい、ポートガス・D・エース様」

最初の態度とは一転、これ以上ないほど美しい礼を決めるノエル。エースは感心したように彼女を見つめた。そして、自分も同様に頭を下げながら言う。

「いや、いきなり乗り込んだおれもおれだ。つい、いつものノリでやっちゃまったから、ともかく頭を上げてくれ。それとおれには敬称

は要らねエよ。普通に『エース』でいい」

今だかつて呼ばれたことないほどの、くすぐったい敬称を外すことをエースは提案した。しかし、「お客様相手にそのような態度をいたすわけには参りません」と毅然と返される。職務への忠実さに苦笑するエースにノエルは少しだけ表情を和らげながら、奥の庭園へと目を向けた。

「ケーキの宅配ご苦労様でした。なのはお嬢様は、すずかお嬢様とアリサお嬢様と一緒に庭のテラスにいらっしやいます。こちらへどうぞ」

ノエルの案内で、エースは目的の場所へと急ぐ。彼女によると、天気もいいで庭でお茶としゃれ込んでいるらしい。エースもそういう志向は好きである。

と、前を進んでいたノエルが、何かに気づいたようにエースの方を振り向いた。

「そつえばエース様、私はエース様が敷地内にお入りになったところを見ていないので改めてお聞きしたいのですが、あの高さの扉をどうやって乗り越えたのですか？ 先ほどは飛び越えたと仰っていましたか……」

「ん？ ああ、普通に飛び越えただけだぜ？ それがどうかしたか、ノエルちゃん？」

「ノ、ノエルちゃん？ コ、コホン……まさか、本当に飛び越えたと言うのですか？ あの門は高さ六メートルはある、縁なしの鉄製扉なのですよ？ そう簡単には……」

怪訝そうにするノエルに、エースは「身軽なんだよ」と軽く返した。明らかにそんな言葉では済まない様な気がするが、エースはそれっきり視線を外してしまう。

これ以上踏み込むのはムリだと思ったのか、ノエルは「そうですか」と言って引き下がった。そのままレンガ敷きの道の先へと歩を進める。道が少し狭まったところで、ノエルはエースの方に振り向いた。

「お嬢様方はあちらです。それでは改めてご案内のほどを」

「あー、お構いなく。方向だけわかれば後は自分で行けっから」

「さ、左様ですか。それでは私は仕事に戻りますので、これにて。何かご要望がありましたら、遠慮なさらずにお申し付け下さい」

ノエルが頭を下げる。それに対してエースは爽やかな笑顔でありがとうとお礼を言い、其方へと歩いていった。次にノエルが頭を上げた時には彼の後姿はなく、ただ優しい花の香が漂うだけ。

一陣の風が吹いた。しかし姿勢を直立に戻しても、ノエルはそこから動かない。その視線は、庭園の向こうへと消えた彼の姿を目蓋の裏で追い続けていた。

「ポートガス・D・エース……………」

ゆっくりと目を開く。知らず、先ほど聞いた彼の名がノエルの口を突いた。センサーの反応に飛び出した自分が相對した人物。あの門を飛び越えたと話す、本当なら常軌を逸する身体能力に加え、こ

こちらの氣勢を削ぐ様な、何か不思議な空気を持つ少年。

（まだずかお嬢様たちと同年齢ほどだというのに、私の威圧感をまるで意に介さぬ胆力……そればかりか、立ち振る舞いにもまったく隙がない。明らかに？慣れている？人間の気配だ……しかし、お嬢様たちを狙うような邪気は欠片も見当たらなかった……一体貴方は何者なのですか、エース様……）

僅かも動かず先を見やる。ノエルのその心の問いに答える者はいない。ノエルは脳裏に焼きついたエースの表情を思いだしながら、しばらくの間その場に立ち竦むのだった。

- Side change two girls -

「なのはちゃん、今日は元気だったね」

「そうね……」

白い丸テーブルを挟んで、二人の少女が向かい合っていた。一人は長い瑠璃色の髪をヘアバンドでまとめ、整った顔立ちに優しげなを双眸のぞかせた、少し気弱そうな少女。対するは明るめの金色を宿した長髪をサイドで僅かに留め、勝気な光を放つ碧眼を称えた少女。どちらもなのはやエースと同年齢ほどに見える。

この二人、月村ずかとアリサ・バニングスは、最近少し様子がおかしくなった親友、なのはのことをひどく気にかけていた。ちな

みに話題の中心である彼女は、お手洗いのために席を外している。だからこそ、こんな話もできるのだが。

彼女の様子がおかしくなったのは、ここ二週間ばかりのこと。それも唐突にだ。具体的に何がおかしいと言っわけでもないが、いつもどこか疲れ気味で元気がない。

今回もそのことを二人で話し合ってなのはに尋ねてみたのだが、彼女は少し気を遣っような笑顔で「なんでもない」と告げるのみだった。そのことが二人の歯痒さをさらに募らせていく。

「危ないこととかに首突っ込んだりとか、してないわよね……………」

「だ、大丈夫だよアリサちゃん！　なのはちゃんがそんなことするはずない……………」

否定しようとしたすずかの声が小さくなる。親友を信じてあげたい。アリサとてそうしたいのは山々であったが、何をしているのか話してくれない以上、不安であるのは確かだった。

だが、なのはとて好きでそうしているわけではないと思う。詳しくは分からないが、きつと自分達を気遣っつてのこともあるのだ。それだから、二人もあまり強くは出られないのだった。

「あーもうっ、まだるっこしいわね！　なんであたしがこんなにやきもきしなきゃなんないのよ！　もうこうなったら、なのはの分までお菓子食べてやるんだから！」

「あはは、どうぞ召し上がれ」

やけ食いならず、憂さ晴らし食いをはじめたアリサに微笑しながら、すずかは彼女の前にクッキーの入った皿をおいた。さりげなくお茶のおかわりを注ぐことも忘れない。この気遣い上手なところが、すずかのすずかたる所以である。

「相変わらず、すずかんちのクッキーは絶品よね。ウチのお茶請けにも欲しいくらいだわ」

アリサが次から次へとクッキーを頬張りながら、幸せそうな顔でそう言った。すずかも苦笑しながら、お菓子の山に手を伸ばす。と、その横から手が伸びてきて、クッキーの山から一つを摘み取った。

「ふむ……おー、確かに美味エなこれ。いくらでもいけそうだ」

「ふふん、当然でしょ。ノエルさんと忍さんが作るお菓子が不味いわけがな……」

得意げだったアリサの声が途中で止まり、視線が横へとゆる〜く回り回される。すずかの目も驚いたような色を帯びて、其方へと向けられていた。二人の視線が一点で交錯する。

果たしてそこには少年がいた。大きめのケーキボックスを抱え、ノエル印のクッキーをもしゃもしゃと口にしている。まったく見覚えがないが、歳は自分達と同じくらいに見えた。

「あ、あの………?」

二人を視線をものともせず食べ続ける少年に、すずかが恐る恐る声をかけようとしていた。だが、それより先にアリサが蹴立てるよくな勢いで椅子から立ち上がる。ガタンという音をそのままに、目

の前でマイペースに食事を続ける男子を指差して、彼女は大声を張り上げた。

「ア、アンタ誰！？　なんで、すずかんちの庭にいるのよ!？」

「むぐむぐ……………ん？」

金髪少女の怒鳴り声を受け、ようやく少年の目が此方を捉える。アリサは自分の声にまったく動じないその態度に、すずかはあまりの自然体さに、それぞれ呆然として彼を見つめる。そこで初めて気づいたかのように声に反応して顔を上げた少年は、立ち上がってペコリと頭を下げた。

「むぐ……………ごつくん。あ！　こいつはどうも。お嬢様方のティールタイム中に失礼。なんとも美味そうなお菓子和紅茶の香りに誘われて、やって来たおれの名はエース。以後よろしく」

「え……………あ、いえいえ、わざわざご丁寧にそんな！　こちらこそどうかひとつ……………」

キリツと表情を引き締めて言う彼に、すずかが条件反射で同じようにペコペコとお辞儀する。見事なお嬢様対応と天然スキルのオンパレードだ。エースと名乗った少年はそれを見てうむと頷く。そして、クッキーに手を伸ばしつつ続きを口にしようとして、

「アンタが一体誰で、なんでここにいるのかってことを聞いてんのよ！　名前なんかどうだっていいわ！　すずかも、コイツのペースに乗せられてるんじゃないわよ！」

すずかに痛烈なツッコミを入れたアリサに、ゴスツと顔を寄せら

れていた。問い詰める声はこれ以上ないほど震えている。明らかに  
おかんむりの様子であった。

場が何ともいえない空気を発する。だが、沈黙が続いたのは僅か  
数秒であった。

「エ、エースくん!？」

「ん？ おお、なのは。さっきぶりだな!………つて、ん？ なん  
でお前がこんなトコにいるんだ?」

驚愕の声と共に救世主現る。声の主は、言わずもがなのなのはだ  
った。お互いの態度と口にした台詞からすると、どうやら顔見知り  
ではあるようである。アリサはエースから顔を離し、今度はなのは  
に詰め寄った。

「なのは! コイツー体誰よ! アンタの知り合いなの!？」

「ちょ、アリサちゃん、まずは落ちつい………ふええ!？ ひよふ  
えふあひつふあらふあいふえ（ほっぺた引つ張らないでえ）!」

「ふ、二人とも、ダメだよ!？」

「ぶっ、はははは! なのは、お前すげエへんな顔してんぞ!」

縦横無尽にほっぺをつねるアリサと半泣きになりながらギブを宣  
言しているなのはに、すずかが慌てて止めに入っている。エースは  
自分のせいなのはがそうになっているとは欠片も思わず、ただ三人  
の様子に笑いこけていた。

「ふーん、そんでこいつが助けたっていう……………」

「なのはちゃんの家の居候さん……………」

数分後、なのはから説明を受けた二人は、少し驚きながらも視線を同じ方向に向ける。そこには、相変わらずのマイペースでクツキーをパクつくエースの姿があった。

お互いに自己紹介は終わらせているが、アリサは少し不機嫌な様子だ。黙っていられたのが不満なのだろう。その視線がなのはに向けられる。

「というか、そんな話初めて聞いたわ。何で私達に黙ってたのよ」

ジト目で睨んでくるアリサに少したじろぐ。秘密にしようとしていたわけではないが、結果的にそうなってしまったのは事実だ。ここまできて誤魔化すのもどうかと思ったなのはは、正直に話すことにした。

「にははは、ごめん。ちょっと忘れてて……………」

「なのはちゃんったら……………」

あっけらかんと自分の失敗を話す親友に、すずかは苦笑する。肩

の力が抜かれ、その視線がエースへと向けられた。

「少し驚いたけど、なのはちゃんのお友達なら私たちにとっても同じだよ。よろしくね、エースくん……で、いいのかな？」

「むぐも」……おう、いいぞ。堅つ苦しいのは嫌いだからな、好きに呼んでくれ。あ、すずか、紅茶とクッキーおかわり」

「なんでアンタはそんなに馴染んでるのよ！」

さりげなくふてぶてしい発言をするエースに、アリサが目を三角にしてツツコむ。しかし、怒鳴り声を向けられた当の本人はまったくしなから紅茶を楽しんでおり、苦笑したすずかにおかわりを貰っている。その様子にアリサが「もーっ！」と頭をガジガジ掻いた。

アリサ・バニングスが誇る最大の武器である突進力も、エースにかかれば軽く緩衝されてしまう。アリサにとって、エースの持つ無類のスルー力と独自の解釈能力は天敵に等しかった。もしこの場に彼の弟がいたら、もっと酷いことになっていたかもしれない。

なのははずかか顔を見合わせて少し苦笑い、兼ねてから気になっっていたことを尋ねた。

「でもエースくん、今日は手伝いで家に残るって言ってたよね？  
なんでここにいるの？」

「お、そっぴやすっかり忘れてたぜ。おれはちよつとしたお使いで来たんだった。桃子さんからみんなに届けもんってな、ほれ」

「わあ！ これ、翠屋のケーキですね！！」

エースが持っていたケースから出されたケーキを見て、さすがが手をぱちんと合わせた。アリサもそのおいしさは認めるところなのか、その中に添えられていた手紙を読みながら表情が嬉しげに綻んでいる。

「『みんなで食べてね』だって。桃子さんの心配りは相変わらずね。さっそくお茶の続きにするとしましょうか」

「うん……って、あれ？ エースくんどこ行くの？」

頷いたのはが、腰を上げたエースを見て不思議そうに呟く。エースがなのは声に反応して振り向いた。

「どこって、翠屋に帰るんだよ。これでも仕事だったからな、さすがにこれ以上はまずい」

エースの言葉に一樣に残念そうにするのはとすずか。だが、任された仕事を放り投げない辺り、エースの責任感の強さが窺える。先ほどまで一山はあるクツキーを抱え込んでいた男の台詞とは到底思えないが。

「ま、今回は仕方がねえさ。また今度ちゃんと時間作って来っから、今日のところはこれで」「その必要はないわ！」「何？」

「「アリサちゃん？」」

怪訝そうな顔をするエースに、他の二人の声が重なる。アリサはそのまま「ふっふっふ……」と笑うと、先ほど読んでいた手紙を全員の前に掲げて、その中の一節を差した。

「えっと…………『エースくんの分もケーキを入れておいたから、みんなと食べていらっしやい。お店のことは気にしなくていいからね』  
…………だつて」

「お母さん……………ありがとう……………」

なのはは優しい微笑みを見せる母を思い浮かべながら、心よりの感謝を口にする。すずかは嬉しげに、アリサはしてやったりといった風に口角を吊り上げていた。

「やれやれ、桃子さんに担がれちゃったか……………ま、それなら別に帰る理由もないわけだしな。そんじゃ、お手柔らかに」

キーン……………

エースの言葉を何かの気配が遮った。鼓膜に響くピアノ線を弾いたような高い音。だがそれは、穏やかな風と空間を震わせる不協和音のように耳朵に触れる嫌なものだ。

エースは一瞬にして意識を切り替えて周りを探る。いつでも動けるような体勢と意識になるのは、流石といったところだろう。

（エースくん！）

（うおっ！？ いきなり何だよ、なのは……………って、おれまだ念話

は使えねえんだった………)

頭の中になのはの音が突如として響いた。エースは危うく声を上げそうになるが、寸前で何とかとどまらせる。見ると、なのはとユーノの二人が此方に目を向けていた。

なのは達魔導師が多用する通信魔法の『念話』のことは、会って数日のうちに聞いていた。エースにも低いながら魔法の力はあるらしく、念話などの行使自体は可能なのだとユーノも保証しており、それなりに訓練もしている。

だが、成果も『それなり』であった。レイジングハートに相当の補助をしてもらい、近距離という条件をつけてようやくノイズ混じりの意思疎通ができるといったレベルだ。魔力を持つ者としては、平均以下の才能らしい。

だが、このレベルならこれぐらいが普通なのである。実際には魔法の才能を持つ者の方が少ないし、元々が稀有な能力だ。魔法に触れてすぐ、見様見真似で念話ができたというなのはの方が、よっぽど規格外な存在なのである。

なので、現状ではもっぱら『聞く』ことを主としていた。あとは聞こえてくる声に合わせて、顔で意志を表現するぐらいだ。もっとも、エースにはそれで十分すぎるほどなのだが。

「 エースくん? 」

「 どうしたのよ、いきなり黙っちゃって 」

エースがいきなり言葉をやめたので、すすかとアリサが此方を窺

うような視線を向けてくる。その横からなのはがこつちを見据えていた。

(ジュエルシードの反応だよ。すぐ近く……どうしよう……)

なのはが念話と目線でエースに訴えかけてくる。確かに、楽しく団欒してる最中にいきなり抜けては不自然だ。何か言い訳を考えようにも時間が足りない。と、各々が頭を悩ませていたとき、ユーノが突然なのはの膝から飛び降りて森の方へと駆け出した。

(成る程な……)

エースはユーノの行動意図を理解し、なのはに視線をやる。彼女の方も合点がいったようで、すずか達に一言言った後、すぐさまユーノの後を追っていった。去り際に彼女が振り返る。

(エースくんはここにいてね。すぐ戻ってくるから)

(へ？ な、おい待てよ！ おれも……)

行く、と言う前になのはは走り出した。あっさりと蚊帳の外に置かれたエースが、思わず抗議の声を上げようとする。だが受話しできない念話で伝わるわけもなく、なのははそのまま森の中へと消えてしまった。

エースは自らの力のことをまだ話していない。悪魔の実の能力者は、前の世界ですらバケモノと言われるような力の持ち主である。いきなり説明してなのは達を怖がらせたくなかったし、何よりこの世界に来て初めて出来た友達だ。もし怯えられたらと思うと、エースはなかなか話せずにいたのだった。

だが秘密を守ろうとするあまり、今回はそれが仇となってしまったようだ。いくら卓越した魔力の持ち主とはいえ、なのはもユーノもまだ子供。二人だけではさすがに心配である。

アリサとすずかは、なのはが去った森の方に目を向けたままでいる。それに目をやって一息ついた後、エースは勢いよく立ち上がった。

「おれが行ってくる。心配すんな」

「「エース（くん）？」」

猫を抱いて撫でていた二人が、少し驚いたようにこちらを見る。エースはニツと口元を吊り上げながら、彼女たちに笑いかけた。

「なのはが心配なんだろう？ アイツのことは任せときな」

「あ……………うんっ。じゃあお願いします」

「さっさとなのは捕まえて戻ってきなさいよ」

二人分の声援を背中に受け、エースは軽く返事をしながら走り出す。森の中を駆けながら、なのは達の姿を探した。別荘の一角とはいえ、その規模はかなり大きい。

と、エースの正面から何かが広がってくる気配を感じた。慌てて足を止めると、周りの景色から色が失われていくのが見える。まるで、空間そのものの活動が停止したようだ。

普通ならば遭遇したことの無い状況に多少焦ってもいいようなものだが、生憎エースはそこまで繊細な精神の持ち主ではない。

（おー！ すげエな、これも魔法つかか。そういや、ユーノの奴が結界がどうたらっつってたな。これがそうなのか？）

音が止み、生の気配が薄れた周囲を見渡しながらエースは一人考える。と、左前方から爆音と共に派手な粉塵が上がった。

なのはが暴れているのだろうかと思い、エースは再び駆け出す。そして、比較の見通しの利く場所へと出ると、光が瞬いた方向へと目を向けた。

「つて、あれは……………」

思わず言葉が洩れる。連なる木の間から目に飛び込んできた光景は、自分がしていた予想とはあまりにも違っていたのだ。先ほどとは違う焦燥感に、エースはすぐさま地を蹴った。

「チツ、『アイツ』と同じで世話が焼けるぜ！」

愚痴りながらも、その表情には笑みが浮かんでいる。守る、という行為に懐かしさを感じた。

満ちていく久しい感覚に身体がうずき、身体が熱を持ち始める。走り出したエースの右手は赤く燃えるような光を放ち、その輪郭を何重にも揺らめかせていた。

「何で……なんで急に、こんな……」

少しだけ痺れた右腕を気にしつつ、私は搾り出すように言った。

ギリギリと、嫌な金属音が耳を突く。レイジングハートと鏢迫り合いをする黒い杖から視線を戻し、正面を見やる。一番最初に目に飛び込んできたのは、金色に揺らぐ美しい髪と冷たさすら浮かばせるほど澄んだ深紅の瞳だった。

(なんて悲しそうな目をしてるんだろう……)

至近で相對する『彼女』を見た感想がそれだった。感情を無理矢理押さえ込んだような、そんな強い光と悲しみを感じさせる彼女の眼差し。だが私の声に僅かも表情を揺るがせず、彼女は淡々とした風に言った。

「答えても……多分意味が無い……」

ギリツと口元が軋む。浮かんでくるのは戸惑いと怒りだ。鏢迫り合いをお互いに押し返して地面に降り立つと、同じく木の上に着地した彼女を見つめ返した。

彼女が現れたのは、ジュエルシードの封印をしようとしていた正にその時だった。それも、彼女はレイジングハートと同系のインテリジェンスデバイス『バルディッシュ』を持つ魔導師であったのだ。さらにロストロギア、ジュエルシードの正体を知っていたことから、

ユーノは彼女が自分と同じ世界の住人であることを確信するに至っていた。

その目的は、なのは達が集めているのと同じジュエルシード。そして、それを奪うために攻撃を仕掛けてきた彼女に対し、なのはは戸惑いながらも応戦しているといった経緯であった。

「Device mode・Photon Lancer ,  
Get set」

「Shooting mode・Divine Buster ,  
stand by」

お互いのデバイスが稼動機構を行使し、スタイルを変更する。砲撃形態に変形したレイジングハートを油断無く構えながら、私は彼女について考えていた。

(多分私やエースくんと同じ年ぐらい……………綺麗な瞳と綺麗な髪……………  
……………だけど、この子……………！)

至近で相対したときに唐突に感じ取ったものが蘇り、それが徐々に確信へと変わっていく。お互いに睨み合ったまま動かない。少しばかり強い風が、さあつと頬を撫でた。

『じゃあお……………』

そのとき、横からガランという金属音と、くぐもった様な呻きが響いた。猫が気を取り戻したらしく、僅かに身体を揺らすのに私は思わずそちらを見てしまう。しかし、一瞬とはいえそれに気を取られたのがまずかった。

ごめんね。

「っ!?!」

微かに何かが聞こえた瞬間、私に向かって黄色い魔力弾が飛来する。防御魔法はできるが、完全防御は僅かに間に合わない。とつさに杖を構えるも、そんなことでは気休めにもならないだろう。

バリアジャケットが守ってくれるとはいえ、直撃は初めてだ。やっぱり痛いのかな、と頭は暢気なことを考えつつも、戦闘の空気が体を強張らせる。

私に為す術はなかった。できるのは目を閉じることぐらいだ。だから、私は満たされる恐怖に抗うことなく思い切り目を閉じた。

しかし、光の気配が私の眼前に迫った時、自分の横を熱を持った何かが駆け抜けていく。同時に走った鋭い声が、私と彼女の間の空気を切り裂いていた。

『  
? 陽炎?!!』  
かげろう

自分の目の前で、突如として音が破裂した。迫り来ていた金色の閃光とその何かがぶつかり、私の目蓋の裏を焼く。衝撃が強烈な風となって身体を押しやるのを感じとるより先に、私の身体は物理法則に従って勢いよく吹き飛ばされていた。

受身はもちろんだがとれず、ほぼ頭からの垂直落下だ。魔法を使う余裕が無い以上、それがもたらす致死性は十分にある。しかし、数秒ほどに感じる浮遊感の後、身体にふわりとした浮遊感が走った。同時に、背中からとんと接する感触を受ける。

「　　なのはっ、大丈夫かい!？」

「でかしたぜユーノ。ったく、一人で突っ走ってムチャしゃがって」

同時に聞こえる二人分の響き。片方は切羽詰った、もう片方は頼もしくも優しい声。気力を振り絞って目を開けると、寄り添うような茶色い影と薄くぼやける景色を遮るように、一つの背中が見えた。

水面を伝う波紋に似た、厩気楼の如きその輪郭。脇から伸びる赤熱した腕回り。そして風によって僅かに動く、赤く揺らぐ身体とは対照的な黒い後ろ髪。それが安心できるものだと思ったとき、私の視界は再び黒く閉ざされ、身体からは力が抜けていった。

（ありが、とう……………）

感謝の言葉は今心の中で。しかし、後で必ず伝えようと私は胸に刻み込んだ。だから、今は少しお休みするね。

守るという気持ちが伝わってくるのが温かい。守られているということが嬉しい。なんだかすごく甘えたくなくなってしまふ。

そんな、久しく無かった安心できるような空気に包まれていたからだろう。すべてを彼らに任せた私の意識は………そこで途切れた。

T O B E C O N T I N U E D . . .

#### 第四話 お茶会 ～ 変わり出す日常（後書き）

さて、怒涛の展開（そうか？）となった今回のお話でした。

アリサ&すずかとエースの出会い、そして我らが金色の天使との初対面。さらに次回はエース初の魔法戦になります。バトルシーンは若干少なくなるかもしれませんが。

次のお話はあとちょっとで完成するのですが、まとまった時間がなかなか取れないため、今だ完成には至りません。うう、行事も忙しかったけど、処理作業もそれはそれで骨が折れる・・・

と、今回は少し少なめのあとがきですが、こんなところで。ああっ、もう親父が呼んでいる！ たぶん出席者リストの整理かな・・・

ではでは、また次回もお会いできることを願っています！

ツァイツェン  
再見！

第五話    もう一人の魔法少女    出会いは突然に（前書き）

ご拝読くださっていた方はお久しぶりです。初見の方は初めまして。

本当に久々の更新であります。うう、家のことが片付かない上に小説もなかなか進まず、復帰にはまだ少しお待たせしてしまうことになりそうです。炎殺の邪眼師の方もなかなか書きあがらないし、もう本当にすみません。

ここ一ヶ月も書け次第更新してはいるのですが、こんなペースじゃいけませんよね・・・努力していきたいです。

それでは、第五話、どうぞー！

第五話　もう一人の魔法少女　　出会いは突然に

『それもまた、巡り合わせ』

黒ひげ海賊団狙撃手？音越？ヴァン・オーガー

魔法によって大惨事は避けられ、地面に横たえられたなのはから力が抜ける。ユーノは慌てて彼女の容態を探るが、身体に何の異常もないことや息もしっかりしていることを確認して安堵の溜息を吐いた。どうやら爆発のショックで気を失っただけのようだ。

「オイオイ。おれの恩人にいきなりなにしてくれてんだ」

エースもなのはの様子に安心しつつ、視線を上に向ける。ギシギシとしなる木の枝の上、深緑の葉に隠れるようにして一人の少女が佇んでいた。

黒マントに白いスカートという、なのはとは真逆となる出で立ち。金色の宝玉のようなものをつけた、レイジングハートと対になるような黒い杖。そして柵引くほど長い金色のツインテールに整った顔、そして少し行き過ぎなほど透き通った深紅の瞳。

魔導師を言葉にしたらまさしくこういう感じ、という姿の少女であった。子供にしてはデザインが少々派手ではあるが。

「エー、ス……………？」

「おう、ユーノ。なのはにケガはねエか？」

後ろから聞こえたユーノの声に、エースは僅かに顔を動かして答える。無論相手を意識から外すなんてことはなく、いつでも動けるようにしてある。問いかけるユーノの声からは、戸惑ったような響きが洩れてきていた。

「そ、それは大丈夫だけれど……………エース、今のは君が……………？」

「説明は後だ。今はそれよりも」

背けていた顔を正面に戻す。

「優先すべきことがあんだろ？」

いつもと同じ、飄々とした声色でエースが告げる。木の上に立っていた少女と、再び視線が交錯した。同時に彼女が杖をこちらに向けて構えてくる。

表情は真剣そのものだ。先ほどのような感情を感じさせないそれではなく、厳しい色に満たされた戦士の表情。それに何か言い知れぬ苛立ちを感じたが、その理由は今のエースにはわからなかった。

「随分と血の気が多いみてエだな、お嬢ちゃん。お引取りは……………ムリか」

とりあえず、最初に思った感想を言ってみる。軽い口調だったが、

その反応を見るには十分だった。肌で感じる堅固な空気は、彼女が退かないことをこれ以上なく示しているからだ。

見た目は同じ年ぐらいのエースに「嬢ちゃん」と呼ばれたことに多少不思議な顔をする少女。だが、すぐにそれを引き締め、感情を感じさせない表情で問いかけてきた。

「今の攻撃は貴方ですね……………彼女の、仲間ですか？」

「そうだとしたら……………どうすんだ？」

エースは不敵な笑みを浮かべる。対して、少女は一度目を閉じて何かを考えるような仕草をした後、強い意志をその瞳に宿させて告げた。

「申し訳ないけれど、どいてもらいます」

「！ ユーノ、なのはを頼むぜ！」

「エース！？」

言葉と同時にエースはスタートを切る。瞬間、それまでいた場所に金色の弾丸が撃ち込まれた。

「いきなり容赦ねエな！危ねエだ……………うおっ！？」

言葉を待たずに次々放たれる光弾に、エースは慌てて回避行動をとった。走った後に爆風を伴った土煙が舞う。

「！速い……………！」

少女は木の上から身を躍らせ、空中からエースを狙い撃ちにしようとして魔力弾を連射する。だが、エースはその全てを紙一重でかわしていた。少女がその動きに目を見張る。

弾にはそれほど威力は込められてないようだ。おそらく自由を奪うための攻撃なのだろう。尤もエースにとっては別に命中しようがどうということはないのであるが、不用意に情報を与えるほど今のエースは愚かではない。

それにこの程度の速度なら、子供の身体でも何とかかなる。伊達に悪ガキをやってきたわけではないのだ。さらに連なった四つほどをかわしたあと、エースは唐突に足を止めた。

「ふん！」

そして目の前に迫った最後の一つを避けず、裏拳でもって地面に叩き落した。光弾によって大地が穿たれ、エースの姿が砂煙のなかに消える。だが少女がその中に威嚇射撃をしようとした瞬間、鋭い声が響き渡った。

「ヒガン？ 火銃?!！」

「!?!」

煙を切り裂くように、炎の弾丸が今度は少女に向けて迫ってくる。魔法発動の気配を探ることに集中していた少女は、いきなり飛んできた炎弾に空中から地上へと回避をとった。そこへ、砂煙の中から飛び出してきたエースが一息の半分で突貫していく。

「おつりゃー!!」

「っ!?!?くっ!」

魔法を使う隙を与えない、見事な一撃。エースの右ストレートは少女を捉えたが、相当な加減に加えて急所も外したため、その身体を吹き飛ばすだけに留まった。しかし、殴った感触に違和感を感じてエースは追撃をやめる。

(薄い服の割には随分と頑丈だな……なるほど、なのはのも魔力で出来てるって言うてたから、あれ自体が身体を守る武装ってわけか。魔法ってのは便利なもんだな)

地上戦はまずいと思ったのか、少女は飛んで距離をとりつつ此方を睨んできた。その眼差しには、先ほどあった油断も優位さを含んだ色も見当たらない。エースを警戒するように杖を構え、一箇所に留まって死角を作らないように、常に移動している。

少なくとも素人ではない。まだまだ甘い、その動きは訓練されたものだ。エースは少女の判断を評価しながら、込み上げてくる舌打ちをやりすごした。

(まずいな。いくらおれでも、あんだけ飛び回られたら生身じゃ対処のしようがねエ。くそ、前にジジイが言ってた? 刺<sup>ソル</sup>?とか? 月歩<sup>ゲッポウ</sup>?を覚えとくべきだったか?? 火拳?なら軽く撃ち落せっけど、下手したらこの森ごとあの子を燃やしちまうし……)

内心で葛藤を続けるエースと少女の対峙は続く。しかし、膠着状態というものが嫌いなエースである。しばらくするとたまらなくなつて、上空に佇む少女に向かって声を上げた。

「おい、嬢ちゃん！またえらく物騒な仕事してるみてエだけど、一体何が目的なんだ！？」

「……………その猫と融合しているロストロギアです。あなた方と同じく私はそれを集め、持ち帰らなくてはならない」

エースの問いに、少し考えていた少女が端的に告げた。相変わらず感情というものを感じさせない、いや無理矢理に押し殺したような声だ。

エースは表情を一瞬険しくするが、すぐに元に戻した。後ろで寝転がった猫に目をやると、身体の中央あたりに光るものが見える。エースはそれを確認すると、再び少女に視線を戻して言った。

「ロストロギア……………ああ、なのはがジュエルシードだとかって言うてたやつだな……………いいぜ、それが欲しいなら勝手に持ってけよ」

「え……………？」

紡がれたエースの言葉に、少女は不意を突かれたような顔を見せた。心底意外だったのだろう、少し戸惑うように視線を彷徨わせている。その表情は歳相応で、これが普通の彼女なのかもしれないなとエースは思った。

「なっ！？エース！何を……………」

「なのはがこんな状態だつーのに、これ以上戦えるか。今回はおとなしく退いてやれ、ユーノ」

後ろから聞こえたユーノの声を、有無を言わせぬ声色で黙らせる。ユーノの方もそのことを改めて認識したせいか、後ろで横たわるなのは見やるとすぐに頷いた。エースの顔に笑みが戻る。

そこで、今まで黙っていた少女が口を開いた。

「……………貴方は彼女の仲間と言った。彼女と同じなのであれば、ジユエルシードを目的として来たのではないの？」

「んな石つところに興味なんかねエよ。ユーノ……………このフェレットがこいつを連れていきなり飛び出してっただから、ちつと心配になっ  
て付いて来たんだしな。戦う気がねエってんなら、おれアこいつを連れて帰るだけだ」

「……………そう」

なのはを抱き上げたエースの後ろで、彼女は目を伏せながら短く呟いた。視線が見えないので、表情は分からない。だがそこに寂しさを感じ取ったのは気のせいだろうか。

エースはそんな彼女を横目で見つめていたが、ふつと息を吐いて背を向けたまま口を開いた。

「ああ、一つ忠告しとくぜ。今回はお互いが初見だから大目に見てやるが、また同じことをするのは看過できねエな。こいつらに手を出すってんなら、ちつたア覚悟を決めてから来い。次は、おれもそれなりで行かせて貰う。だから」

そこでエースは言葉を切る。そして、顔を上げた彼女に向けてすつと振り返り、

「 『また会おうぜ』、嬢ちゃん」

ニヤリと口角を吊り上げた笑みを見せ、再び歩き出した。声の含みを感じ取ったのか背中に視線を感じるが、エースは振り返らない。

また必ず相見<sup>あいまみ</sup>えるときが来る。おそらくはなのはと一緒に、それも一度では終わらない数で。

そう遠くない未来を予想して僅かに含み笑いを零し、エースは森を後にするのだった。

r o o m -  
- S i d e c h a n g e i n t h e N a n o h a ' s

「そ、それじゃ、あの炎は？悪魔の実？という果物を食べて得た力だというのかい？エースの世界にはそのような実がいくつもあって、自分と同じような能力者が数え切れないほどいると………」

ベッドに座ったなのはの膝にいたユーノが、絨毯の上に座るエースに向かって尋ねた。その声は若干震えているように感じ、表情も少し引き攣っている。

あの後、なのはを連れてすぐ達元の元へと戻ったエースはすずかやアリサ、忍などを含めた全員に問い詰められた。何せ、なのはの帰りを待っていたらエースが彼女をお姫様抱っこして連れてきたの

だ。恭也などは今にも掴みかからんばかりの勢いでエースに詰め寄って、忍に窘められていたが。

だが、事情を説明しろと言われても困る。そこでエースは、なのはが森の中で倒れていたことを話し、なのははユーノを探している途中で転んでしまい、その拍子に頭を打って気絶してしまったということにした。実際にあつた重要な部分はごっそり省いているが、ウソを付いているわけではない。

心配してくれるすずか達や兄に対して、事の真相を話すことができないのは忍びなかつたが、だからといって正直に言うわけにもいかない。とりあえず、そのことは割り切ることにして、なのはの部屋に戻ってきた三人は、ユーノから昼間の少女が自分と同じ世界の魔導師であることを告げられた。そして、彼女の魔法にやられそうになっていたなのはを、エースが不思議な力で助けたことも。

そして現在、なのはとユーノはその不思議な力、？悪魔の実？の能力についての説明をエースから受けているのだつた。魔法を知る彼女たちだが、話されるのが未知の力だけに、真剣な表情で話に聞き入っている。二人とも興味津々といった様子であつた。

ちなみに、悪魔の実の能力者が海に弱いという弱点も既に話してある。弱点ならば話すべきではないかもしれないが、二人は信用できるとエースが判断したためだ。それに、もしそのような事態に陥ったとき、知識がある者がいた方がエースにとっても都合がよかったからである。

「ああ。おれが食つたのは？メラメラの実？つつう自然系の実で……」  
……つて言つても分からねエか。まア、ややこしさを省いて簡単に言やあ、なのはの魔法みてエに炎を操れる能力を持つてるって思え

ばいばい」

「ふええ、そんな不思議な果物があるんだ……名前はちょっと怖いけど、それなら魔法に驚かなかったのも納得できる、かな？」

なのはが話を聞きながら溜息を吐いた。そして、エースをまじまじと見て、目が合うと少し顔を赤くする。いみじくも、その自分が怖いと言ったものの名で将来呼ばれることになるうなどは、毛ほどもにも思わないのはであった。

と、そのとき階段を上がってくる音が部屋に鈍く響いた。この音からするとおそらく桃子だろう。

(と、とりあえずお話は一旦中断ね。続きはお母さんをやりすごしてからにしよう)

なのはから二人に念話が飛ぶ。エースはコクンと頷き、ユーノは寝床のカゴの中へと飛び込んだ。

それと同時にノックの音が二回して、部屋の外から桃子の音が聞こえてくる。なのはが立ち上がってドアノブを捻ると、果たしてそこには桃子がいた。

「どづしたのお母さん。買い物？」

「いいえ、ちょっとね。なのはの部屋に……あ、やっぱりいたのね、エースくん」

桃子の視線がなのはから、正面にいるエースへと移る。どうやらはじめからエースに用があったようだ。不思議そうにするエースに

笑いかけると、桃子は右手をエプロンのポケットに入れ、よどみない手際でそこに入れていたものを取り出した。

「なのはとかお店のことで、すっかり渡しそびれていたの。これ、エースくんの持ち物かしら？」

桃子が取り出したものを三人が一斉に覗き込む。だが、なのはとユーノは目の前の「それ」に、一様に怪訝そうな顔を見せた。

彼女の掌に乗っていたのは、腕輪とも時計ともつかない奇妙な代物であった。青い帯状の線が入ったベルトのようなものがあるので、時計やリストバンドのように手首に巻きつけるだろうことは推測できる。だが、時計で言う盤面にあたる部分には長針も短針もなく、そこには丸い透明な球の中にコンパスが入っているだけ。しかもS極やN極などの文字盤は一切刻まれていない。

方位を調べるものとしては手抜きか欠陥品さえと思える拵えに、二人は首を傾げる。だが、エースだけは今までにないほど驚きに満ちた表情を浮かべていた。思わず声を上げてしまうほどに。

「こ、こりゃ『記録指針』じゃねエか！何で……………」

「貴方がここに来た時のズボンのポケットに入っていたものなのよ。随分と変わったコンパスだとは思ったけれど、やっぱりエースくんのものだったのね。洗濯しちゃうわねいよかったですわ。じゃ、私は一階にいるから」

エースのリアクションに微笑みながら、桃子は階下へと降りていった。残された三人は、エースの手の上に置かれた異質な形の羅針盤バズへと目をやる。なのはが興味深げにそれをじっと見つめ、エース

に向かつて尋ねた。

「これ、エースくんの世界のものなの？」

「ああ。これは記録指針ログボースつつうヤツでな、磁気を記録できる特殊な羅針盤コンパスなんだ。目的の島の磁気をこいつに記録させて、進む方向を決めんだよ。これなしじゃ、偉大なる航路グランドラインの航海はできねエ。何でここにあるのかはわからねエが……懐かしいもんだな」

エースが目を細めながらふつと笑った。なのははエースのその微笑に僅かな違和感を感じたが、一瞬で消えたその違和感を捉えきることは出来ず口を噤む。そこで、記録指針ログボースの説明を聞いて考え込んでいたユーノが顔を上げた。

「磁気を記録……なるほど、偉大なる航路グランドラインというのは磁気による影響が異常に強い海ということになる。磁気というのは、ある一定の法則で流れる磁力作用のことだから、それが飛び交っている場所では普通のコンパスなんてまるで使い物にならないからね。思うに、その磁気を記録させることで、島から島への航海を可能にするといったところかな」

ユーノがエースの世界の画期的な技術に感心していた。技術の程度はロストロギアに比べれば大したことはないかもしれないが、この世界で言う大航海時代にあたる世界において、そこまで高い技術力が確立されていたことはかなりの驚きであった。

そしてそれほどの技術がなければ、偉大なる航路グランドラインという海が航行できぬほど困難なことも。一体どんな世界から来たのか、その世界で彼は一体何をしていたのかという疑問が浮かび、ユーノは正面に座るエースを見つめた。

エースの話には驚かされるばかりだが、それだけで記録指針ロケボースの機能を見抜いたユーノもかなりの洞察力だ。流石、齡九歳にして発掘チームのメンバーをしているだけはある。

だが、そのことに対する賞賛は意外なところから齎された。

『ご名答です。年齢に似合わず聡明ですね、ユーノ・スクライア』

「「「え?」」」

自分たちのすぐ傍から声が聞こえた。エース達はぎよっとして辺りを見渡すが、人の影は何処にも見えない。だがなのはやエース、それに名前を呼ばれたユーノが冷静にその声の方向を探ると、視線は一点で交差した。

「まさか……………」

エースが恐る恐る目を下方へと向ける。三人の目が掌の記録指針ロケボースへと集中した正にその時、強い光と共に確信をもたらす声が響いた。

『おはようございます。マイマスター、エース』

顔があったらニコツと笑いそうな声色で、記録指針ロケボースが喋っていた。

驚愕の一日は、まだ終わりそうにない。

T O B E C O N T I N U E D . . .

第五話 もう一人の魔法少女 ～ 出会いは突然に（後書き）

第五話でした。

いや、エースのデバイスはやめる的なことを言われていたのですが、結局出すことに致しました。これの方が当初の方針だったので……すみません。

私が考える構想で展開していくと、無印をこのデバイスなしで乗り切るのは難しいと判断したので……詳しくは次回で説明いたします。もつとも、なのはとかフェイトみたいに魔法をバンバン使うということはないので、そこところは安心してください。

さて、エースらしさとかカッコよさを書けていればいいのですが……とにかく頑張ろう……うん。

ではまた次回でお会いできることを願って。

ツァイツェン  
再見！

第六話 新たな相棒と温泉旅行 〳 誓いの印（前書き）

ハッピーニューイヤー！！

明けましておめでとございます。更新はちゃんと0時0分になっているでしょうか。皆同じ事を考えて、サーバーがパンクしていないければいいんですが……

まあ何はともあれ、第六話をどうぞー！！

第六話 新たな相棒と温泉旅行 く 誓いの印

『そうさ、ドク口コイツはな！！ 不可能をものともしねエ、？信念？の象徴だ！！』

ヤブ医者 Dr・ヒルルク

喫茶翠屋の営業は、基本にして年中無休だ。今でこそ地元の中でもかなりの人気店ではあるが、最初からそうだったわけではない。これは地域の人々との間に築き上げてきた絆、言わば積み上げてきた信頼が齎した結果であるのだ。

そのことを全員が理解しているため、営業には決して手を抜いたりはしない。士郎や桃子は当然として、店員一人一人に至ってもである。そういう一生懸命なところが地元の人々に愛され、さらなる人気を呼び込んでいるのだが。

だが大きな休みの時など何日も休みが続く場合は、信頼を置ける従業員たちに店を任せて旅行などに行くこともある。今回はまさにそれ。全国的に連休となった日本国内で、なのは達は家族で温泉旅行に出掛けていた。

メンバーは高町家一同となのはのお友達一同、それに恭也の彼女である月村忍に、その家のメイドさんの方々という大所帯。車二台

は意気揚々と目的地へと向かっていた。

もちろん、その中にはエースも含まれているのだが、本人は少し浮かない顔をしていた。組んだ手を後頭部に当てて、一番左に位置する座席に寄りかかりながら、ずっと外を眺めている。

その様子に隣にいるなのは、後部座席にいるアリサやすずかが心配そうに見守る。だが、誰も声を掛けようとはしない。アリサなど、掛けようとしてあげた手を、躊躇いがちに何度も膝の上に戻していた。

「どうしたの、エースくん？ 気分でも悪い？」

「いや……………」

桃子が心配そうに声を掛けるが、エースは今だ黙ったままだった。流れる景色を漠然と眺め、ふとその視線を下に落とす。その目が捉えているのは数日前に出会った彼の新しい『相棒』であった。

その時のことが、またエースの頭に蘇っていく。それは今から遡ること五日ほど前、黒い魔導師の襲撃を退けた後のことだ……………。

- Five days ago -

「「「「「しゃ、喋った!？」」」」

エースの手に乗ったもの。特殊な形状と性質を持つ羅針盤コンパス『記録指針ボース』から聞こえた声に、一同はぎよつとして動きを止めていた。危うく落としそうになったが、エースが何とか手に納め、探るような目つきを記録指針ログボースへと向けている。

気を落ち着かせるように数秒かけて深く息を吸い込む。エースは額から汗を流しながら、勢いよく頭を下げて告げた。

「記録指針ログボースって、喋れたんだな………しまった！ おれ、ずっと無視し続けて来ちゃった！ すまねエ！ このとおりだ！」

誠心誠意の平謝り。土下座でもしそうな勢いである。

ユーノとなのはがずっこけた。

「ええ！？ 着眼点そこなの！？」

引っくり返っていたなのはが立ち上がり、エースのリアクションに思わずツツコミを入れる。顔が面白いほど崩れ、なんだか埴輪っぽくなっていた。ユーノはエースの持つ独特の感性和発想に言葉も出ないらしい。

『いいんですよマスター。私は本来喋ることなど出来ませんから、お気になさらないで下さい。それに、今の私は記録指針ログボースであって記録指針グボースではないのですから』

意味深な台詞に応ずるように、その球面が発光する。エースとなのははその意味が理解できず、ただ首を傾げるのみだ。しかしそんな中、ユーノ一人は何か思い当たることがあったのか、恐る恐る口を開いた。

「も、もしかして君は……………レイジングハートと同じ、インテリジエントデバイスなのか？」

『インテリジエント……………いいえ、違います。しかし自己意識は構築されており、貴方の持つていたレイジングハートと同クラスの思考力がありますので、インテリジエントデバイスと呼んでもかまいません。その実態は根底から違うものですが』

ユーノの質問に彼女（？）はやんわりと否定した。何だか要領を得ない回答に彼もエース達も首を捻っている。それを見越したかのように、デバイス（？）となった記録指針ログポースが淡い光をともしながら言葉を続けた。

「私には魔法を使う力はほとんどないのです。簡易の障壁を張ることも不可能ですし、バリアジャケットすら展開できません。現在最も有用な魔法は念話とマテリアルエフェクト……………足場を空中に設置するようなものしか使えません。例外として他にもいくつかはありますが……………」

「魔法がほとんど使えないデバイス……………そんなもの聞いたこともないけど……………それじゃあ、君が扱える魔法は例外を除けばランク……………もしかするとDランク程度しかなく、それもかなり限られたものだけということかい？」

『ええ、そうなります。まあ、もともとマスターのリンカーコアはCランクですからね。もし私がレイジングハートと同等レベルのデバイスであっても、なのはのような魔法の力は到底引き出せません。浮遊魔法の習得できる可能性も五分五分です。無論その代わりとして独自の機能がいくつかあるのですが、マスター自身のことも深

く関わってくるので、現時点では秘することとします。後々お披露目する機会もあるでしょう』

淡々と語るデバイス ログボース この場合は記録指針かもしれないが

に、ユーノは思案するような顔つきになった。エースと出会ってから、予想外の事態に遭遇してばかりの彼である。それに加え、自らの知るところであったデバイスまでもが常識を裏切るうとしていることに、彼は真剣な表情で考えを巡らせていた。

そしてその持ち主、当のエースはというと、

「そっか……おれにはなのはみてエな魔法の才能はないんだな……いいな……おれも魔法を派手にバーンとかドカーンって使ってみたかったのにな……」

「……げ、元気出してエースくん！」

がくーんと沈みながら、じめじめしたオーラを放出していた。魔法の使用に関してそれなりに希望を持っていたエースだが、自らのデバイスと名乗るものからも改めてダメだしされたことがよほどショックだったと見える。背中を丸めながら、部屋の隅の床にのの字を書いていた。

なのはは今にも背中からキノコを生やしそうなエースを一生懸命慰めている。そのまま苦笑いしていた彼女だったが、ふとエースの時と同じような状況であることに気づくと、光を放つデバイスに顔を寄せた。

「そっいえば、あなたの名前は何ていうの？」

『名前、ですか……………』

それまで流暢に答えていた声が止まった。考えに耽っているのか、しばらく反応が消える。そして数秒後、全員が見守る中で記録指針ログポースは静かにその名を告げていた。

『そうですね、私の名前はア……………いえ、『エールAL』です。エールとお呼び下さい』

- Side out -

回想から戻ってくる。エースは横から感じる視線を受け流しながら、ともかく話を繋ぐべく思ったことを口にしていった。

「……………よかったのか？ おれが付いてきちまって」

視線を助手席の方にやりながら、エースは少し窺うような声を発した。なのは達はエースが声を上げたことにびっくりしながらも、成り行きを見守るがごとく黙ったままだ。そして、彼の声に応じてサイドミラーから後ろへと顔を向けた桃子が、優しげな笑みを映しながらクスリと笑った。

「何を言ってるの。エースくんも私達の家族の一員なんだから、一緒に行くのは当然でしょう？」

「そつだぞ。子供が遠慮なんかするもんじゃない」

妻の言葉に、士郎も同調するように言ってバックミラーから微笑んできた。作りではない、本物の笑顔。その声が、表情が、エースの心を包みこんでくるようだ。

やはり彼らは優しい。なのはもそうだが、いきなり転がり込んだ自分に対して本当によくしてくれる。向けられる『家族』の温かみに心を軽くなるのを感じながら、エースはフツと笑った。

(ねえエースくん……何か悩んでるのなら相談に乗るよ?)

(悩み、か………)

なのはが目を此方に向けながら、おずおずとした態度で念話を飛ばしてきた。そこには此方を気遣う雰囲気が見て取れる。蛇足だが、この五日間で何とか念話だけは使えるようになり、エースはそのことを非常に喜んでいた。

(確かにこの上なく悩んでるが……なのはに聞いてもらうのも悪いし、そもそも聞かせてもしょうがねエしなあ………)

(うっ！ そ、それは私はまだまだ子供だし、頼りないかもだけど……話してくれるぐらいしてもいいんじゃないかな？ ホラ、話すだけなら何にもないし、愚痴とかなら聞くから！)

子ども扱いされたことに少しだけ傷つきながらも、なのはは尚も食い下がる。だが、エースは「うーむ………」と首を傾げるばかりで言葉にしようとしめない。かなり珍しい光景である。

だが、少女の忍耐はエースが指摘したとおり少しばかり子供だっ

たよつだ。彼らしくない態度に痺れを切らしたなのは、答えを待たずに念話で声を張った。

(もう、エースくんは何で悩んでるの?)

(だって……だってよ……!)

なのはの強い口調に少し気圧されたエースが、潤ませた目をなのはに向けた。悲壮感すら漂っていることから見て、かなりの悩みだとなのはは直感する。そして本当に悔しそうな顔をしながら、エースは心の中に燻った魂の叫びを口にした。

(だって! なのはだけすげエ魔法がバンバン使えるなんて、そんなのずりいじゃねエかよ~~~~!!)

バキヤツ!!

「な、なのはちゃん!？」

「おお? どうしたんだ、なのは?」

その光景を見ていたすすずかと、運転席に座った土郎が虚を突かれたような声を上げた。その声の先には、座席の後ろに見事なヘッドバットを決めたなのはの姿がある。

「随分と勢いよくいったわね……すごい音したけど、頭大丈夫?」

「だ、だいじょうぶ……………」

ぷくーつと膨れていくたんこぶを擦りつつ、なのはは必死で笑顔を浮かべた。が、涙ちよちよぎれながらのそれは、確実にいつぱいいつぱいだと思われる。これはツツこんだら負けなのだろうか。

(うう、痛い……………もう、エースくん！ 後でお話だよ！)

と思つたら向こうからツツコミがきた。涙目で非難するような視線をこちらに向けている。首を傾げるエースに対し、なのはは笑顔を浮かべながらこめかみをひくひくさせた。

その時エースの手元が本当に僅かな、淡い刹那の輝きを放つ。彼の手首から、見かねたエールが念話を飛ばしてきた。光は微弱なため、アリサ達は気づかないようだ。

『すみませんなのは。お気持ちは多分にお察ししますが、マスターは素が元々こういう方なので。何卒ご容赦を願います』

(……………ハア……………うん、わかったよ。エールもけっこう苦労してるんだね……………)

『(いえいえ。貴女ほどではありませんよ)』

精神コンタクト成立、交信フェイズ終了。ここに、初期少女同盟が結託を果たした。主に対エース用の目的で以って。

その当人は既にこちらから意識を外し、窓の外を見やっていた。悩みを吐き出したせいか、その表情はいつものものに戻っている。

首を傾けながら助手席の桃子に尋ねた。

「なア、温泉つてまだなのか？」

「ふふふ、もうすぐ着くわよ」

（マイペースすぎだよ！！）

『（どろどろ、落ち着いてくださいなのは）』

今日も世界は平和である。

- Side change -

旅館、山の宿。これが、今日からエース達が宿泊する旅館施設の名前である。海鳴市から来るまで数時間の距離にあり、旅館の造りやサービスは結構しっかりしている。

しかし近くにもっと大型の旅館やホテルがあることと、そもそもが穴場の宿であるためか、この時期でも各地方から来る観光客でこった返すことはない。採算が取れるかは心配であるが、この旅館特有の静かな空気が、またなんとも粹な秀囲気を醸し出していた。

「いやー、風呂なら数え切れねエほど入ったけど、温泉つてのは初めてだからな。わくわくするぜ」

「おいポートガス。はしゃぎたい気持ちは分からんでもないが、あまり騒ぐんじゃないぞ」

「おう！ わかってるから心配すんなって」

意気揚々した声と窅めるような声が、くぐもった感じで響き渡った。ここは旅館名物の温泉風呂の男子脱衣所である。旅館に着いた高町家+お友達一同は、その雰囲気を楽しむのもそこそこに、さっそく最大の目玉である温泉に入りに来ていた。

その際、エースは美由希と一緒に入らないかと提案された。まあ、肉体年齢は確かに十歳であるから法的にも問題はないし、元より色気よりも食い気と冒険、スケベ心より好奇心のエースなので、別段深くは考えていなかった。

しかし、それに恭也が過剰反応。鬼気迫る顔で絶対ダメだと食って掛かったのだ。半眼気味で残念そうにする美由希に、兄として義務だと言い張りながら。

しかし、運命は恭也に味方した。忍やファリンなどは別段気にしておらず、むしろウエルカムのようだったが、アリサが恭也以上に反応し、顔をこれ以上なく真っ赤にして拒否の念を叩きつけたのだ。すずかやなのはアリサほど過剰ではなかったが、えらく恥ずかしそうにしていたので、結局美由希の方が折れる形となった。

一方、温泉が待ちきれないエースはどっちでもいいと宣言し、しきりに連れて行ってくれと念話でせがむユーノ、そして警戒する恭也と共に男湯へと歩いていった。そのあまりの淡白さに少女達はちよっとだけ傷つき、しかし一見すると紳士にも見える態度で無自覚にポイントを稼いでしまったことをエースは知らない。

そして話は冒頭に戻る。鼻歌でも歌い出しそんな感じでズボン  
脱ぐエースに、ユーノは安堵の息を吐きながら念話を飛ばした。

「（助かったよエース。僕はもう少しで、きっと何か大切なものを  
失っていたと思う……………」

「（？ よくわかんねエが、まあよかったな）」

ほとんど流し気味の納得をしながら、エースはTシャツに手を掛  
けて脱いだ。すると既に脱衣を完了した恭也が、エースの方に夕オ  
ルを渡そうと近づいてくる。だが、その歩みが突如として止まった。

「お、おい、ポートガス！ 背中 of 『それ』 はいつたい何だ!？」

「へ？ 背中?……………おお、そついや見せるのは初めてだったな」

恭也の驚いたような、戸惑うような声が脱衣所に響く。エースの  
惚けたような声になしに反応し、その方向を見たユーノも息を  
呑んだ。その視線は、彼の背面へと注がれている。

フレット状態で目を見開いて言葉を失うユーノ。恭也も動揺と  
戸惑いで顔が強張っていた。だが、それも仕方のないことだったと  
いえよう。

二人が視線を向けた先、エースの背中一面に描かれていたのは、

「（ド、ドクロの刺青……………!?)」

黒を基調色とした、巨大なドクロマークだった。はじめに見えた

のは骨の形を模した黒の正十字。その上に大きな三日月型の白い髭を付けて不気味に笑う骸骨が、細分まで克明に刻まれていた。見ていただけで気圧されそうな威圧感が滲み出ており、ユーノ達は息を呑む。

今時、これほど大きな刺青など入れている者などそれこそヤの付く職業の人がテキ屋、それに相当な刺青マニアぐらいしかいない。恭也もそのことを知っているし、ユーノに至っては刺青を見ることすらほとんど初めてだった。なので、見た目十歳ほどにしか見えないうエースが背中一面を覆うほどの刺青をつけているという事実には、二人は目が離せない。

「ああ、これが……………刺青は……………」

エースが肩に手をやり、背中の方へ懐かしむような視線を向けながら目を閉じた。一つ息を吐きながら、何かを考えるような仕草をする彼に二人は黙って言葉を待つ。そして、エースの閉じていた目が開くと、そこには計り知れないほど強い光が浮かんでいた。

「おれの……………誇りだ……………」

ゆっくりと、しかしはつきりとエースは言葉を紡ぐ。その表情は本当に嬉しそうであるが、こちらが言葉を発するのを躊躇うほどの何かが入包されている。よほどの強い思い入れがこの刺青マークにあるのだろうか。彼の雰囲気はいつものおちゃらけた感じではなく、紛れもなく『男』のそれとなっていた。

それを感じ取ったのか、恭也は何も言わない。そしてそのままエースに近づくと、肩をポンと叩いて笑みを見せた。

「そうか……だが、あまり人には見せない方がいい。俺や母さんならいいが、そういう刺青はここではあまり一般的ではないんだ。他の人間などに見られると、少々厄介なことになるかもしれないからな」

ぶつきらぼうながらも、気遣いの心を見せる恭也。美由希や桃子が以前に何度か言っていた。エースは時々自分たちよりも年上なんじゃないかと思うほど、大人びた雰囲気と顔をする時があるというのを。

それを今まで話半分で聞いてきた恭也だったが、ここに来てそれも改めざるを得なくなった。彼も漠然とではあるが、エースの存在に何かを感じ取り始めている。当のエースは真剣な顔で見つめる恭也にキョトンとしながらも、すぐにその顔に笑みを乗せて返した。

「そうなのか？ それはちっと残念だが、まア忠告として受け取っとくぜ。へへ、ありがとなキョウ」

「だから！ 恭也『さん』だと言ったるうが！」

遣り取りはまだ子供だが、傍から見れば微笑ましい兄弟のじゃれ合いに見えないことも……ない。目尻を吊り上げて追い回す恭也とそれに笑いながら逃げ回るエースの二人を、ユーノは苦笑しつつ見つめていた。

TO BE CONTINUED . . .



第六話 新たな相棒と温泉旅行 〱 誓いの印（後書き）

新年初の更新でした。

そういえば、エースの誕生日は今日なのでした。となると、二重の意味でおめでとうですね！

新年のあいさつや抱負の思案などみなさま色々あるかと思いますが、お互いに頑張っていきましょう！

それでは、ツライツェン 再見！

今年もよろしくお願い致します！！

## 第七話 相対く 束の間の安らぎ（前書き）

ご無沙汰しておりましたコエンマです。

えー、本当はもう一つの小説を更新する予定だったのですが、文章が上手く纏まらないため、先に仕上がっていたこちらの方を投下することに致しました。そちらをお待ちになっている皆様、もうしばらくお待ちくださいませ。

さて、今回は他の作者様のところでやっていたランダム主題歌ネタをやりたいと思います。物語にピッタリな曲を探すのって、なかなか難しいですね。

では記念すべき第一選曲は私のお気に入りから。さらに本編第七話をどうぞ！

・ 本日のOPテーマ・

『Wild Flowers』 歌：RAMAR

【ZOIDS・ゾイド】より。

OP・verは名曲です！

第七話 相対く 束の間の安らぎ

『 戦闘準備 』

海軍本部大佐？黒檻？ヒナ

- Side N an o h a T a k a m a c h i -

「ね、温泉で汗流したし、卓球しようよ」

「ええ、卓球う？」

風呂上り、開口一番にすずかちゃんから提案が挙がった。温泉でまったりとした時間を過ごした私たちは、木の香りが漂う旅館の廊下を歩いている。

「私、先にお土産見たかったんだけどなあ……………」

アリサちゃんが少し不満そうに言う。私もそれに同調して、うんうんと頷いて援護する。しかし、すずかちゃんは小首を傾げながらにっこりとした笑いを見せた。

「じゃあ、どっちから行こうか？」

うつ……………なんだか嫌な予感がするよ。私は救いを求めるような目をしてアリサちゃんの方を向くが、視線を向けられた彼女はむふ、

と片目を閉じながら忍び笑いを零した。

「じゃんけんしたら？」

あう……………ほら予想通りになっちゃった。私が運動苦手なこと、二人とも知ってるはずなのになあ……………。せめてエースくんがいれば、私は応援役と傍観者になれるんだけど……………あ、エースくんがいたら絶対私も誘うからやっぱりダメ。

「あの上……………私、卓球はちょっと……………」

恐る恐る声に出すが、二人には届いていない。アリサちゃんは何だかニヤニヤしてるし、すずかちゃんは大それた目に見た目に反して運動系は飛び抜けてるから、援軍にはならない。うう……………今日も私の一人負けに決定になっちゃうよ……………。

「はあい、おチビちゃん達」

だが、少しブルーになっていた私の気持ちを吹き散らすように、少し軽い調子をした声が響いた。私は思わず足を止める。すずかちゃん達も何事かといった感じで、声の聞こえてきた方を向いていた。

「ふんふん……………君かね、ウチの子をアレしてくれちゃってるのは」

歩きながら話しかけてきたのは、お姉ちゃんと同じ年ぐらいである上上の女性だった。オレンジの長髪に吊り気味の目、口元には

笑みが浮かび、眉間の辺りには縦長の赤い宝石のような輝きが見える。

顔に見覚えはないし、何を言っているのかも分からない。けれど、明らかに私達……いや、私一人に対して言葉を発しているように見えた。

「え、あ、あの………?」

女性は私に顔を寄せ、至近から見つめてきた。彼女から発せられる異様な威圧感に気圧され、私は後ろに下がる。すると、女性は顔をさらなる笑みで染め、その視線をじろじろと観察するようなものへと変化させた。

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンちょに見えるんだけどねえ………」

女性の口元が吊り上がる。口元からは犬歯のようなものが見え、浮かんだ邪悪な笑みに背筋が寒くなった。すずかちゃんは酷く心配そうにオロオロしていて、アリサちゃんは今にも飛び掛らんばかりに女性を睨んでいる。

怖い。顔は笑っているけど、射抜くような目に親しみはなく、威圧感だけが漂っている。理由が分からない悪意に、私は何も出来ずにいた。

「ふう〜ん………」

私が怯えていることを察したらしい。余裕そうな態度がだんだんと大きくなっている。女性はそのまま前に出ようとして、

「ガン飛ばすのも大概にしとけよ、嬢ちゃん」

静かな、しかし有無を言わせぬ声色によって遮られた。同時に肩へとかかった強い力によって、身体が後ろに引つ張られる。よろめいた体勢を立て直そうとした私の前に、その影は本当に自然な流れを以って、立ちふさがるように現れた。

うなじの半分を覆い隠す黒色の髪。私よりも一回りほど大きいがつしりした肩幅。理由なく頼りたくなるその声色。

そんな会ってまだ十日ばかりの男の子、エースくんの後姿を私は見つめていた。

「年上だろ？ 大人気ないぜ？」

（なのは、大丈夫？）

（う、うん。大丈夫……………）

女性に相對している彼の替わりに、その肩に乗っていたユーノくんが此方を向いて、気遣うような声をかけてくる。私はそれに少し戸惑い気味に頷くと、エースくんへ視線を戻した。

彼が私を守ってくれている。言葉にせずともそれが分かり、私の胸をトクンと掻き鳴らした。お風呂あがりとはどこか違う熱が満ち

てきて、少し顔が熱くなる。

(な、何だろ……………これ……………)

自分の心に問いかけるも、答えは返ってこない。声を聞くだけで心が安らぐなんて、本当に不思議だった。お兄ちゃんやお父さんに守られているような安心感、お母さんやお姉ちゃんに抱かれているような温かい感じに包まれる。それらが緋い交ぜとなった、しかし経験したことのない感覚が私の中で反響し、次第に大きくなっていく。

私は知らず、彼の服を掴んでいた。いつの間にか、不安が完全に消え失せている。それこそ、本当の魔法のように。

俯き気味だった視線を上げる。そして安堵が満ちた心の声は言葉となり、私の口をまっすぐ突いた。

「エ、エース、くん……………」

こぼれた言葉。彼を呼ぶ声。それに反応して振り向いた顔に笑みが浮かぶ。その横顔は少年のようにも、ずっと年上の大人のようにも見えた。

- Side out -

「エ、エース、くん……………」

「おう。お前ら先に出てたんだな」

エースはいつもの口調のまま、不安げなのはに笑いかけた。同時に彼女の緊張も抜けたようで、ほっと息を吐いている。それを横目で捉えつつ、なのはを引き戻して後ろにやったエースはそのまま前に出た。

なのは越しに後ろの二人を見やる。すずかは胸の前で不安そうに握り込んでいた両拳を解き、アリスは「やっと来たわね」といった風に肩を竦めていた。表情はほとんど真逆であるが、どちらも緊張から解放されてほっとしたような雰囲気だった。

（さっそく厄介ごとか。こんなトコまで来て無粋だなア、オイ）

エースは三人と視線を交し合うと、身体を正面に戻す。エースが風呂から出たのはついさっきだ。一緒に入った恭也は意外と長風呂であり、エースやユーノも初めての温泉にはしゃぎ気味でいつもより長く入っていた。さらに、途中から入ってきた土郎とも話が弾み、恭也も交えて相手にしてしまったため、結果的に相当の長風呂となつてしまっていたのだ。

少しのぼせかかったが、いい気持ちだった。そして、風呂から出た後のコーヒー牛乳でも楽しもうかと売店へと向かっていた際、この場面に遭遇したというわけである。

エースは見下ろしてくる女性の視線から目を逸らさず、真っ向から受け止めた。

「なんだいアンタは」

女性の目が細められ、眉間に皺が寄った。エースが男だからだろうか、なのはを相手にしていた時よりも圧迫感が強くなっているような気がする。視線の余波を受けた少女達が、エースの後ろに隠れるように身を寄せた。

女性の表情は険しい。おそらく話に割り込まれたことに苛立っているのだろう。意識して排除の念を出している感じが見て取れる。なのはの肩に移ったユーノも、険しさと焦燥感を滲ませた表情で女性を見ていた。

睨みつけるような視線は途切れない。これが普通の少年だったならば、彼女の雰囲気即座に恐れをなしただろう。ともすれば大人すら怯ませそうな眼力だ。十代になっただけの男子には少々荷が重すぎる。

だが、そんなアリサすら怯むような鋭い眼差しを受けても、当のエースはびくともしない。それどころか、口元には笑みすら浮かんでいる。そのまま僅か表情を変えることもなく、先ほどと同じ調子で女性に話しかけていた。

「おれはエース。以後よろしく」

自信に満ちた笑みを通し、内面に満ちる余裕がこぼれた。なのは達は、重苦しい空気をいとも簡単に吹き飛ばした彼を呆気に取られた表情で見つめている。女性の方もまさか普通に返されるとは思っていなかったのか、目を丸くして一歩下がった。

「い、いや、別に名前を聞いてるわけじゃないんだけど……ま、まあいいや。ごめんねえ、人違いだったみたいだよ、知り合いによ

く似てたからさ。おゝよしよし、可愛いフレットだね。」

威圧感を完全にいなされ肩透かしを食らった女性は、視線をエースからなのはとユーノに変更した。戸惑いによるものからか、威圧感が緩んでいる。だが、一瞬だけ鋭い視線が走ったかと思うと、頭の中に声が聞こえた。

(とりあえず、今のところは挨拶だけね)

(( ( ! ) ))

念話。なのはとユーノは驚きに目を見開きながら、笑みを浮かべる女性を見上げる。エースは予想出来ていたことだったのか、僅かに瞳を揺らすだけに留まっていた。

(忠告しとくね。子供はいい子にして、お家で遊んでなさいね。おいたが過ぎるとガブツといくわよ?)

エースとその後ろの二人の反応を観察しながらそう言うと、女性の目が鋭く細まった。向けられた敵意になのはは肩を震わせ、ユーノは女性を睨みつける。女性はそれを見て口の端を吊り上げると、三人の脇を歩いていった。

(ふええ、怖かったあゝ……………ありがとね、エースくん)

なのはが胸を撫で下ろしながら念話を発してくる。先ほどの女性の態度に困惑と不安を抱いていた彼女にとっては、それから解放されたことによる安堵感はひとしおだったのだろう。

一方のユーノは険しい表情のまま二人を見やった。

(……………彼女は僕らがこちら側の人間だということを知っていた……間違いなく、魔法関連の人間だ。おそらくだけど、これからぶつかることになるかもしれない……………)

(上等だ。来たけりゃ好きなだけ来させてやればいい。あんな下つ端の嬢ちゃんとは戦うだけ無駄だろうけどな)

(そ、そんな過激な……………ん？ 今下つ端つて……………？ ま、まさか、彼女の上で糸を引いている者がいるっていうのかい！？)

エースの台詞を聞き逃しそうになったユーノが、含まれていた言葉に気づいて慌てて問い返す。極々自然な、夕飯のおかずでも聞くような口調だったが、エースが口にしたのはかなり重要な情報であったからである。なのはも驚いたように見守る中、ユーノの声に頷きを返したエースはポケットに手を突っ込みながら、確信に満ちた声色で告げた。

(ああ。おれの経験上の話になるが、ああやって接点を持つてくる奴らは偵察的な要素が絡んでることが多い。んで、その場合は他の仲間とか誰かから依頼されてるか、組織立ってやってるのが大方のセオリーなんだよ。おれの勘が正しいのなら、近いうちに今の嬢ちゃんも交えて会えると思うぞ)

『(私の予想と同じですね。拠点などへの大規模な潜入捜査ならまだしも、ワンマンで行動してるのにわざわざ姿を晒すバカはいません。万が一いたとしてもそれなら簡単に捌けますし、今の状況下では相手にそこまでのリスクを負う理由はないはず。となれば必然的に二人以上、あるいは複数人がこの件に関わっていると考えるのが最も妥当です。もしかすると、この前現れた魔導師との関係もある

やもしれません。用心はしておくべきでしょう。』

エースの言葉に同意するように、エールからも念話が飛んできた。なのは「おおー……！」と感心したような様子で、エースとそのデバイスを見つめている。ユーノは二人（？）の推測に納得しながら、一人考えを巡らせていた。

（経験上って……さっきの刺青のこともそうだし、なんだかこう  
いう事態の対処も手馴れている感じだ。エース、君は……いや、  
今はやめよう）

ユーノはエースを見やるが、すぐに不毛な考えであることに気付  
き、考えを放り出す。無理に聞こうとは思わないし、エース自身も  
多くを話さないで、詳細は伏されたままだ。他の情報源はと言え  
ば、エースが口にした聞きなれないいくつかの言葉、それに悪魔の  
実ぐらいしかない。

だが、それも大した糸口にはならないだろうとユーノは踏んでい  
た。本格的に腰を据えて調べてみないと分からないが、発掘関係か  
ら様々な世界に関しての知識を蓄えてきた自分が、あれだけ多くの  
言葉や特異な能力の存在にまつたく聞き覚えがないというのはちょ  
っとあり得ない。

少し自惚れもあるが、それを考慮してもおそらく結果は空振りの  
方に傾くだろう。つまりはこれ以上は調査不可能、エースが話して  
くれるのを待つしかないという状況なのだ。

尤も出身世界の知れない次元漂流者への対応は、本人が話してく  
れないと先へ進まないのが管理局と言えど常である。だから、会っ  
てまだ一週間ほどの彼が何者なのか、詳しいことがわからないのは

当然かもしれない。だが、ユーノには彼への信頼を疑う感情や、彼のことを裏で調査しようという考えは浮かんでこなかった。

その根拠はと問われれば、そんなものなど何も無い。だがエースは絶対に裏切らない、悪者ではない。これだけはユーノの中で確信となっていた。それはエースが持つ不確かさや疑念が、彼を目の前にすると消えてなくなってしまうからだ。それを考えることも馬鹿らしいといったように。

(はは……………見習いとはいえ、研究者の意見とは思えない……………)

ユーノは密かに苦笑を浮かべる。エースが纏う不思議な雰囲気とそれに起因する彼への無根拠な信頼。だが、根拠がない故にとても温かい感じがした。

(何が起きてても、エースなら大丈夫……………僕となのはの、友達なんだから……………)

ユーノはそれだけを心に留め、思考の海から舞い戻る。そして、先ほどの女性の態度に怒り心頭なアリサと、それを苦笑気味に宥めるエースを穏やかに眺めているのだった。

- Side change Fate Testarossa -

目を閉じながら、私は自らの感覚を研ぎ澄ませていた。辺りに張り巡らせた意識に目当ての反応が引っ掛かるのをひたすら待つとい

う、ひたすらに地味な作業だ。広範囲でやっているので地味なのは裏腹に根気と集中力のいる作業なのだが、かつてリニスから受けた特訓内容を日々欠かすことなくしてきた私にとっては、もはや慣れたものである。

木々の間を抜けて透き通った風が頬を撫でた。この世界の風は好きだ。本当に優しく穏やかな、平和を感じさせる風だからだろう。

その風と、自分のやっていることとの対極さ加減に、私は苦笑いをしながらふつと息を洩らした。

「あー……………もしもフェイト？　こちらアルフ」

頭の中に使い魔のアルフ言葉が響いてくる。温泉に行くと言っていたから、たぶんそこから念話を飛ばしているんだろう。パートナの声に相槌を返すと、さっそくアルフは話を切り出した。

「（ちょっと見てきたよ。例の白い子）」

「（！　そう。どうだった？）」

「（うーん……………まあどうってことないね。フェイトの敵じゃないよ）」

少し考えた後、なんでもないように声を返してくるアルフ。軽い口調だが、そのところはしっかりしているので安心できる。ともすれば私より優秀な子の分析だ、問題はほとんどないだろう。

私の方もジュエルシードの特定が進み、今夜にも捕獲できそうなことを告げた。アルフの声がより弾んだものとなり、一様に褒め称

えてきた。彼女の親愛の表れと分かってはいるが、少々照れくさい。

と、温泉の気持ちよさを熱く語っていたアルフが「あっ」と声を上げた。

「(どうしたの?)」

「(いやね、さっき会ったのでちょっと気になる奴がいたのさ。白い子と一緒にいた男の子なんだけどね)」

その言葉にドキツとする。男の子と言われれば、現在私の頭に思い浮かぶのはただ一人、あの森で出会った少年だった。あの白い子を守り、未知の炎と体術を扱いこなし、別れ際にジュエルシードを譲ってくれた、不思議な雰囲気を持つ少年。

私は黙ってアルフの言葉を待った。

「(魔力は白い子よりずっと小さくて、正直お話にならない感じだったね。逆立ちしたってフェイトには敵わないと思うけど、あたし相手に全然物怖じしない奇妙な奴だったんだ。えっと特徴は黒髪で……)」

「(少し背が高くて、私と同年ぐらいの男の子……だね?)」

アルフの言葉に割り込むようにその先を言う。アルフは少しだけ驚いたような気配を零したが、しばらくの後先ほどと変わらない口調で報告を続けた。

「(そうそう、その通りだよ。何だ、フェイトも会ってたのかい。なら話は早いね。あのガキ、あたしが思いつきり睨んでも全然堪え

てなかったんだ。正直なところ少し驚いたよ。まず間違いなくビビるぐらいの視線向けたっていうのに、顔色一つ変えないで普通に返してくるんだもん。エースって呼ばれてたから、それが名前だろうね)」

「エース……………やっぱり同じ人だ……………」

フェイトはアルフから聞いた名前を口に乘せた。数日前に戦った時に耳に挟んだ名を思い返ししながら、「（切り札<sup>キース</sup>なんて、大層な名前だよ〜）」と皮肉げに愚痴るアルフのぼやき声を聞く。私はどこか印象的だった彼の言葉と姿を頭に描き、顎に手を当てて考えに耽った。

（この前、あの人はすごく戦いにくそうだった……………たぶん全力じゃなかったはず。動きもすごく速かったし、いきなり出したあの『炎』のことも結局全然分からなかった。もし戦うとしたら、一筋縄じゃないかもしれない……………）

夜に落ち合うことをアルフに告げ、念話の通信を切る。夜まではまだ長い。だが、探索と対策を練ることを考えれば、さほど余裕があるわけでもなかった。白い子のことは大丈夫だとアルフは言ったが、注意するに越したことは無い。

（それに……………）

私は今ある情報から自分が納得できるだけの仮説を立てた。あの能力は自分と同じような魔力変換資質の希少技能<sup>レアスキル</sup>なのかもしれない、ということだ。もしかすると、能力はそれだけではないかもしれないけれど。

しかし空は飛べないようだったから、距離を取りつつ制空権を奪えばそれほど苦にはならないはずだと自分の中で収まりをつける。アルフもいるし、油断しなければ心配など何も無い。

(……………どちらにしても今夜、かな)

ともかく時間は限られている。私は再び意識を己の中に深く埋没させ、絞った箇所を囲むように感覚を張り巡らせた。

時間はあるようで意外と少ない。アルフと合流するまでに、ジュエルシードの特定を急がなくては。

T O B E C O N T I N U E D . . .

第七話 相対く 束の間の安らぎ（後書き）

第七話でした。

更新頻度が安定しないことを悔やみつつ、誤字脱字とかがないか戦々恐々としている作者であります。

そんなこんなでも続けて行きたいと考えておりますので、お暇でしたら時々チェックしてくれると嬉しいです。

それでは、今回は短くまとめてこのへんで。

ツァイツェン  
再見！

第八話 二度目の邂逅 ～ 真夜中の決闘（前書き）

随分お待たせしてしまいました、コエンマです。

さて、リアルの忙しさが留まるところを知らない中でコツコツ書き上げてきたものがやっと完成いたしました。時間掛かりすぎです・・・。

と、前置きは少なめにしてさっそくいってみましょー！

第八話 二度目の邂逅 〱 真夜中の決闘

『言いたい事は何も無い。お前の御託を聞き入れる気もないしな。排除するのみだ……!!』

シャンドラの戦士？戦鬼？ワイパー

「あつ！？」

「あら、あらあら………子供はいい子でって、言わなかったっけか？」

橋の袂の上に座った女性が、口角を嫌味ったらしく吊り上げながら言った。笑みを向けるのは、昼間に出会ったオレンジ髪を持つ浴衣姿の女性。その目には、戦い事に疎いなのはですら感じ取れるほどギラギラとした敵意が浮かんでいた。

さらに横に視線を流したなのははぎよっとする。その傍らには、以前すずかの家の森で出会った、金色の髪を持つ少女が佇んでいたからだ。無言で此方を見やる彼女に目が引きつけられる。

「やっぱり、彼女の関係者だったのか………!!」

ユーノが目を鋭くしながら二人を睨む。予想はしていたようだが、悪い予感がこつも当たってしまったことに悔しさが滲んでいるのがありありと見て取れた。

なのは達がここへ来たのはつい先ほどだ。昼間の一騒動の後は特段何も起こらず、なのはは家族や友達との時間を満喫し、仲良く同じ部屋で就寝していた。

だが、アリサやさすがが寝入ってから数時間後、事件は起こった。近くに潜んでいたジュエルシードが発動したのだ。なのはとユーノは、ジュエルシードが放つ強大な魔力に気付き、慌てて旅館を飛び出してその魔力を辿ってきた。

そしてその現場において、彼女らと遭遇したというわけである。

「それを……ジュエルシードをどうするつもりだ！ それは、危険なものなんだ！」

ユーノは怒りと戸惑いを交えた声色で叫ぶ。魔法に少しでも携わる者なら、いや魔導師ともなるような人物が、ジュエルシードをはじめとするロストログアの危険度を知らないわけがない。にもかかわらず、それを求めるといふ行為を彼女らはしている。それも、明確な目的を持ってだ。

ともすれば平和を揺るがすほどの力。人の手に余るものがもたらす予測不可能な危険性。その先に碌な結果が待っているはずがない。

女性はユーノが言葉に含めた意図を汲み取ったようだが、肩を竦ませて大仰にすつとぼけるように言った。

「さあねえ、答える理由が見当たらないよ。それにさあ、アタシ親切に言ったよね？ いい子でないとガブツといくよって……！」

女性の目が細まり、赤い舌がチロリと唇を舐めた。威圧感が増した彼女になのはが身構え、ユーノがギリッと歯を噛み締める。しかし一触即発の空気の中、二人の後ろからよく通る声が響いた。

「言わせとけよユーノ。相手の言い分を聞くのは、ぶつとばしてからで十分だろ？」

スタスタと、迷いの無い足音が辺りに響く。そして、なのはの前にまで出てくると、彼は女性の視線からなのはを守るようにして立ち止まった。

次元漂流者、ポートガス・D・エース。かつて最強の名を欲しいままにした伝説の海賊？白ひげ？の部下であり、その二番隊長を務めていた自身も生ける伝説の一つである男だ。

現在はなのはとユーノの友達となり、身体能力も少年体に戻ってしまった彼だが、戦士としての格まで衰えるわけではない。その表情に子供とは思えない戦気と裏打ちされた自信に満ちた笑みを浮かべ、彼は静かに佇んでいた。

エースはポケットに手を突っ込みながら、先の二人をまつすぐに見据える。そこには、なのは達のような怯えや不安、焦燥はない。この殺伐とした状況にもまったく動じていない様子だ。単に事態の重さをよく分かっていないことも多分に含まれてはいるが。

エースの登場に魔導師の少女が軽く目を見開く。ユーノとなのはにガンを飛ばしていた年上らしき女性も、ヒュウと口笛を吹いた。

「へえ？話を聞いてもしかしたらとは思ってたけど、アンタもやっぱり関係者だったのかい。魔法を知ってるなら、昼間の態度にも

納得だよ。けど面白いこと言うんだね。その程度の魔力で、あたしらをぶっ飛ばすだって?」

挑発ともとれる言葉に、ずん、と威圧感が増した。なのはがレイジングハートを強く握り締め、ユーノが低く唸り声を上げる。しかし、エースは今までと変わらない態度で彼女に応じた。

「ああ、そう言っただろ。ま、引いてくれるんなら大歓迎だ。おれは勝てるよと分かってる相手に勝負挑むほど、人でなしじゃねエつもりだからな」

女性の嘲るような口調にもエースは平然と返す。そこに子供の強がりとしての色は欠片も見受けられない。強い意志と光を瞳に宿し、悠然と佇む一人の戦士がそこにいた。

余裕げに構えていた女性から表情が消える。その目にギラリとした危険な光を宿して、彼女はエースを射殺すかの如く睨みつけた。

「……………ガキの癖に言っじゃないか……………その言葉、すぐに後悔させてやるよ!」

女性の目が鋭く光り、猛禽類のようなものになる。そして次の瞬間、目を疑うような驚くべきことが起こった。女性の髪が伸び、腕が無骨に隆起し、鋭利な牙が口元から現れる。

一瞬の後、女性の体は猛々しい獣へと変貌を遂げていた。

「やっぱり……………アイツ、あの子の使い魔だ!」

「「「使い魔?」」」

ユーノが確信を得たように叫んだ。僅かに目を見開いていたエースと、言葉をなくしていたのはがそれに反応する。狼のような四足の獣となった女性は、今までと変わらぬ声色で誇らしげに語り出した。

「そうさ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命。製作者の魔力で生きる代わりに、命と力の全てを掛けて守ってあげるんだ」

「よくわかんねエが、あれも魔法なのか。面白エな、まるで動物系ソオンの能力者だ。イヌイヌの実、モデル狼ウルフってところか？」

「エ、エースくんの世界って、ああいう人もいるんだ………というかイヌイヌの実って………前に説明された時も思ったけど、悪魔の実の名前って結構安直なんだね………」

なのはが若干引き攣った顔で言った。それにはユーノも同意見のようで、コクコクと頷いている。そんな二人分の驚愕とカルチャーショックを尻目に、狼となった女性が傍らに佇む少女に声を掛けた。

「先に帰ってて、すぐに追いつくから」

「……………うん。無茶しないでね」

「オーケーッ!」

頼もしい叫びを上げながら、四足となった女性が地を蹴って疾駆する。さすが獣型だけあって身のこなしは軽く、そして驚くほど素早い。エースはそれを見とめると、二人を守るように数歩前に飛び出た。

「来るぞ！（ユーノ、お前確か場所を変える魔法が使えたよな？  
そいつの準備、頼むぜ！）」

（て、転移魔法を？ わ、わかった！ 起動まで七秒かかるから、  
それまで時間を稼いで！）」

ユーノがなのはの肩口から飛び降り、式の構築を開始する。エースはそれを横目で見て笑みを零しつつ、凄まじい速度で走ってきた彼女に対峙した。前面に出した右腕に力を溜めるように絞込み、腰を落として構える。

「ここからは通行止めだ。お嬢ちゃんには退場してもらおうぜ」

「出来ると……………思ってるのかい！」

言葉より早く、赤い狼が飛び上がる。上段からこちらを攻撃するつもりらしい。エースはそれにニヤリとした笑みを零し、正面から来る彼女を見据える。

力を込めた指がパキリと音を洩らし、籠った熱がその輪郭を揺らめかせた。

「ああ、おれ達が用があるのはその子だからな。悪イが、ちつとの  
間下がっててくれよ……………？ 炎幕？！！<sup>えんまく</sup>！」

声走り、その手から炎が迸った。エースは宿った炎をそのままに、刀を引き抜くが如く腕を振るう。空を掻くようにして描かれた炎の軌跡はみるみるうちに巨大になっていき、一瞬のうちに大きな布のような形をとった。

「うわっ!?!」

いきなり出現した炎に、突撃している身体に急停止を掛けるが既に遅い。自ら速度を落としてしまったことも手伝い、自分の正面に展開された炎によって、彼女はその勢いを完全に殺されてしまった。同時に絡みつくような炎に四肢を拘束され、紅の揺らめきが彼女の視界を奪う。

「あ、あつ、熱っ!?! な、なんだいこの炎はっ、うあちち!?!」

「! アルフっ!」

炎の戒めに捕らわれた使い魔を見て、主の少女が声を上げる。狼となった女性は振り払おうと身体を擦るが、炎とは思えないほどの強靭さに遮られ、なかなか抜け出すことが出来ない。その時、盾のように張られていた炎から突如として腕が飛び出し、彼女の喉元を体毛ごと掴んだ。

「うっ!?!」

同時に炎が割れ、腕の主が露になる。その相手は言うまでもなく、強い光を持つ瞳と自信満々な笑みを浮かべるエースであった。そのまま彼は身体を弓のようにしならせ、全身に力込める。

そして、

「七秒だ。ユーノ! あとは頼んだ、ぜっ!?!」

「うわあっ!?!」

右手に掴んだ彼女を地上に向けて思い切り投擲した。呼応するように、その先にいたユーノが緑色の光を放つ魔法陣を展開する。

「任せて!!」

獣型の女性が接触するのと、ユーノの転移魔法を発動したのはほぼ同時だった。淡い緑色の光に包まれ、大きさの違う二匹はその場から消える。おそらく離れた場所に移動したのだろう。

「うし、終わり」

スタン、とエースの降り立つ音がやけに大きく響いた。これではらくは時間が稼げる。あの狼の相手をユーノ一人でやらせるのは少し厳しいかもしれないが、逃げることに徹すればその限りではないはずだ。

「待たせちまったか。ようやく嬢ちゃんの番だぜ」

打ち鳴らすように数回手を払い、エースは少女へ視線を移す。水を向けられた少女は、整った眉を一度だけピクツとさせた後でエースを見やった。

「アルフをあんなに簡単にあしらうなんて……前に戦った時も感じていたけれど、やはり素人じゃないみたいだね」

「まあな。そこんところが分かってるってことは、それなりであってもちやんと訓練は受けてたってことか。ま、ついでに今の嬢ちゃんじゃ勝てねエってことを加えられれば、文句なしで満点回答だったが……さて、相棒はいなくなっちまったみてエだけど、どうすん

だ？」

「……………」

一度目を閉じ、少女が息を吐く。数秒かけてゆっくりと吐き出される息。それは、余分な感情や雑念を斬り捨てる儀式だ。戦う者としての。

そして再び目を開けたとき、彼女の瞳から迷いは消えていた。鋭く細められた目は戦意に満ち、無言で得物を構えてくる。エースは彼女の覚悟を感じ取り、内心でほくそ笑んだ。

「へ………… やっぱり引く気はねエ、か。上等だ、おれもここなら存分に戦える。勝った後で事情を聞かせてもらっからな」

拳を握り締め、構えを取るエース。対する彼女もいつでも動けるように膝を落とし、圧迫させたバネのように身を屈めた。

すつと、空気が澄んでいく。一触即発の状況に、森から音が消えかかる。だが、お互いに仕掛ける時を窺っているその最中、その前に出てくる影があった。

「…………… 待ってエースくん」

「なのは？」

相手に意識を割いたまま、エースは自分の前に出た彼女をちらりと見やる。なのはは相棒のレイジングハートを握り締めていた。

「私に、やらせて……………」

珍しくハツキリと告げた彼女に、エースは少しだけ驚く。彼女がこつも主張をするのは初めてだったからだ。しかし、自分の思うところは伝えねばなるまい、とエースは口を開いた

「なのは……………けどお前は……………」

「お願い、エースくん」

再びの強い声が、彼女の口から発せられた。

此方を見つめてくる目は本当に真剣だった。遊びとか好奇心では決してない、彼女なりの覚悟の光。折れるまで諦めない頑固さも半分ほど混じっているが。

体に漲っていた力が霧散していく。これ以上続けても、きつと不毛な言い合いになってしまうだろう。それを感じ取ったエースは、やれやれ肩を竦めながらと構えを解いた。

「……………ハア、わあつたわあつた。肩透かし食らったみてエでスツキリしねエが、それがお前の？意志？みてエだし……………ユーノによると、あの嬢ちゃんのも非殺傷とかいう便利なヤツらしいから、危険も少ないしな。まア、気が済むまで好きなようにやって来いよ。お前らの？戦い？、おれがちゃんと見届けてやる」

「……………ありがとう、エースくん。わたし、頑張るから」

なのはは微かに笑うと、お礼をいいながら歩き出した。苦笑するエースの横を通り過ぎ、その前に進み出てレイジングハートを両手で構える。黒の少女は向かい合うのはと下がったエースを交互に

見据えていた。

見かねたエースが肩を竦め、彼女に向かってはつきりと宣言する。

「心配すんな。おれは手を出さねエ。女同士つつつても、もし戦うことになりゃ一対一の？決闘？だからな、端から手を出すのは許さねエだろ。それに？男？が一度口にしたことだ、後からそれを撤回するなんて真似を誰がするかよ。もし手を出したら、その場でそっ首叩き落してくれて構わねエぞ。必要なら、今ここで腕の一本でも賭けようか？」

「い、いえ、そこまで言うのなら信用します……………」

無造作に左腕を掲げたエースに、少女が少ししどろもどろになりながらも納得した。本気を示すのは良いが、スプラッタ映画さながらの状況になっても困る。なのは相変わらずの彼の態度に苦笑いを零していたが、キリツとした顔で目の前の少女を見つめた。

「現時点でもB以上の戦技能力を持つ協力者、結界と強制転移魔法を扱える使い魔……………いい環境に恵まれている」

金髪の少女が静かにかつ淡淡と言った。まるで分析した結果を提示するだけのような、感情のない声。そんな彼女の台詞、正確には含まれていた言葉に、なのは眉間にしわを寄せて反論した。

「それは違うよ。エースくんやユーノくんは協力者とか使い魔とかとは違う……………そんなことのために私は一緒にいるんじゃない。二人とも、私の大切な友達だから！！」

なのはの言葉に少女の目が僅かに動く。それを感じ取ったなのは

は、己の内にある意見を彼女にぶつけた。

自分は戦いたくない、できれば話し合いでなんとかしたい。なのは存在を敵と断じる少女に対して、それを簡単に決めたいためにも考えを交わす場が必要なのだと。一生懸命に言葉を選びながら少女に問いかけるのはを、エースは離れた場所から見守っている。

だが、相手の少女は静かに首を振った。

「話し合うだけじゃ……言葉だけじゃきつと何も変わらない……  
…伝わらない!!」

鋭く光った目に呼応するように、彼女の姿が消えた。ハツとするなのはの後ろへ一瞬で回り込み、デバイスを横薙ぎにして振るう。

『 F l i e r F i n 』

主人のアシストをするように、レイジングハートが飛行魔法を展開した。桃色の翼の生えた靴で空中へと跳躍する。なのはは表情を歪ませながら、追いつがる彼女へ言葉を紡いだ。

「でも、だからって……!!」

認められない。？戦う？という事は、相手を？傷つける？という事だ。それを同い年ぐらいの相手にするなんて選択肢を、まだ九歳の少女がそんなに簡単に選べるわけがない。

だが、魔導師の少女は止まらない。黒いデバイスをまるで体の一部の如く振るいながら、まだ戸惑いを宿すのはへと迫った。

「賭けて。それぞれのジユエルシードを一つずつ……」

『Photon Lancer Get set』

少女の黒いデバイスが魔法発動の構築フェイズに移行する。戦いは避けられない。そう感じ取ったのはは口を真一文字に引き結ぶと、相棒を正面に構えた。

『Thunder Smasher』

『Divine Buster』

お互いのデバイスが主の命に従って、それぞれの砲撃仕様へと変更を完了する。そして自動詠唱の後、収束した魔力が両者から迸った。魔力による砲撃系魔法の打ち合いによって、空気が脈動する。だがぶつかり合った力は均衡し、双方とも勢いが止まった。破壊力はほぼ互角であるようだ。

「レイジングハート、お願い！」

『All right』

だが、なのはがそれを半ば無理矢理突き崩しに出る。レイジングハートを通して自分の魔力を上乗せし、魔力砲撃の出力を上昇させたのだ。それによりパワーバランスが一気に傾き、金色の魔力は巨大化した桃色の光に呑み込まれ、相手の少女もその中に消える。

エースは、地上から二人の戦いを感じたように眺めていた。

「すげエな。この前まで素人だったって話が信じられねエぐらい、

思い切りのいい戦いっぷりをしゃがる……魔法の火力も申し分ね  
エ、むしろ過剰すぎるくらいだ。だが」

独り言を途中で切り、さらに上空を見つめる。終息していくなのは砲撃をその目に宿しながら、エースの眉間に皺が寄った。

「（だが　それじゃダメだ、なのは……自分の中が揺らいだ  
ままじゃ……まだ、その子にゃ届かねエ……！）」

エースの瞳が険しく歪む。その表情が変化したのと、なのはが『  
彼女』の接近に気付いたのはほぼ同時だった。

『Scythe Slash』

なのはの頭上から、金色の髪を棚引かせながら彼女が飛び込んでくる。驚いた反動だとはいえ、動くことが出来なかったことは致命的である。恐怖から目を瞑ったなのはの首には、光で構成された刃が押し当てられ、あと数センチといったところで止まっていた。バチバチと背筋を震わせるような音が耳朵を焼く。

するとそれに呼応するように、レイジングハートからジュエルシードが一つ解放された。

「っ！？　レイジングハート、何を……！？」

なのはが相棒の行為に驚くが、フェイトは静かに「きっと主人思  
いのいい子なんだ」と告げる。そしてそれは正しい選択だった。現  
状、ああするしかなのはを助ける方法がなかったのだから。

戦気が霧散する。解放されたジュエルシードが光を放ちながらフ

エイトの手の中に収まった。

「勝負あり、だな。予想通りっちゃその通りだったが」

成り行きを見守っていたエースが、独り言を零す。実際彼にはこの展開が予想出来ていた。少しばかり魔法が扱えても、元は素人同然、戦いの「た」の字も知らなかったなのはでは、並程度に実戦慣れした相手には敵わない。しかしそれでも彼女を行かせたのは、彼にこれから先のことに対しての考えがあつたゆえであつた。

と、ユーノが引きつけていた女性　今は獣姿だが　が、エースの傍へ優越感に浸るような仕草でやってきた。そして光に包まれると、彼女は元の姿へと戻る。

「さすがアタシのご主人様！ 選択を完全にミスったね。二人がかりでいけばいいのに、あんなちよつと魔法が使えるだけのガキんちよなんか任せるなんて。目を瞑つたつて負けるわけないのにさ」

腕を組んでいたエースに、人間姿の女性がいやらしい笑顔で言葉を放ってくる。エースは彼女の方を一瞬だけ見やり、そして少し前方に佇むのはを一瞥した。

「ああ、確かになのはじゃ勝てねえだろうよ」

迷いの無い同意。台詞だけ聞けばかなり辛辣であろう。女性も、少し驚いたような顔になる。だがそれに反して、彼の口元には自信に満ちた笑みが浮かんでいた。

「（『今』は………な）」

背を向けた黒の少女を見ながら、エースが言葉と心の両方で静かに告げた。しかし言葉になどせずとも、端に覗かせたその真意はありありと浮き出ている。それを感じ取った女性は、むっとなりながら顔を背けて歩いていった。

「待つて!！」

なのはは去っていく少女の背中に声を掛ける。少女は僅かだけ顔を向けると、感情を排した声色で告げた。

「出来るなら、私たちの前にもう現れないで。もし次があったら、今度は止められないかもしれない……………」

エースの眉がピクリと動く。突き放すような言い方だが、どうやら好きで戦っているわけではなさそうだ。なのはは一度息落ち着けると、少女に向かって再び声を上げた。

「名前！ 貴女の名前は……………!？」

「 フェイト。フェイト・テストロツサ」

視線を一度も向けずに静かに告げた少女、フェイトが歩いていく。その後ろをスキップするような軽い足取りで、先ほどの女性が続いた。なのはは何かを言おうとしているが、うまく言葉に出来ずにいる。だが、そんな彼女の後ろから歩み寄ってくる者がいた。

「ああ、行つちまう前に一ついいか？」

この戦いの傍観者、エースである。去っていくフェイトへと、エースは戦いが終わって初めてとなる声を掛けた。その声に遮られる

ように、彼女は進めていた歩みを止める。

先ほどと同じく振り返ることは無く、ただ抑揚のない声を発した。

「何？」

「最後の一击………なのはを傷つけないでくれてありがとよ。今日はこれで終わりだが、きつとこの先でも何かある。まだ終わらねエ………そんな気がする。だから……？またな？フエイトの嬢ちゃん」

エースはそう言って背中越しの彼女に笑いかけた。その言葉にフエイトの肩が僅かに揺れる。だが少し動きを止めたあと、彼女は長いマントを翻して飛び去っていった。

その姿が瞬く間に夜の闇の中へ紛れ、見えなくなる。エースは彼女が去っていった方向を見ながら、ふうと息を吐いた。

「負けちゃった………ごめんね、エースくん」

彼女が去ったあと、なのはが申し訳なさそうな顔をしながら近づいてくる。普段のおちゃらけ具合を排したエースが、目を細めながら聞き返した。

「何で謝るんだよ」

「だって………私が出しゃばらないで、あのままエースくん任せでおけば、勝てたかもしれないから………」

「じゃあ、お前は後悔してるのか？」

「……………うっん」

少し考えた後、なのはがはっきりとした意志を表して告げる。その表情に悔しさはあれど、僅かたりとも鬨りはない。エースはそれを表情から見て取ると、人懐っこくニカツと笑った。

「だったら別に問題はねエじゃねエか。話し合いたいってのがお前の？信念？だったんだろ？それに、あの嬢ちゃんと正面きって向かい合うために一人で戦ってたのは結構カツコよかったぜ。心意気もちゃんと伝わってきたしな。次は勝つ。今はそれでいい」

エースがなのはの言葉に肯定の意を告げる。同意するように、それまで黙っていた彼女らの相棒がピカピカと光を放った。

『No problem , my master』

『マスターとレイジングハートの仰るとおりです。落ち込むことはありません。勝敗は戦う者にとって常に付きまとうもの、結果は必ず出ます。それに勝った試合より、負けた試合の方が得るものも多いというではありませんか。自信を持ってください、なのは』

「エースくん、レイジングハート、エール……………にやはは、ありがとうね……………」

なのはは少し吹っ切れたように笑いながら、視線をエースと同じくした。森の入り口の方からは今まで女性を引きつけていてくれたユーノが駆けてくる。敗北が残したものは僅かな悔しさと痛み、そして？次？をより強く願うようになった自分の心であった。

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
E  
D  
.  
.  
.

## 第八話 二度目の邂逅 ～ 真夜中の決闘（後書き）

第八話でした。

小説とはまったく関係ないですが、就職っていうのは大変なんですねえ……。今更ながらしみじみと感じている作者であります。

これから社会人になるにあたって弱音ばかり出てしまいますが、これから先は自分がしっかりしなければなりません。

今までは誰かがやってくれていたことでも、これからは自分でしなければならいんですから。大変だからなんて理由で投げ出すことが出来た頃が、どれだけ楽だったかということを感じひしひしと感じます。

さて、この小説に関して質問を受けましたのでここに述べますが、現在の予定ではStrikerS編まではやるつもりでいます。エースの実年齢がその辺りなので、そこまでやらなければ何のために彼を引っ張ってきたかわかりませんから。

ただ他の作者様たちとは違い、わたくしコエンマは文才が無い上に普通の方の三倍時間が掛かるという厄介者ですので、これから先のことを考えても更新は飛び飛びになってしまうかと思えます。

ですがなんとしても完結だけはさせたいと思っていますので、応援よろしくお願い致します。

補足的に今回初出となるオリジナル技の説明をば。

<炎幕えんまく>

炎を薄く延ばして放出する技。炎で出来た巨大な布のような覆いで相手の視界を奪う性質と、炎にはないネットのような拘束能力を併せ持ち、相手を捉えたり視界を封じて不意打ちをしたりと、この技単体よりもそこから派生する戦術効果を高める補助的な技である。実質的な攻撃力は低いものの、あらゆる局面において応用を利かすことができる。また込められた力は少ないが、仮にも炎であるため何の防御能力も持たない人間では大火傷をするほどの威力を持つ。

それではまた次回でお会いできることを。

ツァイツェン  
再見！

第九話 葛藤と友情 〱 託すものと託されるもの（前書き）

パ、パソコンが壊れました……長年連れ添ってきたというのにいきなり逝ってしまうなんて……えらいこっちゃであります。今は友達に貸してもらいこの文章を書いています。彼ももうすぐ就職の都合で引越してしまうのでどうすればいいのやら……詳細は活動報告の方をご覧ください。

なのでこれより先、ストックとして残っていたものを放出していく作業になるかと思えますので、前書き等無い事があるやもしれませんが、ご了承のほどをお願い致します。

それでは第九話です。どうぞ！

第九話 葛藤と友情 〱 託すものと託されるもの

『おれ達、もう仲間だろ?』

麦わら海賊団船長? 麦わら? モンキー・D・ルフィ

- Side Arisa and Suzuka -

「なのはちゃん、話してくれなかったね」

すずかの重い声が、車内に響いた。左端と右端、中央を空けるようにしてリムジンの後部座席に私たちは座っていた。本来そこにいるはずの人がいないのは、何だか寂しい気持ちにさせた。

会話はない。すずかは少し俯き気味に正面を向き、アリサは窓枠に頬杖をつきながらずっと外を眺めている。アリサは溜息を吐きながらようやくの返答をした。

「そつね……………」

答える声に覇気はない。意識はあるが、その声は完全に上の空を飛んでいた。流れていく景色が徐徐にあかね色を帯びてゆく。

自分の頬を支えていた掌に、不意に力が籠った。

(……………最低。自分で勝手にイライラして、なのはにきつく当たっ  
ちやうなんて……………あの子だって悩んでるかもしれないのに)

先ほどの事を思い出しながら、アリサは心の中で嘆息する。

なのはの様子がおかしいのは、自分も何となくではあるが感じ取  
っていた。思えば、二週間ほど前からだっただろうか、あの頃から  
彼女の中で何かが変わったのだと思う。はじめはただ気のせいか、  
そうでなければ日が悪いのだろうだとアリサは思っていた。

だが次第に疲れた顔や溜息を吐くのを見るのが多くなり、笑顔も  
少なくなっただよように感じる。最近では憂いすらも帯びた表情を時折  
浮かべているのにも気付いていた。

二人は彼女の事が心配だった。だからこそ気遣い、色々と世話を  
焼いたりしていたのだ。少しでも気が紛れるようにと、積極的に遊  
びに誘ったりもした。

だが、当のなのははなんでもないと言うばかりで一向に話す素振  
りを見せない。そして今日、なのはの態度にアリサの我慢が限界を  
超えてしまったのだ。夕焼けに染まる街並みを見ながら思う。

(あたし……………あの子の友達をちゃんとやれてるのかな……………?)

ネガティブ思考に陥ってしまうのは悪い癖だ。予め悪い予測を立  
てておくことで判断を素早くするという形なら、一つの想定として  
いい面もある。が、私の場合は少々重く捉え過ぎるきらいがあるよ

うなのだ。

しかも、それでいて臆病。実際にはそうなることを恐れるあまり強がったり予防線を張ったり、詰まるところ失敗ばかりする始末だ。昔はもつとひどくて、クラスの中でも浮いていた。

そんな自分を救ってくれたのが、あの子だった。それなのに……  
…今度は自分の番だというのに………！

心を強く締め付けられ、あたしはずかから顔を背けた。こんな顔を見られたくない。再び、黄昏に染まってゆく街並みが目に映る。

そのなかに見つけた。キツイ逆光に染まった道。そこで佇んでいた『彼』の姿を。

「っ！ 鮫島、止めて！」

目に映ったものを認識した瞬間、アリサは声を上げていた。急に声を上げたのにもかかわらず、鮫島は迅速かつしっかりと安全に車を停車してくれた。相変わらず出来すぎた従者だ。

車が停止したことの確認もそこそこに、アリサは動き出した。優雅さを気にかける暇もなく乱暴に扉を開け、車から飛び出す。そのまま道端を歩く背中の一つに向かって駆けた。

「エース！」

焦っていたせいかもしれない。殊更大きく響いたドアの開閉音と自分の声に、周りの人々が何事かと見つめてくる。だがそれは、その先にいた人物にすっかり届いているということでもあった。

「 うん？ おお、アリサにすずかじゃねエか。二人ともこの前の温泉ぶりだな。今帰りか？」

道路沿いの歩道を歩いていたエースが、こちらの声に反応して振り向き、声を掛けてきた。ちよつと日本語的におかしい内容をのたまう彼の傍らに、なのははいない。どうやら一人で出歩いていたようだ。

車を出て、彼の前へと二人で並んで立つ。その手首には見慣れないコンパスが見えたが、今は置いておこうと視線を外した。

「何してるの？ どこかに行く途中？」

後から出てきたすずかが、小首を傾げながらエースに尋ねる。偶然ではあるが、翠屋から離れている場所で彼に会ったことに興味が湧いたらしい。それはアリサも同じだったが。

質問された本人はギクツと身を強張らせた。そして少しバツの悪そうな顔をした後、視線を逸らす。

「あ〜、まアなんつーか。つまりあれだ……そう、散歩だ、散歩。おれはこの街に来てからの日が浅いからな、ちつと探検がてら外出してたんだよ」

目を泳がせていたエースが、周りを見ながらジェスチャーを交えて話し出した。彼の話にすずかはふんふんと頷いている。が、アリサは腕を組みながら、そんなエースをじっと眺めていた。

（あからさまに誤魔化したわね。アンタが散歩とかイメージに合わ

なすぎるし、あんだけキヨどつた後にそれじゃ嘘にもなっていないわよ。すずかは気付いてないけど………というかコイツ、普段学校はどうしてんのかしら？ 自称旅人だからって、まだ私たちと同じぐらいでしょ？)

内心いろいろツツコミを入れたい衝動を抑えつつ、アリサは密かに息を吐く。そして、すずかから此方へと視線を移したエースを見据えた。

「そう、ならちよっどいいわね。アンタに話があるの。立ち話もなんだから、あつちでしましょ」

指し示す方向には、小さな公園があつた。遊具はブランコと鉄棒、それに砂場ぐらいしかない。その周りに花が散つて葉桜となつた桜の木が何本か植えてあるだけの、本当に簡素な公園だ。

エースが頷いて先導するように公園に入り、二人もそれに続く。すぐ行き止まつた彼が、此方へと振り向いた。鉄棒に寄りかかる様にして背中をつけ、視線が此方を捉える。

それを待っていたかのように、アリサは話を始めた。なのはが最近おかしいこと、何かを隠しているようであること、そのことで悩んでいるようであることなど、親友の様子を事細かに説明した。出来得るのなら、それを解決してやりたい旨も添える。

話が終わる。黙って二人の話を聞いていたエースが人懐っこい笑顔で顔を浮かべた。

「ははっ。お前らって、ホントにいいヤツらだよな」

開口一番の賞賛と笑声。自分のことでもないのに、彼はとても嬉しそうで優しい表情をしている。アリサが、むっとして腕を組んだ。「茶化さないで。けっこう真面目に話をしてるのよ、こっちは」

「ああ、わかってる。悪かった」

一息を吐いて笑顔を仕舞いこみ、エースは再び二人へと向かい合った。見ながら、アリサは「それならいいけど」と一言付け加える。エースは目を閉じると、腕を組んでさらに鉄棒の方へ体重をかけて体勢を傾かせた。

僅かに見えた違和感に気付く二人。すぐさまアリサが反応した。

「驚かない上に何も聞かないのね。それに何だか訳知り顔みたいに見えるわ。もしかしたらとは思ってたけど、最近のなのはが少し変だっただけについての理由、アンタは知ってるんじゃないの？」

エースの表情を見ていた彼女は不意に眉を寄せ、口元を少し下向きに曲げた。勝気な目には、答えを求める意志が隠しもせずきらめいている。エースはふうと息を吐いた。

それだけでアリサとすずかは悟ったようだ。流石、なのはの友達をやっているだけあって勘がいい。閉じていたうち片方だけ開くと、エースは二人を見据えた。

「……………で？ おれにどうしろってんだ？」

「教えなさい、今すぐに。あの子が一体何に悩んでるのか、どうし

てあんな顔をするのか。私たちには知る権利があるわ」

アリサの口から突かれる言葉が強めになる。エースが事実を知っているという推測に確信が宿り、気持ち先行してしまっているようだ。感情のコントロールが上手く利いていないのだろう。

だが、それはすずかも同じであった。黙ったままこちらに一歩近づき、アリサ以上に強く説明を求める眼差しを送ってくる。エースは二人分の視線を受け止めながら、頭をガジガジと搔いた。

「そうだな……その権利は確かにあるだろうが……その前に……問いを返すみてエで悪イが、おれからも一つ聞かせてくれ」

少しだけ躊躇うような言葉に二人は首を傾げる。だが再び完全に目を閉じたまま、エースは何かを考えるように身動き一つしない。だが、しばらくの間を置いてすつと開かれた目を向けられた瞬間、二人の身体にはまるで射抜かれたような震えが走っていた。

思わず息を呑む。自分たちを見据えるその目は、普段見慣れている彼のものではなかった。何故か、大の大人に見下ろされているような、ある種の威圧すら伴う視線。

空気が変わっていた。圧迫されているような感覚に、二人は動悸が激しくなっていく胸をきゅっと抑える。その中、ゆっくりと開かれた口から紡がれた声は、

「それを知って　　どうする気だ？」

今までに聞き覚えのないもの。まるで二人の中に冷風を吹き込ませるような、鋭く重い響きを含んでいた。

「それを知って　　どうする気だ？」

後から考えれば驚くほど冷たい声色だったかもしれない。纏う空気もすこし剣呑さを帯びていたように思う。少なくとも、十にも満たない少女に向けるべきではなかったのは後で考えて少し反省した。

(……………友達、か)

エースは彼女らと出会う二時間ほど前を思い出していた。いつものように翠屋の手伝いをした後リビングのソファでまったりしていると、なのはが家に帰ってきた。少し気落ちした様子で。

いつもと違う雰囲気のエースがそのわけを聞くと、アリサとケンカ、そこまでいかないが少しのすれ違いのようなものをしたのだという。エースだけでなく、ユーノも辛そうな顔をしていたのを覚えている。

だが、心配する二人になのはは、

『隠すって、結構苦しいんだね』

と、力なく笑いながら愚痴を零すのみだった。そして、自分の気持ちを誤魔化すように、ジュエルシード探しに無理矢理奮起させる

彼女をエース達はただ見ているしかできなかった。

その後各人の心配を受け流したなのは、エースとデバイスのエール、自分とユーノのグループに別れることを提案し、今日はそれに従って別行動を取ることに決まった。もしもの時のなのはフォーローは、ユーノに一任してある。そして、単独となったエースが探索がてらそこらをぶらぶらしていた際、彼女ら二人に声を掛けられたというわけだ。

話を戻そう。アリサの言葉を問い返した時のエースからいつもの雰囲気は消えており、発される言葉ひとつとっても、何か強い力が内包されているようにすら感じていた。アリサとすずかは彼の態度に戸惑い、各々の体を強張らせる。エースはペースを崩すことなく、淡々とした口調で続けた。

「もしなのはがお前らに何かを隠してたとして。そのことに関して悩んでいるとして……それを知って、お前ら一体どうすんだ？ 話さない親友を差し置いて、何でおれに尋ねる？」

「それは………」

すずかが言葉に詰まる。アリサも同様であった。

確かにエースの言うことは尤もだ。なのはが何をしているのかわからず心配、何を隠しているのか二人は気になる。

だが、その気持ち先走って考えが及んでいなかった。仮にそれを知って、果たして自分達はどうしたいのだろう。そもそも肝心なのは話さないからといってエースに聞くというのは、暗黙のルールのどのようなのか。

「お前らはバカじゃねエからな、それが筋違いだつて理解できてるはずだ。おれから聞いたところで何が解決するわけでもねエ。なら何で待つてやらない、何でなのは信じてやらねエんだ」

「っ、信じてないわけじゃない！ あの子のことは信用してるわ！ でも……でも歯痒いのよ！ 私たちじゃ何にもしてあげられないかもしれないけど……迷惑でしかないかもしれないけど、あの子を放つて置けないの！ ずっと一緒にいたんだから！」

「だから聞いて一緒に悩むつてか？ 話さないつて事は、何かしらの理由があるもんだ。それを推しても知りたいと言つたが、それはお前らのことまでアイツに背負わせるつて意味だぞ？」

アリサの精一杯の気持ちをエースの辛辣な言葉が阻む。彼の言うことは正論だろう。今の彼女は上の空、いっばいっばいな状態だというのはすぐ見て取れた。

アリサ達からすれば、秘密を共有すれば少しでも気持ちが安らぐかもしれないと思つての言葉だった。しかし、逆効果になつてしまふ可能性もないわけではない。そうなつた場合、今でさえあの状態のなのはがさらなる重石に耐えられるのだろうか。

エースの言葉となのはの気持ちを頭の中で整理する。若干トーンが落ちた声を伴い、アリサは再び口を開いた。

「……………つまり、話す気はないつて解釈していいのね？」

確認の言葉。二人が拒絶の意を感じ取つたゆえだ。真摯に見つめてくる瞳から目を逸らさず、エースは黙つて頬を掻いた。

「……………まア、そう受け取ってもらってかまわねエ。おれは元よりそのつもりだし、そもそもアイツがそれを望んでねエんだからな。少なくともなのは中でケリがつくまでは、おれから話せる事は何もない」

「ケリつて……………それは、危ない事……………なの……………?」

横からずかが心配そうに問いかけてくる。エースはすこし苦い顔をした。いつでも死と隣り合わせというわけではないにせよ、小學校中学年の彼女達からすれば、十分危険な部類に入るのだから。

「危険がない、とは言えねエ。そういう事態にならないなんて、断言はできねエ……………けど」

心苦しそうな表情は一瞬。次に見えた彼の顔は、見たこともないほどに強い意志を垣間見せるものだった。

「なのはが悩んで決めたものなら、おれはそれを尊重したい。だから、降りかかるもんはおれが近くにいる限り全部振り払ってやる。何が起ころうと、アイツだけは絶対に傷つけさせねエ。どんなことがあってもおれが絶対に守りきる……………約束する」

二人から目を逸らさず、エースは真剣な表情で宣言した。さあつと、少し冷たくなった風が三人の間を通り抜けていく。夕陽が三人の顔を照らして僅かな寂寥感を滲ませるなか、ずすが彼の視線を受け止めて呟いた。

「それがエースくんのか？覚悟？、なんだね……………?」

「ああ」

その答えに迷いはない。守るといふその言葉には、子供のものはとても思えない重みと固い決意が顕れていた。本当なのかと疑う事さえ憚らせるほどの、秘められた強い意志と共に。

その意を汲み取ったさすがが、ふうと息を吐きながら顔を穏やかなものへと崩した。

「じゃあ、私は信じる。エースくんが言った事とかも全部ひっくりめて、信じて待つことにするよ。それまで、なのはちゃんをよろしくお願いします」

言葉の終わりに彼女は深くお辞儀する。大切な親友を頼む、という彼女の？決意？を示す儀式だ。エースはこれほどまでに愛されているのはを微笑ましく思いながら、「任せろ」という意志を瞳に宿して頷いた。そして、その横ににいるもう一人、アリサに目をやる。

さすがとは対照的に、アリサの表情はどこか迷っていた。悔しさを隠そうとして隠せない子供のように、口を硬く引き結んでいる。自分がなのはの力になれないことが、歯痒くて仕方ないに違いない。

（はは、サボの時のおれみてエだな………けど、お前みてエなヤツが待っててくれるから、なのははいつも頑張れんだぜ？）

アリサの内心にかつての自分に近いものを感じる。かつての自分も通った道ゆえ、感慨深いものがあるのかもしれない。エースは穏やかな顔で笑った。

「アリサ。悩んでる友達を気遣ってやるのは、確かに大切なことだ。決して間違いななかじゃねエだろう。だが、？乗り越えようとしてる？奴に手を貸したら何にもならねエし、邪魔しちやいけねエ。友達だからこそ、ハラ括らなきやなんねエ時もあんのさ。それが友達なの？願いの？……そして？信念？を通すために必要ならな」

自分はその時不安だった。なら、進言してみるのもいいだろう。彼女にはお節介になってしまってもよけれないが、同じ立場の時自分は嬉しかったのだ。だから少しでも気持ちが悪くなればいいと、そう思った。

迷った時や挫けそうになった時、友達の言葉がエースを導く光となったように。口元に少し挑発的な笑みを浮かべ、エースは続ける。

「それとも、やっぱりおれの言葉は信用できねエか？ なのはのことも……自分から話すのを待ってやれねエほど、アイツは信じてやれねエか？」

「っ、バカにしないでよね！ 伊達である子の親友やってるわけじゃないのよ、疑うなんてあり得ないわ！ なのはが自分から話すまで、あたしはいくらでも待つ！ その代わり、事情を話してくれる時が来たら、なのはからもアンタからも、納得がいくまで一切合財喋ってもらうんだから！」

少しキレ気味になりながらアリサが宣言した。素直じゃないところも何とも彼女らしい。エースは彼女にますます自分と同じ部分を見つけ、嬉しくなった。

「親友か……へへ、やっと聞けたぜ、その言葉が……なんだ、ちゃんと分かっているんじゃないか」

「あ……………」

アリサはハツとしてエースを見た。みるみるうちに顔を赤くする。自分が試されていたことに気付いたようで、むくっといった風に睨んできていた。リンゴのようになった頬に、目が潤んでいるのが可愛嬌だった。

「いい顔をしてるぜ、アリサ。そんだけ思われてりゃ、なのはもー安心だな。今の気持ち、忘れねエように大事に仕舞っとけよ？」

「…………… フンだ。アンタに言われるまでもないわよ……………」

少し拗ねたようにそっぽを向いてしまった。視線を完全に外したアリサにエースが苦笑する。だが、彼の目から逃れるようにして、アリサの口元が微かに動いていた。

すずかは見逃さない。意地っ張りだなあと思いつつも、彼女は黙ったまま自分の目に焼き付けていた。言葉の終わり、ありがと、と彼女の口が紡いでいたのを。

「なのはちゃんがそうしたいなら、私たちは見守るだけだよ。いつもと変わらないで接する。学校で、なのはちゃんが少しでも安らげるように。それが私たちの出来ることだから。それに」

すずかも言葉を添えた。その表情は、いつも以上にとても優しいものとなっている。そして最後に言葉を区切ると、悪戯っ子のようなお茶目な笑みを浮かべて口を開いた。

「エースくんがなのはちゃんを大事にしてる気持ちも、しつかり伝わってきたから。？話さない？んじゃなくて、？話せない？んだよね？なのはちゃんのことを思ってるから、エースくんから伝えられないって言いたかったんでしょ？」

「……………ここで出来た初めての友達だからな。年上なら、妹分の気持ちくらい汲んでやるもんだろ」

少しだけ驚いたような表情をしたあとに、苦笑するエース。まいたたな、という風に頭を掻き、渋々といった感じの彼を二人はクスクス笑った。

そのままエースも交えて一頻りひとしき笑い合う。温かさを感じさせる笑顔が咲いたあと、エースは二人を見据えた。

「一つ、アドバイスだ。何の力もなくなってる、やれることはある。傍にいてやるだけ、掛けてやる言葉一つでも、救われる物はあるってことを覚えとけ。何もできないなんてことはねえんだ、その気持ちはずどこかでなのはの力になる」

言いながら背を向ける。もう大丈夫だと分かったからだろう、その後姿に憂いはない。頼もしく、どこか大きく見えるいつもの彼だ。いつの間にか、太陽はビルの谷間に沈みそうになっていた。もうすぐ日が暮れる。すずかとアリサは塾の時間が迫っていたが、彼から目を離せずにいた。

エースが逆光で少し暗くなった背を向けたまま、ニツと笑う。此方を向いていないから、表情などは勿論見えない。だが、二人は確かにエースが笑っていることを感じていた。

「お前らにできねエことはおれがやる。おれにできねエことをお前らがやればいいんだ。？表？のアイツを………しっかり支えてやるってことをな。それが出来るのは、この世界でお前らだけだ。頼んだぜ、親友さんよ」

その言葉を終わりにして、エースは走り出した。彼の足がコンクリートを蹴る音が響いてくる。その音を刻むごとに夕陽がその光を失い、公園に夜の帳が降りていった。

彼が此方を振り返る事はない。アリサとすずかは彼に託したものと彼に託されたものを強く思い描きながら、ただ前を見つめる。その姿が見えなくなるまで、二人が視線を揺るがす事はなかった。

「へっ。やっぱりお前の友達はいいヤツだぜ、なのは……………」

走りながら独り言を呟く。正直なところ、なのはの話聞いて心配になっていたエースは安堵していた。彼女は大丈夫だと言い張っていたが、あれはガキの強がりだ。彼女の思いつめる性格も考慮すれば、そう長くは持たないだろう。

だからこそ、こうして懸念材料が減ったのは喜ばしい限りであった。確固たるものがあれば、揺らぐ事はない。仮に揺れることがあっても崩れる事はない。

友達と呼べるものが傍にいてくれることが、そんな絆を持つ彼女

が自分と重なった。さりとして、？絆？の強さなら負ける気は毛頭ないが。

『マスター、都市部にて五つの魔力反応を感知。一つは桁外れの力を放っています。おそらくジュエルシード、他の四つは例の彼女達となのは達かと』

走っていたエースに、エールが声を飛ばしてきた。どうやら自分の勘が告げていた通り、今日もまた始まるようだ。アリサ達と話も出来たし、今日は本当に間がいい。

エースは相棒の報告を聞きながら、正面のビル群を見据えた。

「おっ、やつとか！ ったく、また先を越されちゃった。けどいいタイミングだぜ、こちらら暇でしょうがなかったからな！」

そして言葉とともに加速する。その視線は、異様な雰囲気を感じ始めた摩天楼へと向けられていた。

T O B E C O N T I N U E D . . .

第九話 葛藤と友情 〱 託すものと託されるもの（後書き）

目標、<sup>パソコン</sup>完全に沈黙しました。うおお、立て、立ち上がるんだパソコン！ アンビリカルケーブル（コンセント）はまだ繋がっているのに！

いきなりこんな不運に見舞われるとは……二月中ならば両親にパソコンぐらいなら頼むことが出来ていたのですが、如何せん今は引越して矢先だったので、いきなりお金のことを頼むというわけにもいかず、パソコンを買うための資金繰りに苦労しています。

買うとしたら高性能なのがいいですし・・・先になりそうだなあ・・・

これから先の更新で前書きとかが無い場合は、まだパソコンを買っていないか誰かに頼み込んで更新だけさせてもらっているところだと思って下さい。本当を言うと、当分の間はUSBメモリに残っていたものを放出するだけしかできないので、さらに更新が不定期になります。

ですが、なんとしても続きを書いていきたいのでよろしくお願い致します。

それでは、<sup>ツァイツェン</sup>再見！

第十話 激突する想い（前編） 〳 掲げる覚悟と海賊の信念（前書き）

会社のパソコンで密かにやっているので前書きと後書きを端折ります。まったく、昼休みぐらいパソコンを開放してくれよなって思いますよ。

新しいパソコンを買うまではたぶんこうなるかと。なので、勝手ながらご了承のほどをお願い致します。

第十話 激突する想い（前編） 掲げる覚悟と海賊の信念

『引けないね。ここだけは！！』

麦わら海賊団船長 “麦わら” モンキー・D・ルフィ

- Side Nanoha Takamachi -

魔力の波が、街を覆うようにして展開されていく。この感じ、たぶんユーノクんの結界魔法だ。街中であるからか、かなり大きく空間を切り取ったらしい。

（なのは、発動したジュエルシードが見える？）

（うん、すぐ近くだよ）

灰色になった街並みとそれを覆い尽くすような黒色の空に一筋、上空へ真っ直ぐ伸びる青白い光が見えた。幾度となく目にしてきたジュエルシードの魔力光だ。それが、私から少し離れた場所で立ち昇っていた。

（あの子達が近くにいるんだ、あの子達より先に封印して！）

(わかった！)

ユーノくんの切羽詰った声に、私は強く頷いて応える。同時にレイジングハートをシーリングフォームへと変形させる。そして対象を捕らえるべく、桃色の光が一直線に飛んだ。

だが、それは相手も同じ。高いビルの上からお馴染みの金色の魔力光が放たれ、ほぼ同時に目標へと命中した。力場の中間点で衝突した光は、まるで綱引きをするがごとくジュエルシードを捕らえて離さない。それを見た私は、意識を切り替えて次の段階に移行した。

「リリカル、マジカル！」

「ジュエルシード、シリアルXX IX！」

間髪いれず、フェイトちゃんの方も同じ呪文を唱えてくる。こちらの思い通りにはさせてやることは同じだが、目標は一つしかないためにお互いの力が鬨ぎ合う。そして両者とも力を込めながら、強い口調で同時に呪文を締めくくった。

「封 印ッ！！」

各々のデバイスから、遠距離封印魔法が放たれる。魔力光が混ぜこぜになってぶつかり、私はほとんど力任せに魔法が打ち込んでいた。二人分の封印魔法を受けたジュエルシードが力を治め、淡い光へと変わった。

「やった！なのは、早く確保を！」

近寄ってきたユーノくんが急かすように促す。だが、同時に鋭い声が響き渡った。

「そうはさせるかい！」

ユーノくんの言葉を遮るように聞こえたその声は、ジュエルシードが浮遊する真上からだった。ハツとして上空を見やると、フェイトちゃんの使い魔であるアルフさんが狼になり、此方に向かって一直線に飛び込んできていた。いきなりのことに動きがとれず、私は反射的に腕を翳して目を瞑る。

だが、その牙が私に届くことはなかった。

「？炎武？」

……………？焼底？！！」

「何っ……………があっ!？」

打撃音が木霊する。見ると、ぱっと現れた影の一撃が狼形態のアルフさんの横っ腹に炸裂していた。ゆうに二メートルはあるその巨体を吹き飛ばしたことに、私は目を見張る。しかし彼女もかなりのもので、攻撃を受けながらも体勢を立て直し、コンクリートを爪を立てて止まった。

「何とか間に合ったな」

同時に、影が目の前に音を立てて降り立った。特徴的な黒髪が街路灯の光を浴びて露になる。それを見とめた瞬間、私は反射的に叫んでいた。

「エースくん！」

「ぐ……………またアンタかい！」

忌々しげに呻く声を聞いて、私はそちらに目をやる。街頭の光が逆光となり眩しく目を焼くなか、果たしてそこにエースくんはいた。私とアルフさんの間をちょうど阻むようにして佇んでいる。

「奇襲したほうが不意打ち受けるたア、相変わらず詰めが甘いな嬢ちゃん。そう簡単にさせねエのはこっちも同じだ」

ニヤリと笑い、エースくんが構えを取る。相変わらず頼もしいな、ホントに。彼やユーノくんがいるだけで、力が湧いて来る。前を向こうって思える。

だから伝えなくちゃ。私が思ってることを、言葉にして。フェイトちゃんに届くように。目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない。けど、

「こないだは自己紹介できなかったけど……………私、なのは。高町なのは。私立聖祥大付属小学校三年生！」

私の言葉に、フェイトちゃんは無言でデバイスを構えるだけ。慌てて此方も構えながら、私の胸はちくりと痛んだ。語らない彼女に聞きたいこと。今頭に浮かぶただ一つのことを、私は求める。

どうして……………どうして、そんなに寂しい目をしているのかという事を。

「一撃目はサーブスだ。急所外して力も抜いといてやったから立てるはずだぜ。けど次に向かってくるなら……容赦はしねエ」

挑発するように言いながら、エースはニヤリと笑う。その顔は、少しだけ以前の表情に戻っていた。即ち、？海賊？が？敵？と戦う時のそれだ。少年の笑みの中に、鋭い刃のような光が垣間見える。アルフはそれに一瞬気圧されたが、グルルと唸り声を上げて気を張る。そして、動物形態のままエースに向かって吠え掛かった。

「……………上等じゃないか、相手になってやるよ！」

齒軋りしながら睨みつけた彼女、いや、狼が一直線に飛び込んでくる。その突進力はなかなかのものだった。

だが、エースはそれを身体を傾けて回避する。受け止めても問題はないが、それでは勝負が一瞬で決まってしまうので面白くなかった。今の自分の役目はこの相手を倒すことではなく、引き付けておくことだからだ。

（なのは、この嬢ちゃんはおれが何とかする。今のうちにお前は以前のやりたいことをやれ！）

エースは、離れた場所にいるなのはに向かって念話を飛ばした。狼の牙と爪をかわしながら、ついでに視線を一瞬流す。

目が合った。なのはからの声は返ってこない。だが、彼女は一瞬だけ口元を緩め、こちらに向けて笑う。それが答えだった。

(十分だ)

エースの口元に笑みが浮かんだ。素人だと、まだまだ子供だと思っていたが、なかなかどうして骨がある。少し抜けている辺りルフィとそっくりで、エースは笑ってしまった。おっと、ルフィの方は少しじゃなかったっけな。

まあ、ともかく今は自分の役目を果たさなければならぬ。とりあえずは……、

「嬢ちゃんにはもうしばらく、おれの相手でもらうぜ」

「嬢ちゃんって呼ぶな！ その減らず口ごと噛み切つてやる！」

ブオンという音と共に、身体を反らしたエースの脇を巨体が通り過ぎていった。ギリリと光る牙をやり過ぎ、空気を裂くように迫る鍵爪をいなす。

しかしまだまだ年齢相応の、力任せの動きだった。動物系ソオンの能力者が初期に陥りやすい、能力による恩恵にかまけた典型的なパワータイプの戦い方だ。しかも獣人型、人型、獣型と三段階の変身を使いこなす能力者に比べて対処がし易く、たまに放つてくる魔力弾以外は特殊な能力もないため、軌道や戦法も格段に読みやすい。

詰まるところ、エースの敵ではなかった。

【フェイトちゃんー！】

「ん？」

唐突に上空から声が響いた。エースとアルフが、それに反応して距離を取る。上を見上げると、お互いにデバイスを構えたまま、なのはとフェイトが相對していた。

【話し合っただけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって言ったけど………だけど話さないと、言葉にしないと伝わらないものもきつとあるよー！】

フェイトに向かつてなのはが叫ぶ。強い意志を宿す瞳が、まっすぐにフェイトを捉えていた。言葉を選ぶように時に間を挟みながら、自分の本心を彼女へとぶつけていく。

【ぶつかり合ったり、競い合うことになるのは、それは仕方ないのかもしれないけど………だけど、何もわからないままぶつかり合うのは、私、嫌だ！】

叩きつけられるような言葉に、フェイトの肩が震えた。なのはは自分の目的や動機、そして現在自分を支える気持ちをただまっすぐに紡いでいった。

【最初はユーノくんのお手伝いだった。けど、今は違う。ユーノくんといういろいろしてきて、エースくんに出会って、私はジュエルシードを集めるって自分で決めただんだ！ この街や住んでる人達を、危ない目に遭わせたくないから！ これが、私の理由！】

言葉を切り、なのははフェイトを強い視線で見つめた。それと呼吸するように彼女の瞳が揺れる。凝り固まっていた心に迷いが生まれているのだろう。

だがそれを遮るように、エースの横合いから怒声が響いた。

「あの子、また性懲りもなく………！ フェイト、答えなくていい！ 優しくしてくれる人たちのトコで、ぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンちよになんか、何も教えなくていい！ あたしたちの優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

驚いて、エースは視線を戻す。声の主はアルフだった。おそらく今の問答に不都合を感じ取ったのだろう、あからさまな敵意がなのはへと向けられる。

なのはが目を見開いてショックを受ける中、彼女は構わず否定の声を上げ続けていた。

「弱い癖に………何も考えてないようなガキが、口先だけでえらそうに言うな！ アンタなんかフェイト何がわか………があっ!？」

だが、言葉は唐突に途切れた。鈍い衝撃が空气中を走り、ほぼ同時に耳に轟音が響き渡る。驚いたフェイト達が視線を向けると、つい一瞬前まで口を開いていたアルフの体が、壁をズルズルと滑って地面に横たわったところだった。

エースが正眼に拳を戻す。そして、構えを解きつつ口を開いた。

「それはこっちの台詞だ。せつかくアイツらの舞台が出来てんだ、外野から野次を飛ばすのはいただけねエな。次に横槍入れたら本気

で潰すぞ」

強い怒気を孕んだ声が静かに響いた。台詞は紛れもなく、倒れ伏す彼女に向けられている。近くにいたユーノは、エースから放たれる殺気に毛並みを震わせて一歩後ずさった。

見ると、アルフがぶち当たったと思われるコンクリートの壁に、クレーターばりの窪みが出現している。中心部は見事に砕けており、粉々というに相応しいほどの破壊具合だった。いったいどれほどの速度で穿たれたというのだろうか。

「狼の嬢ちゃん。アンタはなのはをただの甘ったれつつたけどな、アンタがそれを言うのはちっと違うんじゃないか？　そもそも、おれもなのはも神や仏じゃねえんだ、何も話さねえで分かってくれなんて無理に決まってるだろうが」

「何、を………！」

その声に、アルフが体を無理矢理起こして、目の前のエースのを見た。何か言い返したいのだろうが、ぶつかったダメージが予想外に大きかったためか、聞こえるのは口から洩れる呻き声だけ。膝も明確に見て取れるぐらいに笑っていた。

しかしそれでも立ち上がろうとするのは、彼女のなかの何かがそうさせるのだろう。そんな相手を見下ろしながら、エースはしっかりとした声で言葉を紡ぎ始める。

「まだなのははこの世界に足を踏み入れて日が浅い。今まで平和の中で暮らしてきたんだ、確かに甘ったれな部分もあるだろうよ。けど、今？　この場にすべてを懸けて、気持ちも力も自分の精一杯で

お前らに挑んで。何度も正面きつてぶつかって負け続けて、それでも砕けねエのは紛れもない？強さ？だと俺は思うぜ？」

なのはがはつとしたようにこちらを見た。それに僅かな微笑を返しつつ、エースは続きを口にしていく。

「お前らの目的は知らねエ、何考えてるのかもわからねエ。けど人間なら、大なり小なり何かしら背負ってるだろ。その重さは本人にしかわからねエから、赤の他人が簡単に断じていいことじゃねエ。一人の？覚悟？も受け止めようとしねエ奴が、したり顔で言い腐つていい事じゃねエ！」

聞こえる声は紛れもなく幼い子供のもの。口くちにしているのも齡よわい十ほどの姿をした少年。だが、その中に内包された思いの強さは、ずっと戦い続けてきた者だけが持つ老練さを含み、彼の姿を何倍にも大きく見せていた。

「戦う者に必要なのは？覚悟？と？信念？だ。相手を退けて我を押し通したいのなら、自分の？信念？ぐらい堂々と掲げて見せる。おれはなのはが諦めない限り支える。恩人として、友達として………何があってもなのはだけは守るって、アイツらと約束したんだ」

鋭く飛んだ視線に射抜かれる。アルフはエースから目を逸らせなかった。彼の瞳が見たこともないほど澄んだ、途方もなく強い思いを感じさせるものだったから。

「一度掲げた？信念？は絶対に曲げねエ！ 退けたいのなら、それごと打ち砕いてみせる！」

おれの名はポートガス・D・エース 海賊だ！」

上空にたゆたう二人に目をやり、エースは叫んだ。遠く離れているはずだが、まるで近くから声が聞こえているようにその声は二人の耳に届いていた。

「海……………賊……………？」

なのはが呆然として、エースを見下ろしている。ユーノも目を見開いていたが、どこか合点がいったような表情でもあった。

フェイトはなのはと同じようなものだったが、はっと気を取り戻すと、ジュエルシードへと急速接近していった。なのはが呆けていたのをチャンスと取っただけらしい。

「あつ!? くっ!」

僅かに遅れて、なのはも慌てて急降下する。風が頬を強く打つか、かまわず最高速度で突っ走る。そして、二人は宙に漂うジュエルシードに向かって同時にデバイスをぶつけた。その瞬間、

ドクン。

音が消え、光が弾けた。

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D  
·  
·  
·

第十一話 激突する想い（後編） 〳 起動する覚悟（前書き）

大っっっ変、お久しぶりであります。コエンマです。

えー、諸事情によつて小説が書けなくなってしまいましたので、これからはストックのみの放出となります。

待たせすぎの上に勝手すぎるだろ！と仰った皆様、本当にすいません……でも、私としてもどうしようもないこと……ご勘弁のほどをお願い致します。

それでは本当に久しぶりの更新、行きますっ！

第十一話 激突する想い（後編） 〵 起動する覚悟

『少なくともあの小僧に、ためらいはない。生きるための装備が……死を恐れぬ？信念？か……』

海上レストラン『バラティエ』 料理長<sup>オーナー</sup>？赫足？ゼフ

何か、異様な力の流れを二人は全身に受けていた。言いようのない寒気が背筋を走っていく。そして、それは強烈な光を伴った爆発へと変貌した。

「きゃ、あああああつ！？」

「くうつ……！？」

迸った青白い閃光が天を貫き、穿たれた雲を跡形もなく消し飛ばす。なのはとフェイトの二人は、衝撃で強く揺さぶられ、大きく後退した。

「っ……大丈夫、バルディッシュ……！？」

『No……, prob…le…m……sir……』

目を落としたデバイスにフェイトの顔が強張る。彼女のバルディ

ツシユには、杖先から柄に至るまで無数のヒビが走っていた。いつもは輝いているデバイスコアも、今は弱々しい光を明滅させるのみである。

「……………ッ…戻って、バルディツシユ……………」

『Y…Ye…s , s i …r ……』

フェイトは辛そうな表情をしたあと、バルディツシユを待機形態へと戻した。そして、目の前に漂うジュエルシードに向かって飛ぶ。しかしその瞬間、彼女の視界がブレた。

「うあっ!?!」

閃光。再びジュエルシードから放たれた光が、フェイトを容易く薙ぎ払った。払い除けられるように、彼女の身体は為す術なく吹き飛ばされる。だが、打ち付けられると思った背中は、がっしりとした感触に受け止められていた。

「無茶しすぎだフェイトの嬢ちゃん! 下がってるッ!」

エースが耳元で怒鳴り声を上げた。吹き飛ばされてきたフェイトを受け止め、噴出する風から庇うように後ろに横たえる。

「フェイト! 大丈夫かい!?!」

アルフが血相を変えて彼女の傍に走り寄ってきた。それを横目で確認し、エースは真っ直ぐに走り出す。目の前の光を睨みつけながら、全速で地を蹴り、ただ疾駆した。

「？炎戒？<sup>エンカイ</sup>

……………」

交差するように構えた腕に力が込められる。熱がその手を赤く染めると、急速にその輪郭が揺れ、エースの両手は炎に包まれて見えなくなった。啞然とするフェイト達はこの際無視しておく。

正面を見据えたまま、エースは地を蹴ってジュエルシールドへと飛び掛った。距離は約五メートルほどだ。エースはそのまま両腕で円を描くようにして、思い切り振り抜いた。

「？炎獄？<sup>エンごく</sup>！！」

瞬間、圧縮された炎が空間を巻き込むようにして撃ち放たれた。炎は渦のような流れを巻きながら、ジュエルシールドを包み込む。猛り狂う紅の煌きは、一瞬にして青き輝きを閉じ込めた。

「ッ……………オイオイ、なんて力だよ……………！！」

だが、エースの表情は冴えない。それを裏付けるように紅蓮に彩られたの膜の間から、青白い閃光が迸る。それを押さえつけている彼の額には汗が浮かび、口からは苦悶の声が零れ落ちていた。

「けど、今更引けねエんだよ……………となりや、残る方法は……………やっぱ一つしかねエか！」

かなりの力を込めたにも関わらず、炎の束縛は既に軋みを上げていた。青い光はよりその強さを持ち、外側へと噴出しようとする。もはやその拘束が長く持たないことを感じたエースは、地を蹴って前方に飛び出した。

強烈な光と爆風に遮られながらも、火球体の前に到達する。そしてエースはその中心で輝いていたジュエルシードを見やり、僅かな躊躇いもなく自らの手の中に握りこんだ。瞬間、焼くような痛みが掌を中心に迸る。

「うっ、く……ちつと不味いな……こいつア、おれが思ってたよりずっとやべエ代物みてエだ……！」

バチバチという火花を散らせ、拳の中で宝石が暴れる。その人知を超えた凄まじい魔力は、エースの想像を超えていた。本来ほぼすべてのダメージを無効化できるはずの身体を浸蝕し、？実体？へと到達してしまっている。

握りこんだ右手の隙間から血が滲んで滴り、指の間から流れ落ちていった。

「エースくんっ！」

なのはが離れた場所から声を張り上げる。ジュエルシードから放たれる暴風に逆らい、必死に此方へ近づこうとしているようだ。さらに、左手首のエールも主人を制止するために警告音を発していた。

『いけませんマスターッ！ 分が悪すぎます！ その身の頑丈さは存じていますが、これほど巨大なエネルギーを直に浴びたら、いくら自然系ロキアのあなたでもどうなるかわかりません！ この場を離れて……いえ、すぐに逃げてくださいっ！』

紡がれる言葉には、いつも冷静沈着な彼女らしくない焦燥が満ちていた。悲痛な響きすら混じった声色は、既に懇願に近い。それほど、今のこの状況が危険だということなのだろう。

だが、そんなことはエースにもわかっていて。自分ではこの力を御することができないことぐらい、本能的に理解できる。それが分からないほど彼は考えなしではない。

だが、それでもエースは動かなかった。抗うたびに襲い掛かる痛みを歯を食いしばって耐え忍ぶ。そんな彼の頭には、逃げるなどという考えは端から無かった。

「へっ………一体どこに逃げ場があんだよ。この感じからすると、この辺全部消し炭にしそうな勢いだぜ………？ それに、お前が相棒だってんなら、知ってんだろ………？」

苦しげに声を紡ぎながら、エールに向かって語り掛ける。その痛みに攪められた顔に歯を食いしばって笑みを浮かべ、エースは半ば宣言するように叫んだ。

「一度向き合ったら………おれは逃げねエー！！」

それは決して引き下がらないという覚悟の顕れ。彼の内に存在する、決して揺らぐこと無きモノ。時代を越えて受け継がれた、彼が彼である証だった。

しかし状況は好転しない。ジュエルシードはその光を強め、いつ暴発してもおかしくないように点滅する。エースは逃げずに立ち向かい続けるが、もはやそれも限界に達しようとしていた。

「エースくんっ、やめて！」

なのはが、魔力の風に押し戻されそうになりながら、近づいてこ

ようと。このままではいずれ……と誰もが思った。

だが、その時エースを包み込むように光が満ちる。薄青色の輝きを放つ透明で恐ろしい光。それは、音を立てて弾けようとした絶望が、あるものに下させた決断だった。

『……お許し下さい、マスター……』

Awaking  
『起動』

エースの左手首にあったエールから、機械的な声が放たれる。すると、ジュエルシードと同じように少し白みがあった光が溢れ出すようにして放たれた。

光は交差するように彼の前を走り、糸が紡ぎあげることがとく形を為していく。そしてそれは、一瞬のうちに『あるもの』へと変わっていた。

『こ、こいつは……！』

見覚えがある『ソレ』に、エースは思わず声を上げる。見間違えるはずが無い。目の前に浮遊していたのは、この世界に来る前ずっと自分が身につけていた短剣だった。

一尺ほどの刀身に幅広の鎬地を持つ片刃の剣。長く苦楽を共にしてきた、彼のかつての相棒の一つ。そんなものがエースの目の前に刃を晒した状態で浮いていた。しかし、「あの戦い」で失くしたはずのそれが、何故この世界にそれもこんなタイミングで現れるのだろうか。

だが、エースがそんな疑問を浮かべるのを待たず、エールは相変わらず機械的な声の元に、淡々と続けた。

『Set up【AL】 - demand the Inst  
ration System call ..... the cha  
in of command freeze - shift  
o the Auto mode - Junction Code  
No. IV.....』

理解できない文章がちらちらと音声で紡がれていく。エースはジ  
ユエルシードを抑えたまま少し困惑の表情で剣を見つめる。そして  
次の瞬間、エールが次に光を放った時にそれは起こった。

『 All process clear/cursed  
rive!..!』

言葉の終わりに再び青い光を放つ。すると、それまで銀色だった  
刀身に黒い点が浮いた。その黒い何かは徐々にその範囲を増やして  
いき、染みが広がるように瞬く間に刀身を覆う。

そして刃全てが黒に覆われた瞬間、

ドクン.....！

エースは何かが『鼓動』する音を聞いた。得体の知れない何か  
迫ってくるように、まるで音が直接頭に打ち込まれているようにガ  
ンガンと。それは目の前の剣.....そして、自分自身から響いてき  
ていた。

今まで見えていた景色に二重、三重のブレが生じる。ブオンと言  
う音を響かせ、意識が霧をかけられたかのように淀んでいく。感覚  
が麻痺、いや『一時停止』し、すべてが止まったようにすら感じた。  
だが、それらは唐突に終わりを告げる。自らが感じた何かが臨界  
に達した時、世界から音が消えた。

最後の鼓動が耳に届く。何かの終わりと始まりを告げる何かが入  
り込んでくる、そんな大きな音。それが一際巨大な波となって、自  
分の内側に響き渡る。

そのことをエースが認識した刹那、すべてが動き出した。

「ウツ!!? がふツ!! オ、オ……………ぐアあああああ  
ああああ!!!」

闇の空を切り裂くは叫び。想像だにしなかったほどの、恐ろしい  
絶叫。それが、彼の口から爆発するように飛び出していた。

ギチツという音を響かせたエースの身体に、貫くような衝撃が走  
る。肉が裂ける嫌な響きと共に叫びは空気を切り裂き、その場にい  
た者達の耳に叩き込まれていた。

「エース(くん)ッ!?!」

「ッ!?!」

反射的に声を上げ、なのはとユーノはエースを見やった。フェイ  
ト達もびくっとなって目を開ける。そして、全員が言葉を失った。

「ああああああ　　ッ！！！！！」

目の前のそれを表す言葉があつたのなら、それはまさしく惨状と言えただろう。それ以上いくと折れてしまうのではないかと思うほどに背を反らし、握り締めた右手を左手で支えるようにして、エースはひたすらに声を上げ続けていた。

「エ、エースく……ひ………っ！？」

声をかけ様としたなのは口元から響く、微かな悲鳴と力チカチという音。彼女が見据える先から聞こえる叫び声の大きさが、彼に襲い掛かる苦痛のほどを物語っていた。両方の上腕部が裂け、大腿が割れ、体中から血を噴出する。

血飛沫がエースを中心にして舞う。飛び散る血が、彼自身を真っ赤な花へと染め上げているようにすら感じる。だが、その常軌を逸した光景は、まだ年端も行かない少女が見るにはあまりにも凄惨すぎた。

「ア………く、あッ………うッ………」

彼の叫び声が徐々に小さくなり、身体の痙攣も治まっていく。見ると、先ほどまで激しい魔力を放出していたジュエルシードの光も、そのほとんどが消え失せていた。

足元をふら付かせ、時に咳き込みながら、エースが何度も大きく息を吸い込む。そして何とか息の乱れを抑えると、少し離れた場所で此方を見ていたフェイトと目が合った。

逆流してきた血が容赦なく喉を焼いた。抑えきれなかった雫が口角の端からつうつと流れている。それを見てビクツと震える彼女に、エースは何とか口元を曲げ、精一杯笑いかけた。

「ハア、ハア……うぐ……ほら、な……ムチャすんな、って……言った、じゃねエ、か……こういうことに、なっちまうんだ、からよ……ぐっ……」

口元から、足から、肩口から。身体のいたるところから滴り落ちる血が無機質なコンクリートに鮮やかな花を咲かせる。それを目の当たりにしたフェイトは波打つ湖面のように瞳を揺らし、掠れた声を発しながら何度も首を振った。

「な、なんで……え……ちが、違う……私、こんな……こんなつもり、じゃ……こんな事が、したかったわけじゃ……」

ジュエルシードを暴走させたのは自分だ。だが、それは自分の目的のためだった。懸念や疑問など欠片も持たなかった。いつものように手早く、すんなりと終わるはずだった。

「血イ見た、の……初めて、か……？ はは……少し刺激が強かったかも、な……あぐッ……けど……これは、おれが勝手に……やっただけ、だ……まア……気に、すんなよ……」

だが、現実はどうだ。目の前には傷ついた人がいる。自分なんかを庇ったばかりに、血を流している人がいる。

紛れもなく、自分が傷つけた。自分が好き勝手に動いた結果、こっとなつたのだ。こんなに血が……赤い液体が流れている。

本当なら、彼が傷を負うことなどなかった。すべて私が、私がやったのだ。自分が何もしなければこんなことにはならなかったはずだ。

「あ……あ……ああ………！」

深紅の瞳が焦点を失い、フェイトの足がガタガタを震え始めた。

いやいやというように弱弱しく首を振り、目の前のことを否定しようとする。だがそうしようとするほど、目の前の現実はさらなる痛みを以って彼女を責め立てた。そのたびにズキズキと痛む胸を、フェイトは必死で押さえつける。

そんな彼女から目を離し、渾身の力を振り絞ってエースは横を見た。向けられるのは蒼白な顔だ。そんな悲しい表情で自分を見つめるのはに向かって無理矢理笑顔を作り、エースは口を開いた。

「悪い………なのは………ちつとばかり、し………寝る………から、よ………この後のことは、頼ん………」

エースが自らの声が認識できていたのはそこまでだった。

言葉が言い終わらぬうちに、彼の体は糸が切れたように崩れ落ちる。意識を失って重みの増した身は重力の法則に従い、すれたコンクリートに鈍い音を響かせた。

身体のいたる所から流れ出た血による水音がそれに重なる。飛び散った赤い雫が、地面と身体の間にはビチャツという耳障りな不協和音を立てた。

「い…………いやああああ

っ!？」

けたたましい金切り声が、ビル群の中に響いた。ビルの谷間がそれを反響し、悲しみと恐怖に満ちた音を増幅させる。

なのはが、うつ伏せに倒れたエースの下に転げそうになりながら駆け寄る。そして、地面に手について屈みながら叫んだ。

「エースくんエースくんっ! しっかりして! お願いだから目をあけて! 起きてよ! ねえっ、ねえってばあっ!!」

半狂乱になりながら、なのははレイジングハートを放り出して泣き叫ぶ。エースを引き上げて抱きしめ、全身から流れ出る血を押し留めようとする。だがそのたびに傷口にじわりとした水気が帯び、純白のバリアジャケットに赤褐色の染みが滲んでいった。

走り寄ってきたユーノも、今までに無いほど血相を変える。即座に治癒魔法を展開して治療を開始すると、緑色の光を放つ魔法陣が、なのはに抱かれたエースを中心に包み込んだ。

フェイトはその光景に言葉をなくし、ふらりと一歩後ずさる。そんななか、女性体になったアルフが、エースの傍へと飛び込んだ。その手から転がり落ちていたジュエルシードを掴み、動けない三人から即座に距離を取る。そして、半ば放心しかけの少女に向けて大声を上げた。

「フェイト! 離脱するなら今しかない! 行くよ!!」

「っ!?!? で、でも……………っ!」

気を取り戻したフェイトが、その視線を目の前のエースとアルフとの間で行き来させる。生まれてしまった迷いと強い罪悪感が、彼女の心を激しく打ち据える。だが、主が見せた逡巡にアルフは顔を険しくさせ、さらに声を張って怒鳴った。

「確かにアイツは心配だけど……あたし達がここにいたって何もできないよ！ それに優先目的を忘れたのかい！？ こんなところで捕まるわけにはいかないんだ。あの子達に……任せるしか無いんだ……！！！」

「アル、フ………」

諭す側のアルフの顔はとても歪んでいた。ギリツという齒軋りの音が聞こえてきそうな、悔しさとやるせなさに満ちた表情。そんな相棒の様子にフェイトもバルディッシュを強く握り締め、迷いを無理矢理振り払った。

「……………くっ！」

一瞥を流した後にエースに背を向け、フェイトはアルフを追ってビルの谷間を飛び去っていく。漂っていた戦気が霧散していく。それを待っていたかのように、黒い空からぽつぽつと雨が降り始めた。

ユーノはエースの出血が止まったのを確認し、魔法陣の展開を解いた。なんとか止血はしたが、依然として大丈夫というには程遠い。

「僕の治療魔法じゃ、これが限界か……！ ……なのは、早くエースを……………」

焦りを内包したまま、傍らにいるなのはに声をかける。だが、彼

の目に映ったのはいつもの彼女ではなかった。

「エースくん、エースくん………！」

そこにいたのは、悲しさに打ちひしがれる少女。目から大粒の涙を流しながら、うわ言のようにエースの名を呼んでいる。瞳からはハイライトが消えうせていて、ちゃんと見えているのかもわからない。

ユーノは、そんなのを見て一瞬言葉を失う。だが、ヒューヒューと力なく息をするエースを見て、逆に彼は頭をすぐに切り替えることができた。そして、自らの焦燥感を押し殺すように、気が付けば自分でも出したことのない強さと厳しさを含んだ声で、彼女を怒鳴りつけていた。

「落ち着くんだ！ 高町なのは！」

「！？ ユ、ユーノ………くん……？」

ユーノから掛けられた、今までになく強烈な言葉によって、なのはの瞳に僅かばかりの生気が戻ってくる。それを確認したユーノは、機を得たとばかりに彼女の目を真っ直ぐに見て続けた。

「エースは死んでいない！ まだ十分に助けられる！ けど、このままここに続けたら、雨に体力を奪われて本当に死んでしまうんだ！ 今君がやることは泣くことじゃない！ 彼をすぐ連れて帰って、一刻も早く治療することだろう！？ わかったら急ぐんだ！ なのはの部屋へ運ぶから、手伝って！」

「あ………うつく………わ、わかったっ………！」

ユーノの叱責にハツとしたのはが一度エースに目をやり、きゅっと口元を引き結んだ。涙を拭い、足元をおぼつかせながらも自分で立ち上がる。

同時に緑色の光が周囲を包み込んだ。転移魔法である。

そして一瞬の後、二人と一匹の姿が消えた。結界が解かれ、夜の喧騒が街に戻ってきた。ここに戦いは一時の終結を見る。

だが、強く降りつける雨がこれだけでは終わらないことを、言葉なく告げる。寧ろ、嵐は今ようやく始まったばかりなのだ。

消える瞬間、ユーノは空を見上げていた。世界が荒れることへの確信が強くなる。

暗黒の雲は、まだ晴れそうにない。

T O B E C O N T I N U E D . . .

第十一話 激突する想い（後編） ～ 起動する覚悟（後書き）

後書きも久しぶりに書くと、何を書いていいかわからない・・・っ！  
更新は三回の予定でしたが、現在何とか一つを書き上げられたため、  
今回のをあわせて四回にすることができました！

来年の春にはきつと戻ってこれる・・・はずだと思つので、それま  
で私は今の自分に課せられたことを頑張ろうと思います。皆さんも  
自分の将来こと、しっかり頑張ってください！

それではまた次回にて。返信とかは相変わらずできないですが・・・  
よかつたら感想も下さい！

最後にオリジナル技の名前を・・・

<炎戒・炎獄エンジュク>

炎によつて対象を捕縛する技。完璧にヒットすれば、なのはやフ  
エイト、クロノですら身動きを封じるほどであるが、ジュエルシー  
ドの巨大なエネルギーの前には、力の暴走を数秒抑えるのが限度で  
あつた。

それでは再見！  
ツァイツェン

第十二話 偉大なる証 〳 それぞれの思い(前書き)

予告していたストック放出です。

それではどうぞ！

第十二話 偉大なる証 〱 それぞれの思い

『海兵のわしでさえ、あいつを嫌いになれなかった……だからエースを引き受けたんじゃない……』

ー  
ー  
海軍本部中将？ゲンコツのガープ？ モンキー・D・ガ  
ー  
ー

とんとん、と狭まった壁の間に規則的な音が反響する。木を踏み鳴らす時の濁いた音だ。その発生源は歩く少女の足元からである。

歩き慣れたいつもの階段を、少しゆっくりと彼女はあがって行く。手には洗面器と清潔な白いタオル、そして包帯が握られていた。タオルなどは洗面所から、包帯は道場に備え付けてあったのを拝借したものだ。

そのまま彼女は二階へとのぼる。そのまま廊下を少し歩くと、光が洩れていた扉を開いた。脇にあったサイドボードの上にそれを置いて、自分の机へと近寄っていく。

「ユーノくん、どう………？」

「なのは………うん」

テーブルの上に乗っていたユーノが、なのはへと向き直った。その彼の目の前、クッキーのお皿と水差しの横の生地上に弱弱しく発光する赤い珠、待機状態のレイジングハートがある。大きさにしてビー玉ぐらいとなったなのはの愛機には、目に見えるほど大きな亀裂がいくつも走っていた。

「レイジングハートはたぶん大丈夫だよ。かなり破損は大きいけど、今自己修復機能をフル稼働させてるから、明日には回復すると思う。それよりも……………」

ユーノが辛そうな表情をしながらベッドの方を向いた。正しくは、そこで静かに寝息を立てている一人の人物へと。

「エースくん……………」

なのはがきゅっとパジャマの裾を握り締めた。規則正しく彼女のベッドで寝ているエースに、目が潤みそうになるのを堪える。ユーノがそんな彼女を横目で捉えながら、同じように彼を見つめた。

全身裂傷という大怪我を負って倒れた彼を連れ、なのは達がここに戻ってきたのは二時間ほど前の事だ。本当なら桃子などの手を借りたいところだが、事情を知らない彼女達に今の彼を見られればかなり不味いことになる。

そこでユーノが部屋への転移魔法を使用して彼を運びこみ、それなりに医術の心得がある彼の指導の元、簡易的な治療を行っていた。治療と言っても、傷口が広がらないように彼の魔法で保護して自己治癒力を促しつつ包帯を巻き、あとは滲んでくる血を拭いてあげるだけ。

そんなことしか出来ない自分達に怒りを覚え、目の前の彼の姿が二人の胸を締め付ける。しかし、あれだけの血を流した割に傷がそれほど深くはなかったことが幸いした。ともかく命に別状はないらしい。

「あ、いけない。そろそろエースくんの包帯を換えなきゃ」

「あ、僕も手伝うよ、なのは」

ユーノが机から床へ降り立つ。なのははそれに苦笑すると、サイドボードに置かれていた包帯を手にとった。布団を脇に退け、作業の邪魔にならないようにする。そして、すこしきこちなさが残る手並みで巻かれた包帯をずらすと解いた。

「え………!?!」

「な………っ!?!」

その瞬間、二人の動きが止まった。少し血の滲んだ包帯を手にしたなのは目を見開き、ユーノは驚きに口を開いたままだ。どちらも目の当たりにした光景に言葉を失くしている。

なのはが震える声でその理由を口にした。

「傷が塞がって………うつん、消えて、る………!?!」

そう。最初に包帯を巻いた時に見た痛々しいほどに全身を覆っていた傷が、影も形もなかったのだ。そのほとんどが、そこに傷があったのかも分からないほどにまで塞がり、ほぼ消えうせている。大きかったものも僅かな跡を残している程度だ。

なのはは絶句し、ユーノは目を疑った。

「そつ、そんなバカな……確かに見た目ほど酷くはなかったけど、軽傷なんてものじゃ済まない傷だったんだ……それも、さっきまでは確かにあったのに……それがこんなに早く……傷が塞がるどころか、治ってるなんてありえない……！」

「い、一体何がどうなってるんだらう……？」

ユーノが何度も目を若干険しいものにしながら、難しい顔で唸った。一方のなのはは起こっている事態についていけず、ひたすら首を傾げている。そんななか二人のに反応したのか、ベッド上のエースから声が洩れた。

「う……うう、ん……」

「っ！ エースくん!？」

なのははハツとして彼の顔を覗き込んだ。ベッドに手をつけた重みで、ギシツとした音が辺りに響く。二人が見つめるエースの口元から、寝苦しそうな呻き声が洩れた。

そうやって、眉を寄せたり身を擦ったりする。しばらくそんなことを繰り返した後、眠たげだった瞳がゆっくりと開かれた。

「……、う……ん？ なの、は……？」

「~~~~っ!! エースくんっ!!」

瞳が水気を帯び、端正な顔がくしゃりと歪む。そして一瞬後、エースは感極まったなのはに全身全霊の勢いで飛びつかれ、思い切り抱きしめられていた。

「ふ　　へっ!？　　お、おいなのは、何泣いてんだよ……………っというか、何時の間に寝たんだおれは？」

「エース、憶えてないの…………？」

ユーノがなのはが抱きついたまま混乱するエースに声を掛ける。当の本人は一瞬「何の事？」といった風な顔をするが、徐徐にあつたことを思い出したらしい。その顔に確信と共に険しさが満ち、しかしすぐにまた穏やかな表情へと変わった。

「……………ああ、そつか。おれ、ジュエルシードを抑えようとして气イ失っちゃったんだっけ。はは、割って入ったのにカツコ悪イ……………けどお前らは怪我もなかったみてエだな。ま、それならよかったぜ」

「よ、よくなんかないよ!!」

苦笑気味に笑う仕草に、なのはが険しい表情で声を荒げた。言葉の端々には、彼女にしては珍しく怒りも感じ取れる。間髪いれず至近距離まで詰め寄ったなのはは、強い瞳でエースを見つめた。

「どうしてすぐ逃げなかったの!？　そのほうがずっと簡単に出来たでしょ!？　あの時、もしジュエルシードが安定しなかったらエースくんは死んでたかもしれないんだよっ!？」

堪えていたものが決壊してしまったのか、涙をポロポロ零しながら

ら彼女は言い募った。エースはそんな彼女の様子に驚いて目を大きくし、「悪イ……」とバツが悪そうに頭を掻く。そして、説明を求める目で此方を睨むのはを正面から見やり、僅かに深呼吸した後、に話し出した。

「なんで逃げなかったのか、か……確かに、なのはにとつちや見過ごせぬエ事だろうな。けど、おれもこれまで考えてきて、それでわからなかったんだ。何より、そうしちまうおれ自身が一番不思議で……あーくそっ！ 上手く言えねエな……！」

それは本当に曖昧な口調だった。自分の中にあるものを思い出すという感じではない。自分でも分からないことを確認して形にしていくような、そんな作業にも見えた。

なのはもユーノもエースと出会ってまだ十日足らずだ。彼のことはその人となりぐらいしか知らないから、その言葉の裏にあるものを読み取ることなどできはしない。しかし、その響きは彼の行動が何か強い思いによって為されたものだということを二人にはつきりと理解させていた。

「昔から……そう、ずっと昔からそうなんだ。時々……カッと血がのぼるんだよ。逃げたら何か……大きな物を失いそうで恐くなる……あの時は」

そこまで言ったエースは一度言葉を区切って逡巡し、

「おれの後ろに、お前らがいた」

「『……』」

しかしはつきりと口にした。エースの言葉になのは達、そしてエールすらも息を呑む心配が伝わってくる。エースはそれに関しては何も言わず、強い光を宿らせた瞳で話を続けた。

「フエイトの嬢ちゃん達もそうだけどな、おれはお前らに傷ついて欲しくなかった。お前らに、味方じゃねエあいつらに……突っ走って無茶されるのが……それをただ見てるだけのおれがなんか嫌だったんだよ……だから、あの時何考えてたとかはよくわからねエ……お前らが死ぬかもしれないって思ったら、身体が勝手に動いてた。たぶんそのせいだ」

「「エース（くん）……………」」

なのは達はそれを黙って聞いていた。エース言葉は自らの心が分からない、と言うような迷うようなものだ。しかし、その端々伝わってくるものから、それが彼にとって比類なき強さを持つ思いであるということとは理解できた。

『……………』

そんななか、なのは達とは違う雰囲気を放つものがいた。先ほどの会話に一言も口を挟まず、ただ沈黙を身に纏っている。それを感じ取ったなのは少し不思議に思い、彼女（？）に声を掛けた。

「エール？　どうかしたの？」

『っ……………い、いえ……………何でも、ありません……………』

「？　ならいいけど……………」

なのは首をかしげながらも納得し、再びエースとユーノで話し始める。エールはエースが助かったことに内心安堵の息を吐きたい念を覚えつつ、じっと考え込んでいた。エールの考えの先にいるのは、自らが主と仰ぐ少年の姿をした青年、そして今は亡きもう一人の人物。

(「逃げない」のではなく、仲間を傷つけるモノを……………「敵を逃がさない」……………そのためなら、自分の命すら容易く受け皿にするその気質……………恨んでも血は争えないのですね……………世界を超えても、体が子供に戻ってしまっても……………やはり、貴方は『彼』の……………)

自分の中にある『記録』が、明確に理由を決定付ける。それはエースにとって呪いに等しかったもの。だが同時に彼が彼であることを、その存在を明確に示すもの。

(受け継がれる事の証……………尤も、マスターは嫌がるでしょうが)

苦笑するがごとき結論に達し、エールは思考の海原から意識を浮上させる。ともかく今はマスターの無事を喜ぼう。彼の背負ってきた運命は軽くはないが、必ず力に力になるだろうから。

そんなことを考えながら、一人傍観に徹する。穏やかな空気が流れる中、エールは笑いあう三人を静かに見守っていた。

「平気かい、フェイト？」

「うん……………」

暗い部屋の中に私とアルフの声が響く。ここは、先ほどまでいた海鳴市の隣の市にある高級ホテル。ジュエルシード探索のために渡された資金によってすべて前払いし、完全な貸し切り状態である。スイートルームと言っても差し支えない設備と高さにある私達の部屋からは、都市部の明かりを一望することができた。

だが、普段は気紛れ程度に見下ろす街並みでさえ今日は見る気にもなれない。部屋に住み始めた時は驚いていた絶景のごとき眺めすら、私の視界には入ってこなかった。

静かに黒塗りのソファに腰を落ち着ける。

「大丈夫……………私は大丈夫だよ。でも……………」

アルフに言葉を返すが、声に力がないのは自分でもわかった。それを分かっているのか、アルフもいつものように話しかけてこない。頭に思い返されるのは、先の光景ばかりだった。

目標をを捕獲しようとした自分。白い魔導師の女の子。暴走したジュエルシード。そして、血だらけになった『彼』。その姿が脳裏にフラッシュバックする。同時に、私に向けられていた言葉が鮮明に頭の中で再生された。

「まあ……………気に、すんなよ……………」

こちらに向けた精一杯の笑顔が強く浮かび上がって来る。拳がきつく握られる。噛み締めた歯の間からは、ギリツと音が響いていた。

「私の、せいだ……………」

「フェイト？」

ぼつりと零した言葉にアルフが反応した。心配するようにこつちをじつと見つめてくる。その目に私が映り、気付けば胸に抱えていたものを吐き出していた。

「私が……………私が傷つけた……………私のせいで……………あの人に……………怪我、させちゃったんだ……………」

ズキン。ズキン。

戦闘によるものではない、きゅっと締め付けられるような鋭い痛みが胸に走る。別に本当に傷など出来てはいない。だが、それは今の私に外傷以上の苦痛を与え、消えることなく心を責め苛んでいた。

「私、何してるんだろう……………私のせいなのに……………全部私が悪いのに……………あんなになってまで守ってくれたのに……………なんで、逃げてきちゃったの……………？」

「そ、それは……………け、けどっ、あの時はそうするしかなかったじゃないか！」

アルフが擁護の言葉を掛けてくれる。確かにそれは本当だ。あの場においても、私たちができた事などほとんどなかっただろう。

その事實はほんの少し痛みを和らげてくれた。彼女の存在は私には勿体無いぐらいだと改めて思う。

だが、起こってしまった事は変わらないのだ。彼女の優しさに縋りたいと思うのは、ただ逃げているだけ。直視したくない目の前の事実から目を逸らしているだけだ。

それが分かるから、私は私自身をどんどん許せなくなっていく。心配そうに見つめてくるアルフから視線を逸らし、自嘲気味に言葉を吐き続けた。

「そう、かもしれないね。けど私が無茶をしなければ、ジュエルシードが暴走することもなかった……私が無理に奪おうとしなければ、誰も助けに入る必要はなかった……私なんかを助けなければ、あの人はあんな怪我也も負わなかった！」

「フエ、フエイト……」

アルフが肩を揺するが、震えは止まらない。カタカタと揺れる身体を抱きしめて、無理矢理抑えつける。

母さんのためと、割り切ったはずだった。母さんが笑ってさえくれれば……アルフたちと仲良く暮らせるなら、あとはどうでもよいと思ったことさえあった。

だが、それが今は揺らいでしまっている。自分の考えが本当になっってしまうことに恐怖を感じる。あの人がどうにかなくなってしまっ

とが、あの人から冷たい目を向けられることが、とてつもなく恐い。もしかしたら命が消えてしまいかもしれないのだ。他ならぬ、私の手によって。それが罪悪感と共に私の内側に傷を作ってゆく。

だから声を上げる。みつともなく涙を流す。懺悔にもならない、醜い言葉を紡ぎ続ける。けれど、そうするより他なかった。そうしないと心が壊れてしまいそうだったから。

「だって、だってあんなに血を流してたんだよ!? 怪我の傷だつてすごく酷かった! 私を守ってジュエルシードの力を受けとめたせいで、あんなにボロボロになって! それでも、あの方は怒らなかつたのに……何一つ、私を責めなかつたのにっ!」

「お、落ち着きなよフェイト!」

肩を掴む彼女の瞳に、大きく目を開いた私が映った。ひどい、本当にひどい表情<sup>かお</sup>。いまの私には何も出来ない。アルフに縋りつき、ただ壊れないように涙を流すことしか。

「恐い、恐いよアルフ。私が…私のせいであんな怪我……ううん、もし怪我なんかで済まなかつたら……私が、私が彼から『奪ってしまった』としたら……!!」

「ッ! フェイトッ!」

「っ!?!」

アルフの一喝で肩が揺れる。覗き込んでいた彼女と目が合った。その彼女は初めて見るような、厳しく、そして泣きそうな瞳で私を

捉えていた。

「アイツが心配なのは分かるよ。けど、もう言わないで。今まで頑張ってきたんだ、ここでフェイトがどうにかならなかったら、アタシは…………アタシは……………」

「アルフ…………ごめん、ごめんね」

「フェイトお…………ツ！」

アルフが思い切り抱き付いて来る。本当に思い切りで、ちょっと痛いぐらいの抱擁だ。元が狼だから当然だけれど。

けど、私も同じくらい強く抱きしめ返した。負けないくらい強く、思いが伝わるように。

そうしていると、不思議と安らぎが満ちてくる。遣る瀬無さばかりが募っていた心が次第に和らいでいった。アルフから身体を離すと、少し緊張が解けたように彼女は微笑した。

「アイツなら大丈夫さ…………きつとね」

「……………うん。明日は母さんに報告する日だし、早く寝ないとね」

私の言葉にアルフは少し複雑な顔をしたけど、すぐに穏やかに相槌を返してくる。私もそれに対して笑顔を返した。上手くできたかはわからないけど。

安心したからか、急激に睡魔が襲ってきた。ベッドに行くにも億劫だったので、私は狼形態となったアルフと身を寄り添い合わせる。

そしてソファに寄りかかったまま、私たちは夜を明かしたのだった。

- Side out -

T O B E C O N T I N U E D . . .

第十三話 出会いと必然 〱 次元の海へ(前書き)

ストック第二弾です。

感想とか返せないのはあしからず。

ACEはストックがあと一つありますのでお楽しみに！

それでは第十三話です！

第十三話 出会いと必然 く 次元の海へ

『冒険の匂いがするっ!!』

麦わら海賊団船長？麦わら？モンキー・D・ルフィ

春の陽気というものはいつも人を和ませるものだ。四季が順々に巡る日本に住んでいる者ならば、誰もが理解できる。寒く厳しい冬が終わり、芽が息吹く季節に心躍ることだろう。

大地いっぱい降り注ぐ温かい日差し。穏やかに流れていく風と小さな雲。それに混じって時折聴こえてくる小鳥達のさえずり囀り。

抜けるような晴天を見せる青空とぼかぼかと暖かい空気は、ただ心を穏やかにしていく。意味もなく平和だねえ、と言いたくなる光景がそこにある。

「暇だ……………」

そんななかで気の抜けた声を上げる者が一人。その主はぐてーっといった擬音語がぴったりな様子で、窓際の畳に大の字に横たわっていた。時間にして三十分ほど彼はこの状態だった。日の光を吸収した髪がだんだんと熱を持ってきはじめていた。

「ふぁー……………暇だア、暇すぎる……………」

縁側に向かつて愚痴を零すのは、もちろんエースである。大あくびを注意する恭也もくすくす笑う美由希もここにはいない。なので現在、彼は絶賛怠けモードの真っ只中であった。

が、好きで怠けているわけではない。

「ったく……………なのはヤツ、ホントに心配性なんだからよ。おれは大丈夫だって言ってるのに……………」

僅かな不満を吐き出すように、エースは溜息と共に肩を竦めた。

エースがジュエルシードのエネルギーによって負傷したのは昨晚の事だ。後から聞かされたことによるとあの後自分は気を失ってしまい、フェイト達はそのドサクサに紛れ、ジュエルシードを奪って姿を眩ませてしまったらしい。部屋で意識を取り戻した後、感極まったなにはは大泣きされ、しばらく離してくれなかった。

さてそのエース自身はというと、既にほぼ差し障りがなくなっている。あれほどの大怪我を負ったとは思えない回復を見せ、今や傷も消えて、その様子は普段とほとんど変わらないほどだ。

普通に考えれば、一晩であれだけの怪我が完治するというのは異常事態だ。無論のこと、エースにとっても身に覚えのない事であるが、別に特段困るものでもないし、治るならそれに越した事はない、と本人は割り切っていた。

というか、端から考えるつもりもなかったようだ。当の自分が思い当たらないのだから考えたってどうせ分からない、だから考えるだけ無駄、とあっさり流したことからそれが窺える。なのはは深

く考えず、エースが無事な事を素直に喜び、ユーノなどはいつものがらそのあまりの軽さ加減に呆れを通り越して感心していたくらいであった。

ともあれ、一晩明けた後のエースは完全に元に戻っている。エース自身もそれを感じていたので、特に問題にはしていなかった。だが、いつものように出歩こうとしたところで、なのはから痛烈な待ったがかかったのだ。

曰く、

『今日一日は絶対、ぜえ〜〜ったいに大人しくしていること!』

という条件付で、だ。もちろんエースはぶー垂れた。治ったのは嘘や間違いではないし、無理をしているわけでもない。傷も完全に塞がったこともユーノが証明してくれていた。

ともかく懸念すべきことは何もないはずなのだ。無事すぎて身体がウズウズしているぐらいである。なので、エースはそれら盾にして再三にわたってなのはに進言したのだが、

『ダメッ! 風邪も治りかけが一番危ないって言うし、エースくんはすぐ一人で無茶するから今日は家にいるの! 昨日の傷はなんでか消えちゃったけど、すごく酷い怪我だったのは事実なんだよ!? ちゃんと休んでなきゃお説教なんだから!』

と、これである。登校する間際にも口を酸っぱくして言ってきた。エースが無茶したことに大層おかんむりの様子だった。友達というよりも母親に近いかもしれない。

そんなわけで、エースはこうして暇を持って余しているというわけである。なのはは小学校、恭也も美由希も同じく学校だ。土郎と桃子は翠屋へケーキなどの仕込みへ出かけていて、あと数十分は戻らない。ユーノはさっきまで話していたが、少し考えたい事があると言っていたので置いてきた。今は二階のなのはの部屋にいるだろう。

「あー……………フェイトの嬢ちゃん達とか来てくれねエかなー……………あの使い魔の……………アルフだっけ？ アイツとも結構話とか弾みそうな感じがするんだけどなア……………」

今度はぐてーっと仰向けに突っ伏し、エースは土台無理なことを言う。よほど何もしないでいるのが辛いようだ。そんな主を見かねたのか、エースの横に置かれていたエールが独り言に割り込んだ。

『マスター、それは都合が良過ぎますよ。そもそも、今の彼女たちにそんな余裕はないでしょう……………ですが、そこまで暇を持って余しているのでしたら、いっそのことこちらから出向いてみてはいかがですか？ お望みなら、私がログを元に『方向』を指し示して先導しますが』

「へ？ お前、そんなことできるのか？ けど、前に記録指針ログポースとしての力はなくなっただって言ってたよな？」

身体を起こし、畳の上に鎮座する相棒へと視線を向ける。質問について答えるともいったように、エールは点滅を返した。

「マスター、それは事実の一斑ではありますが、正しくもありません。確かに以前のような？島の磁力を記録する力？はありませんが、デバイスに変わった事で記録ログをする内容もそれに準じて変化したのです。記録できなくなったのではなく、記録できる？対象？が変わっただけなのですよ。機能も充実し、その対象も二種類に増えました。その一つが？魔力？の記憶なのです」

「？魔力？？ 魔力って、なのはとかが魔法を使う時に必要になるっていう、アレのことか？」

エースが腕を組みながら問い返す。脳裏に浮かんだのはなのはやフェイトの砲撃魔法、それにユーノなどが使う結界魔法だ。エールが再び反応して光を放つ。

「ええ、その魔力で合っています。魔法を自身の力のみで発動させるには、どんな場合でも魔力が必要不可欠。その魔力………正確には力を司るリンカーコアと呼ばれる組織からは、その者だけが持つ独特の波長が放出されているのです。指紋や声紋の魔法使い版、人が持つ個性などと同じと考えてください。そして、私はそれを記録、さらに感知する力を持っている。何が言いたいかわかりますか？」

「いんや、さっぱり」

エースは相棒に対して正直に告げた。いや、基礎知識というものは本当に重要だと改めて思った。なのは達に？悪魔の実？の概念が分からないように、エースにも魔法の概念が分からないので今みたいな頭のいい会話には付いていけないのだ。

「はあ………つまりですね、以前フェイト嬢とお会いした際に、その魔力の波長を記憶しておいたのですよ。よって今は彼女から発さ

れる唯一無二の波長を指し示すことが出来る。即ち 』

「おお、なるほど！ お前の力を使えば、今あいつらがどこにいるのかが正確に分かるって事だな！ 原理とかはさて置いて」

手をポンと叩いてエースが納得の意を示した。合わせてピンポーン、とエールから電子音が響く。意外と器用なデバイスである。

『ええ。後半の部分が非常に気になりますが、ほぼ正解です。尤も通常であれば、強力な魔力を持つ者を感じるとび上書きされていつてしまいますが、今回は記録にロックを掛けてあるので、永久指針エースと同じ働きをしてみてください』

「便利だな〜！ つと、それならこんなところで油売ってる理由はねエな。なのはには悪イが、ま、探すだけならアイツも文句はねエだろ」

立ち上がりエースは玄関へと急いだ。エースは基本的に約束をすれば守る必ず守ろうとする男だが、今回は別に約束というわけではない。それに、エールの新しい機能や、フェイトの隠れ家を探すということに心がはやっていた。

子供であつても彼は海賊。冒険が大好きな人種なのである。左腕にエールを装着し、久しぶりとなる遠出の予感に気合を入れる。

「うしっ、準備万端だ」

『了解しました。ユーノへは、レイジングハートを通じて私から連絡を入れておきます』

「頼む。そんなじゃ、いつちよ大追跡ミッションといくか！」

エールとの会話もそこに玄関から飛び出すエース。たったつたつ、とりズムよく走る音が響いてくる。その表情は、本当に純粋な輝きで満たされていたのだった。

- Side One girl -

海鳴の街は、人口数十万もの規模を持つ中型都市だ。中心部にはビルが立ち並ぶが、それを囲うようにして市民たちが住まうマンションや一軒家などが連なり、さらにその周囲には多くの自然を残しているのも魅力の一つと言える。郊外には温泉も存在していて、近年は観光地としての役割も担っていると聞く。

そんな治安もよく穏やかな住宅街の一角。整備が少し行き届いていない道路の隅で一人の少女、即ち私は眉を寄せて困り果てていた。

「あかん…………ちつと油断しすぎてたみたいや」

声が少し沈んだ調子で響く。紡がれる言葉は方言として確固たる地位を確立しつつある関西弁だ。関西弁を喋る少女となると元気いっぱいなイメージが沸くかもしれないが、残念ながら私はその通例の内には納まっていないだろう。

この身は車椅子に座っているのだ。鉄パイプに青いシートというどこにもあるタイプのものである。しかし長いこと足が悪いせい

もあり、乗っている車椅子には使い込まれた物が持つ特有の雰囲気  
が漂っていた。と、そんなことはさておいて。

屈むようにして右手に力を込めていた私だったが、「はあ〜」と  
空気を吐き出した。

「こういうんは結構久しぶりやけど、こういう久しぶりは嬉しくな  
いかなあ〜……………」

頬を搔きながら下を見やる。すると、見事に道路脇の側溝に嵌っ  
た自分の車椅子の車輪が見えた。右の主輪が完全に落ち込み、がっ  
ちりと溝と噛んでしまっている。

車体が傾くほど入り込んでしまっているのだ。いくらこの道長い  
とはいえ、手だけでは健康な人でも状況は覆せまい。

「まいったなあ……………こんなときに限って大人は通ってくれへんし、  
自分でやるうにも倒れたらもつと厄介やし……………」

私は先ほどから何度目か分からない溜息を吐いた。そして、スカ  
ートのポケットに手を突っ込みの中から一つの物を取り出す。

それは携帯電話だった。病院から何か有事が起きた際にと渡され  
ているものだ。つまりは彼女にとっては最後の命綱、緊急用の連絡  
端末である。

取り出した携帯を出したままぼんやりと見ていたが、はあ、と溜  
息を吐くと、私は折りたたまれたそれを開いた。

（ま、これ以上ここにいっても何も進展はしてくれへん。横着して人

通りの少ない道を選んでもうた私のミスやしな。先生にはまたその道使ったのって怒られるかもしれへんけど、この際仕方ない。ええと、石田先生の番号は……………と)

これ以上の足掻きを諦め、電話帳検索から目当ての名前を呼び出しにかかる。おそらくこの時間なら担当主治医の彼女が空いているはずだ。淀みの無い手つきでそこまで行き着く。そして、使い慣れた携帯の、押し慣れた通話ボタンを押そうと親指を伸ばす。

そんな時だった。

『ほれ、ぼつっとしてねエでしっかり掴まれよ。落ちても知らねエぞ?』

軽い口調とともに浮遊感が体を包み込んだのは。

「えっ……………わきゃあ!?!」

突然のことに、私は心から驚いていた。まあ、いきなり自分の据わっていたものが大きく揺れたのだから、驚きもするだろう。私は思わず体を硬くして、はっしと車椅子にしがみ付く。

と、すぐに浮遊感は接地面の感触にとって変わり、グラグラも収まった。どうやら今のは車輪が元に戻されたものと、持ち上げられたことによる浮遊感だったようだ。安堵の息を吐きながら、私は高まった動悸を落ち着ける。

それにしても、久しく上げていかなかった悲鳴を上げてしまった。いきなりだったから心構えもできず、少し女の子らしくない感じのものだったように感じる。

うう、まだ私九歳やのに。なんや、嫌なところで乙女の自信を失くすわ……悲鳴上げるに心構えが必要っていうんは、ちょっと可笑しな話やけども。

「よつと……大丈夫か、嬢ちゃん？」

しかし世界は依然として回っているらしい。俯いていた私の上から快活そうな声がかかった。ちゃんと地面について平行になった視界を確かめた後、私は恐る恐る視線を上げる。

当たり前だが、そこには人が立っていた。背丈の感じからして、恐らく自分と同一年ぐらいの少年。しかし、此方に笑みを向ける彼を見て、私は何か違和感を感じていた。

その少年の笑みが、何故か澀刺とした青年の笑顔にダブって見えたのだ。故にだろうか。同年代のような、しかしずっと年上にも感じるような矛盾した感覚が私の中を駆け抜ける。

だがそれも一瞬。笑いながら私を見下ろしていた彼と、真正面から目が合った。

「車輪が落ちて動けなかったんだろ？ よかったな、出られて」

私にとっては初めてだろう、至近から見る男の子の笑顔。それは太陽のような、心を温かくする本当に眩しい笑みだった。

「っと、いきなり悪かったな。怪我してねエか？」

「……はえっ!? あ、いえ! 私も困った所やったし、助け  
てくれはってありがとうございます……」

車輪を道路へと戻した後、目の前の少女に声を掛ける。エースの  
声に驚いたのか一瞬ビクツとしていたようだが、彼女はすぐにお礼  
を言いながら頭を下げてきた。

ふっと、顔から笑みが零れる。そのまま視線を落とし、彼女が座  
っている? 椅子? を見た。エールからの念話が頭に響く。

『(どうやら、彼女は身体に不自由を抱えているようですね。先ほ  
どの身体の重心の動きから考えると、足……でしょうか)』

(普通に考えりゃ、な。おれも前の世界で何人か見た事ある。けど  
……なんだ? さつきからくるこの妙な感じは……)

『(マスター……?)』

彼女から感じる何かに、エースは怪訝な表情を浮かべる。それを  
目ざとく読み取った少女は、首をかしげながらエースを見上げた。

「？ どうしたんですか？」

「え？ あ、ああいや……………その……………足が、悪いのか？」

言葉に迷い、彼女の足を見ながら告げた。言ってしまったから、少し無神経だったかもしれないと考える。しかし少女はというと、いきなり聞かれた事には少し驚いていたようだったが、すぐに意図を理解し、こちらの質問にきちんと首肯で返してくれた。

「あ、は、はい。その通りです。下半身が麻痺してて、自分じゃ上手く動かなくて。生まれつき不自由なんで、私、自分の足で歩いたことがないんですよ」

言葉を紡ぐも、その顔には僅かな憂いも見取事できない。浮かんでいるのは歳相応な、純粹で優しい笑みだ。よく言えば『慣れた』ということなのだろう。

だがそれは経て来た年月の裏返しだ。それを彼に嫌というほど感じさせる。優しさの裏に封じ込められた痛みや悲しみ、そして自分の境遇に対する憎悪すらも。

悲しみは磨耗して諦めとなり、もはや表情に表れていない。それが紛れもない？絶望？であることを、彼女はまだ自覚していないのだ。エースはかつての自分を見ているような感覚にとらわれ、僅かな寂しさを覚えていた。

そんな彼女に対し、同情は最大の侮辱となる。その答えも自分で探すしかなく、行き着くであろう、あるかないかも分からない先も自分が描かなくてはならない。だから、エースは明るくて優しい表情になるように努めて、少し口の端を吊り上げ、軽く確認がてら尋

ねるだけに留めた。

「そっか。あー、それとそんなに丁寧にしなくてもかまわねエよ。敬語も別になくていい。見たところ同じ年ぐらいだし、言葉遣いも最初使ってたヤツの方が自然だ」

「えっ……！？」

しかし、間を繋ぐことと話題転換を兼ねてで放った質問は、見事にドンピシャだったらしい。ギクツと揺れた肩からも明らかだ。少女はなんとか誤魔化そうとしていたようだが、あまりに苦しい展開になると思い当たり、すぐに苦笑いを零した。

「あ、あはは……もうバレてもうた……うう、さっきは咄嗟だったから直しきれんかったんのが悪かったかなあ。普通だったら絶対せえへんミスやったのに……もう、あんさんがいきなり持ち上げたせいやで？」

「はは、そいつは悪かった。けど、口調ぐらいべつにいいんじゃないか？ 珍しい言葉遣いだがそれはそれで面白エし、何より、嬢ちゃんがさっきよりずっと活き活きしてる感じがするしな。なんとうか……そいつらしい、っていうのか？ うん、こっちの方がおれは好きだ」

「へっ！？」

笑顔に軽い口調を乗せて返すエース、それに驚いた顔をする少女。彼女の不思議なノリのせいか、つい思った事をそのまま口にしてしまった。初めて会った相手に少し馴れ馴れしすぎたかと思い、機嫌を損ねていないかエースは言葉を止めて様子を見る。

幸い彼女に危惧したようなことは起こっておらず、エースは安心して肩の力を抜いた。自然と笑みも浮かんでくる。その瞬間、僅かに赤く染まった彼女の頬が若干気にはなつたが、大事なようなのでとりあえずスルーした。

「え、あ、あのその……あ、ありがとう……そ、そんな人に言われたん初めてやから、お世辞でもて、照れてまうな……変な口調かもしれへんって前から気になってたんやけど、少し安心したわ……」

上目遣いで笑顔を浮かべてくる。しかし、安心したというのは本当らしく、表情からも強張った感が消えていた。対するエースも力が抜けた笑みを見せ、やんわりと肩を竦める。

「や、別に世辞のつもりはなかったんだが……ま、納得してるんならなんでもいいか」

「（はあ……正直すぎるというのは時に罪深いものですね。尤も、貴方の弟などにも言えることですが……「マスター、問題は解決したのなら先を急ぎましょう。のんびりはまた今度ですよ」）」

少し哀愁漂う声でエールから念話が飛んでくる。エースは今日の目的を再確認し、エールに「わかったわかった」と相槌を返した。そして、目の前の少女に視線を戻す。

「っと、おれも急ぎだったんだ。じゃあ身体を大事にな！ それと、もう溝に嵌ったりすんなよ？」

一日は短い。なのはが帰ってくるまでに事を終わらせねばならぬ  
点を考慮すれば、時間はかなり限られていた。名残惜しいが、今  
はやるべきことがある。エースは挨拶もそこそこに、踵を返したと  
同時に走り出した。

背中に視線を感じた。耳へ風を切る音に混じって少女が御礼を言  
う声が聞こえてくる。せめて彼女に穏やかな時間が訪れることを願  
い、エースは指針の先へと駆けて行った。

- Side Hayate Yagami -

私は遠ざかる足音で彼が走り出したことに気付いた。どうや  
ら少しぼうつとしていたようだ。時間にして数秒ぐらいだろうか、  
しかし彼の背中は遠く離れ、姿は小さくなっていった。

私は慌てて手を振りながら叫ぶ。

「あ、うんっ！ ゴメンなあ引き止めて！ ホンマ、おおきに！  
ありがとうなあ！」

言葉を置いて走り出した彼に、私は大きな声で感謝を伝えた。こ  
んなにも大きな声は久しぶりだ。その姿が道の先へと消えていくま  
で手を振り続ける。

私の声には彼は背を向けたまま手を挙げて応えてくれた。嬉しさ、  
いやそれよりも温かい感じが胸にすっと染み渡る。見ると、彼の後  
姿は街並みのなかへと消えていた。

そこでようやく手を下ろした私は、はたと思い当たる。

「あ……………名前聞くの忘れてもった……………」

そんなこと、すっかり頭から飛んでいた。自称、世話焼きはやてさんにしては異例の失敗である。同時に聞き忘れてしまったということがひどく悔やまれた。

だが彼とはまた会える。どこかで、きっとまたあの笑顔を見れる気がする。不思議ではあるが、自分のなかにそんな予感があった。

「そつだとなえなあ……………」

純粋な願いが口を突く。本当に眩しいような彼の笑顔を思い出し、意味もなく照れてしまう。今時、少年でもあんな真っ直ぐな笑顔とというのも珍しい。それを思い出して、私は一人顔が赤くしていた。

- Side out -

少女と別れ、エースはログを辿って探索を再開した。方向だけはキッチリわかるものの、距離などは表示されなかったため、ひたすら針の指した方向へと進み続けるしかない。着実にフェイトへと近づいているというエールのエールを聞きながら（決して、絶対に、絶対に洒落ではない）、意気揚々として時に歩き、時に橋っていく。そして少女との別れから三十分しばし、エースは進んでいた足を止め

ていた。

「記録指針ログポースが指してるのはここか。それにしても、えらくだけエ建物ログポースだなおい」

見上げるのは目も眩むような高さの建物だった。金色に輝くつもの骨子に一面のガラス張りが映えている。

「一流の高級ホテルというところでしょうか。子供が泊まるには分不相応ですが、解析中……反響音あり、魔素の密集を確認。さらに、周囲に魔力が洩れないようにする類の結界も展開されています。間違いありません。ここが彼女達の根城のようですね」

「よし、そんじゃ行くとしますか」

そんなこんなでロビーを通過し、エレベーターに乗るエース。エレベーターは初めてだったので戸惑ったが、エールが指示してくれたお陰でスムーズに進むことができた。ログが指す角度からすると、彼女らはかなり上の階らしく、それを頼りにボタンを押す。

ためしに一番上の階を押してみると、数十秒かけてその階へと辿り着いた。広めのロビーがエース達を出迎える。だが、エースは左手の記録指針形態ログポースのエールを見て首を傾げた。

「うん？ 着いたみてエだが……おかしいな。これが一番上なんだろ？ 何でその上を指してんだ？」

そう。エースの言うとおり、ログの針先はまだ上を指していた。エレベーターに乗った当初よりは角度も浅くなっていたが、しっかりと上の階を指している。しかし、エレベーターにはこれより上の

階表示はなかったはずだ。

『このエレベーターでは彼女達の部屋へ行けないようですね。スイートルームは階そのものが部屋となっていて、専用のキーかICカードを持つ人間しか出入りできないと、さっきフロントに書いてありましたから。仕方ありません、ここからは非常階段を使いましょう』

エールがさかさず入れた方策に頷き、エースはエレベーター脇の非常扉を開いた。ロビーとは対照的な無機質な殺風景な階段を、一階上がることに確認しながら上っていく。スイートルームへの扉はどれも閉ざされていたが、いざとなれば力技で開けるので問題ない。そんな感じで歩みを進めていたエースだが、目的の場所には一向に辿り着かない。そして、ついに最上階、屋上へ続く扉にまで来てしまった。

だが、それを待っていたかのように指針が水平へと移行する。

(ビンゴだな)

『そのようですね』

エースはそれを確認すると、やおら気配を消し、音を立てないようにそつと扉を開く。僅かに洩れる光の先に目を細めると、果たしてそこには捜し求めた二人、フェイトとアルフが立っていた。

「ふう。苦労させやがって、やっと見つけたぜ。けど、あいつらいたい屋上で何してんだ？ 遊んでるってふうには見えねエが……」

…」

『何か言っているようですが、集音しようにも風が五月蠅すぎてほとんど使い物になりません……………もう少し様子を見ましょう』

エースは二人を注意深く観察しながらエールと相談しあう。だが、そんななか、フェイト達の周囲を金色の魔法陣が覆った。それは瞬く間に力を増幅させ、式の役目を果たしていく。次の瞬間、溢れた光が進るように二人の姿が消えてしまった。

「いつ!? き、消えちゃったぞ!? 何処行っただ、おーいつ!」

慌てて飛び出し、辺りを見渡す。思わず声を上げるものの、どこからも返事は返って来なかった。いずこへを消えた二人を探していた主人へ、エールが光を発して呼びかける。

『この屋上にかなり大規模な転移魔法式の残滓があります。ここまですると次元跳躍も可能なはず……………どうやら、彼女はこの世界の外に用があるようですね』

「外って……………ってことは違う世界に行っただ、とかそういう感じか? けど、それじゃ完全に手詰まりじゃねエか」

エースが苦虫を潰したような顔を浮かべる。やつのことでここまで来たというのに、本人たちがいないのでは話にならない。追いかけてようにも世界を超える力などエースは持っていない。

『心配は要りませんマスター。私には貴方へ魔法系のサポートをほとんどできない代わり、様々な機能があると申しましたでしょう。』

今回はそれを使います……………【ストライカーシステム】起動、展開開始』

「お……………おおおお　　っ!？」

甲高い電子音が響く。同時にエールが光を放ち、エースの目の前  
にある物体が現れた。

大きさは全長二、三メートルほど。真ん中が割り貫かれたサーフ  
イン形状の水上バイクにマストを立てたような造り。船尾に付けら  
れた後方と左右への噴射口を持つ三合式エンジン。そして、何より  
馴染み深いマストに描かれた白ひげのマーク。

これだけの要素を併せ持つ乗り物は、彼の中で唯一つだった。

「こ、こりゃあ……………おれの？ストライカー？じゃねエか！　こん  
なもんまで仕舞ってあったのか!？」

それはエースが前の世界で愛用していた小型船、通称『ストライ  
カー』だった。白ひげの船にいた頃、何度もお世話になった相棒だ。  
エースのそれは、自らの？メラメラの実？の能力を動力として動く  
特別性である。

『ええ。といつても、この船はマスターの記憶イメージを元に作り  
上げられた新型で、その材質、性能、使用用途に至つても以前のス  
トライカーとは全くの別物です。これは普通の海ではなく、？次元  
の海？を渡るために存在する小型の次元空間航行船ディメンションシップなのです。名  
前は……………まあ暫定的に『エースストライカー』とでもしておきま  
しょうか』

「エースストライカー……………またコレに乗れる日が来るとは、正直  
思つてなかつたぜ。しかも今回は次元の海……………いいねエ、気が利

いてる。未知の海を新しい船で冒険か……久しぶりに海賊っぽく  
なってきたじゃねエか！」

意気消沈から一転。いきなりテンションが高まったエースが、ガ  
ツツポーズを決める。エールは『目的を忘れないようにしてくださ  
いね』と釘を刺しながらも、どこか声が嬉しそうに弾んでいた。

『それでは行きますよ。次元封門開放！！』  
ゲートオープン

エールの掛け声に呼応し、エースの前に数メートル大の円が現れ  
た。その中は暗く、様々な流れに満ちた闇が広がっている。

これこそが世界を取り巻く次元の海。そしてそこへ導くこの力が、  
エールが持ちうる三つの魔法能力のうち念話と力場設置を除いた最  
後の一つ、異空間接続である。  
ネットレイター

『バブルシールド展開。大気圧固定。システム全工程完了、次元乱  
流なし、相互座標に差異なし。次元状態確認……良好。マスター、  
発進可能ですよ』

「っしやあー！」

足元を炎に変え、パワーサプライとして流し込む。エンジンに火  
が入り、主人の力で命をとまず。エースの炎を受けたストライカー  
は、三つのエンジンに爆音を轟かせて唸りを上げた。

「久々、いや初めましてか？ ま、とにかく出発だ！ 進水式は派  
手に頼むぜ、相棒！！」

言葉を待たずして、ストライカーが飛び出す。目の前に広がるの

は、かつての世界でも感じたことのない異質な海。暗く誘い込むような闇だけが広がる暗黒。

恐れることはない。いつもそうやって切り開いてきたのだから。

こんなときでも好奇心が先立つ自分に、エースは笑みを深める。そしてさらにスピードを上げ、その中へ飛び込んでいった。

T O B E C O N T I N U E D . . .

**第十四話 潜入？ ～ すれ違つ者達（前書き）**

少し遅れましたが、ACEのストック第三弾です。

これ以降はしばらく更新が止まります。

詳しくは活動報告の方をご覧ください。

それでは第十四話どうぞ！

## 第十四話 潜入？ ～ すれ違ふ者達

- i n D i m e n t i o n a l S p a c e -

次元世界。それは、『この世』に存在するあらゆる可能性の一つといえよう。異世界、他世界などと言い方は様々であるが、詰まるところ次元という壁で隔てられた多くの世界を相承した呼び名である。

世界は一つだけ存在するわけではない。普通には超えられないが、『壁』を超えうる術を持つ者ならそれを知ることができる。

繁栄を極めた超科学の世界。手付かずの自然が残る原生世界。人がその存在を許されない、あるいははじめから為しえなかつた無人世界。

この世というカテゴリー内であれば、その規模はそれこそ星を数えるほどになる。世界は次元空間と呼ばれる不定形の海に浮かぶ島のようなものだ。つまり、世界はこの世の？可能性？の分だけ存在する。

「みんなどう？ 今回の旅は順調？」

「はい。現在第三船速で航行中。目標次元にはあと160ベクサ後に到達予定です」

「前回の小規模次元震以来、目立った動きはないようですが、二組の搜索者が再度衝突する可能性は非常に高いですね」

その次元空間内を、一隻の船が航行していた。次元空間航行艦船、その名をアースラ。時空管理局と呼ばれる次元を統括する一大組織をバックに置く、巡航L級型の8番戦艦である。

クルーの返答に、緑色の長髪を棚引かせた女性が「そう」と短く返す。その後ろから茶髪ショート少女がお茶を運んできた。

「失礼します、リンディ艦長」

「ありがとね、エイミー」

ティーカップになみなみ注がれた紅茶に、女性は笑顔を浮かべる。彼女、リンディ・ハラウンはこの艦の長に抜擢された優秀な人物だ。なおこの艦の最高責任者にして、時空管理局の提督の一人でもある。

そんな彼女にお礼を言われ少女は、はにかみを浮かべた。彼女の名はエイミー・リミエッタ。管理局の執務官補佐で、このアースラの艦船通信主任を務める立派なクルーだ。

エイミーの淹れてくれたお茶を口元に傾けつつ、リンディは少し難しい表情を見せる。若干の険しさも見て取れた。

「そうねえ……………小規模とはいえ、次元震の発生はいろいろと厄介なものね。危なくなったら、急いで現場に向かってもらわないとね、クロノ？」

「大丈夫。わかってますよ、艦長」

ブリッジ下方に佇んでいた一人の少年が、リンディの声に反応して振り向いた。

首の半ばほどで整えられたストレートの黒髪。同じく黒を基調とし、若干鎧がかった形状のバリアジャケット。強い正義感に満ちた黒き瞳。

彼こそ、このアースラにおいて最高の力を持つ時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンである。齢十四にして執務官までに上り詰めたその才能はさすがといえよう。ちなみに今年十六となるエイミイとは同期である。

カード状のデバイスをその手を持ち、クロノは自信のほどを窺わせる表情でふっと笑った。

「僕は、そのためにいるんですから」

「頼もしいわね。貴方がいてくれると、ホント安心できるわ。エイミイ、お茶のおかわりをいただけませんかしら」

「ふふ、はい」

空になったカップに再び琥珀色の茶を注ぐ。目的の管理外世界到着するまではまだ半日ほどあるが、前の次元震のこともあるし、いきなり戦闘になる可能性も否定できない。今はせいぜい気を休めておこうというのは必然だった。

そんなクルーの心情にもれず、エイミイも透過システムによって鮮明に把握できる外を見やった。代わり映えしない景色に、思わず

出てきたあくびをかみ殺す。彼女の目に『それ』が映ったのは、ちょうどそんなときであった。

「うん？」

艦橋から映し出される映像に、一瞬何かが見えた。まず頭に浮かんだのは疑問符だ。そして次には自分が見たものが信じられなかったのか、彼女はごしごしと両目蓋をこすった。

「？ どうしたのエイミィ。何か気になることでもあった？」

空間ウィンドウに目を落としていたリンディが尋ねる。眉を八字にしていたエイミィは、彼女の声に我に返った。

「あ、いえ。いま窓の向こう側………ちょうどあの辺りに何かがあった気がしたんです。私たちと同じ次元航行船かなと思ったんですけど、何だか小さいし、へんなマークが描いてある帆みたいなのが付いてて、誰かが乗ってるように見えたので………」

そう言っって首をかしげながら窓の外を見るエイミィ。仕事のしすぎで疲れてるのかなあ、なんて独り言も呟いている。一方、リンディもアースラ通信主任の言葉にきょとんとしていた。

「帆？ 帆船のこと？ 私は気付かなかったけど………レーダーは？」

「小型の船、ですか？ いえ、先ほどからは何も」

オペレーターのアレックスが一応端末を調べる。が、何の異常も機影も見受けられないようで、すぐに首を振った。やはり彼女の見間違いだっただようだ。

エイミーは既に思考を切り替えていたようで、そんなわけないかと零しながら笑っている。ブリッジでそれを聞いていたクロノの目が、呆れたように半眼になった。

「まったく……僕らは仕事なんだぞ、エイミー。この次元空間内を帆船なんかが進めるわけがないだろう。映画の見過ぎだ、不規則に動く空間がたまたまそうふうに見えたんだろうさ」

彼らしい皮肉だ。そのふつと流すような様子にエイミーはむっと頬を膨らました。

「ぶーぶー。クロノくんは相変わらず言い方キツイんだから。またまたいい男ランクから減点1だね。そんなんだから、訓練校で堅物とかムツツリとかKYなんて呼ばれるんだよ。いつかお姉さんにも愛想尽かされちゃうぞ?」

「よ、余計なお世話だ! それに後の二つは言われてない! そもそも君と僕は同期なんだから、そうやって年上風を吹かせるのはやめないか!」

クロノが顔を若干赤くしながら怒鳴る。エイミーは目を一文字にして「だって年上だも〜ん」などと彼を挑発している。ムキになつて言い返す息子をリンディ達はクスクス笑っていた。アースラはそんな船員を乗せ、次元の海を敵かに進む。

エイミーの言葉に何一つウソがなかったということ、誰一人として知らないまま。

「は、あれも船かア……随分とでけエし、それになんかゴツゴツしてた感じだった。船つつより要塞だったな」

先ほどすれ違ったアースラを思い出し、エースは一人言葉を零す。前方から何か来たと思ったときには驚いたが、エールにおそらく私たちと同じ性質の船でしょう、と言われたので、エースはすぐに落ち着くことができていた。

むしろ好奇心がうずいて仕方なかったぐらいだ。エールが制止をかけなければ、すぐにでも飛びついて中に侵入しそうな勢いだったのだから。

そんな頼れるエースの相棒は、少しの間を空けて彼に返答した。

「……あれはおそらく戦艦でしょう。まったく……注意してくれといった傍から接近するなんて、いい度胸……もといマスターらしいですね。ストライカーを覆うバブルシールドは高いステルス性と共に並程度の防御機構も持ち合わせていますが、視覚的には普通に見えてしまうと伝えただけだったではないですか」

「わあってるよ。まったく、心配性な相棒だな。だからおれは細心の注意を払ってたんじゃねエか」

「細心の注意を払って艦橋の真横を堂々と素通りするなんて人、おそらくマスター以外にいませんよ」

「ははっ、そんなに褒めんなって」

デバイスの呆れ声に、エースは照れたように頭を掻いた。彼は弟よりは常識人のはずなのに、どうして時にこういった反応を見ることになるのだろう。これも、『D』を継ぐ者の為せる業なのだろうか。永遠の謎にまた一つ項目が加わった。

『とりあえず、いまは現状況を整理しましょう』

これ以上続けても千日手になると判断したエールが、華麗なスルーを決める。その流れのまま、再度魔力の波を計測し、航行ルートを指示していく。そしてしばらく、エースは目の前に広がった物体に顔を上げた。

視界を覆うのは巨大な陰。彼らの目の前には、それはそれは大きな岩が固まりとなって存在していた。その周囲を乱流となった高エネルギーが稲妻のごとく迸っており、無骨な岩肌の所々には人工的な赤い光も見えた。それは次元空間にあつて、さらに異質かつ威圧するような雰囲気放っている。

見ようによつては城にも見えるかもしれない。

『満ちているエネルギーから推測するに、ここは高次空間内のようなですね。普通なら人間は住もうとはしないはずですが、反応は今までで一番強い……間違はなく、彼女はここにいます』

「何でまたこんなところに……まアいい、行きやあ分かることだ。ちようどいい場所も見つかったことだしな」

岩肌に着陸させようかと思ったが、岩で守られた一角に内部に通じる通路を発見する。エースはストライカーをそこに停め、久々の地面に降り立った。

ストライカーが自動収納されると、周りを見渡す。

「無用心だな……誰もいねエ」

『この城の周囲に感知兼撃退用の結界がありましたから、内部にまで張る必要はないということではないでしょうか。まあ、バブルシールドを同化させれば簡単に突破できましたから、私たちには関係ありませんけど』

エールが事も無げに言うが、何気にすごい事だ。これほどの事を瞬時にするのは魔法がほとんど使えなくとも使用用途はある。なんでも、ヤルキマン・マングローブのシャボンコーティングの性質を応用したということらしいのだが、相変わらずエースはまったく分かっていなかった。

そのことと褒めてもらえなかったことにちよつと悲しくなる彼女をよそに、エースは何かを思い出したように足を止める。

「つと、忘れてた」

そしてすつと真っ直ぐに気を付けをすると、

「お邪魔します」

『不法侵入でも、それは言うのですね……』

45度でお辞儀をする。最低限の礼儀を通したエースは、再び歩き出した。

リノリウム系の廊下にコツコツと音が響く。エース自身はそれほど音を立てているつもりはない。だが、思った以上に反響して大きなものとなっていた。周囲に音がないぶん、建物の大きさも相まって余計にそれが際立つのだろう。

「ん？」

と、どこか遠くから何かか聞こえたような気がした。とりあえず其方に歩いていくと、それは次第に大きくなり、誰かの声と聞き取れるまでになる。しかし、その声質にエースは眉を顰めた。

「これは……泣き声か？」

『反響音確認……この先に誰かがいます。マスター』

エールがエースに向かって警告を促してきた。エースはそれに頷き、いくつもある同じ規格の扉を通り、先へ進んでいく。すると、いくつか潜った辺りで急に目の前が開けた。

聖堂のようなアーチ状の造り。歩道の脇を固めるように等間隔で点在する円柱。大広間、とっていい感じの部屋だ。

その出口、一際大きな扉に誰かが縋りついていて。一瞬何かと思うが、後姿から誰なのかは分かった。

「フェイトの嬢ちゃんの使い魔じゃねエか。たしか、アルフだった？」

『ええ。先ほどの泣き声は、彼女のもののようです』

エールの確信を聞きながら、エースは彼女に歩み寄る。何かに気を取られているのか、此方には気づいていないようだ。エースは警戒心の強い彼女に眉を顰めたが、とりあえず二メートルぐらいまで近寄ってから声を掛ける事にした。

「おい、何泣いてんだ？」

声と共に彼女が振り向く。その顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになったものであった。

- Side Arufe -

「うあっ！ ああっ！」

断続的に聴こえてくる悲鳴にあたしは耳を塞いだ。きゅっと口元を引き結び、耐える。耐えて、耐えて、耐えるほかない。

今までもそうしてきたんだ。そうすることしかできなかったんだ。あたしじゃ、フェイトを隔てる壁を破る事はできない。あたしじゃあ、あの女には勝てない。あたしじゃ、あの子を笑顔にできない。あたしじゃ、あの子を救えない。

「ぐっ！ いうっ！ うあああっ！」

「けど、これはあんまりじゃないか……………！」

徐々に強くなる悲鳴にあたしの手にかが籠る。耳がちぎれてしま  
いそうだ。いや、いつそのこと千切れてしまえばいい。フェイトが  
受けている痛みは、こんなものじゃないんだから。

「ッ……………！」

いてもたってもいられず、あたしは走り出す。そのまま扉に体当  
たりするように腕を打ちつけて、頭こぶを垂れた。口内に鉄の味を感じ  
る。歯を食いしばりすぎて、どこかを噛み千切ってしまったのかも  
しれない。

募るのは疑念と怒り、そして憎悪。今にもどうにかかなりそうなほ  
ど激しさを増していく。それはあの女に対するものと、あたし自身  
に向けられたものだった。

（あの女の、フェイトの母親の異常さとか、フェイトに辛く当たる  
のは、今に始まったことじゃないけど……………今回ののはあんまりだ！  
あのロストロギアは……………ジュエルシードは、そんなに大切なもん  
なのか！？）

風を裂く鞭の音、そして悲鳴が止んだ。あたしがいちばん嫌いな  
音。壁一つ隔てた向こうで行われていたことに、知らず涙が流れ始  
める。何度拭っても、それが止まることはなかった。

「なんで……………なんでアタシには力がないんだ……………ただフェイト  
を救いたただけなのに……………笑顔にしたいだけなのに……………っ！」

嗚咽をかみ殺しながら、私はずるずると崩れ落ちる。なんで自分はこんなにも無力なのだろう。どうして、ささやかな願いすら聞き届けてもらえないのだろう。

そんな自分が嫌になる。涙が落ち、鼻水をすする。あの子は耐えているのに泣いてしまう自分が嫌で、それを押し殺そうと耳を塞ぐ。

だから気付かなかったのかもしれない。

『おい、何泣いてんだ？』

自分の背後に人がいたことに。

「え……？」

背中に掛けられた声に、一瞬何が起こったか分からず停止した。だが、すぐさまアタシは背後を振り返る。すると、最近よく見かける顔がそこにあった。

「あ、あんたは！？」

今、あたしの顔はすごいことになっているだろう。心の底から驚いたことと、先ほどまで泣いていたことも相まって、とても見れたものではないに違いない。

目の前のコイツ、いつも白い子と一緒にいるエースとかいうガキ

もそのことに目を開いていた。だが、あたしの驚きはそれ以上だ。そもそも、いろいろと気になることがある。

「ど、どうしてここに……い、いやそれ以前に傷はどうしたんだい!? 昨日あんな大怪我負ってたじゃないか!」

「昨日? ああ、あの時のアレのことか。寝たら治った」

「治るかアッ!」

相変わらず的外れな言い分に、思わずツツコミを入れてしまう。こんなことをしている場合じゃないのに、ここを知られたら不味いんだってのに!

「っ!」

はっとして、あたしは構えようと距離を取る。フェイトのことは気になるけど、知られた以上こいつを黙って返すわけにもいかない。ここまで入り込んだ人間はあの女にとっては言わずもがな、フェイトにとつても害になる。

刺し違えたって仕留めなければ……そう、思うのに。

「? 何やってんだ?」

身体は動かない。戦えと言い続ける頭に、身体が付いていかない。あたしの雰囲気から何かを感じ取ったのか、エースは躊躇いもなく近づいてきた。

少し訝し気に覗き込んでくる。「声」が再び聴こえてきたのは、

まさにその時だった。

「あああっ！ いああっ！？」

「！？ 今のは……！？」

『フェイト嬢の声です……まさか……』

「ううッ……！」

フェイトの、幼い少女の悲鳴。いきなり響いた声に、コイツは驚いてあたしを見る。あたしはその視線と悲鳴に耐えられず、視線を逸らした。

またはじまる。心を抉るようなあの声。聞こえてくるそれを届かせないため、あたしは耳を塞いだ。

「こりゃ……こりゃ一体どういうことだ……なんでアイツの悲鳴が聞こえる！？ それなのに、なんでこんなところで泣いてんだ！ 答えろてめェ！」

響き始めたフェイトの声に、さしものコイツも血相を変えて詰め寄ってくる。その顔には戸惑いと一つの強い感情が浮かんでいた。

（ああ………コイツ、怒ってくれてるんだ………）

フェイトを気遣ってくれている。フェイトのために怒ってくれている。この声を聞いて、本気で心配して憤ってくれているんだ。

「あの女が……」

涙で滲む景色の中で顔を上げる。黙っていなければならぬことだけど、今は無理だ。コイツの優しさを感じてしまったから……あたしはもう止まれなかった。

「あの女がフェイトの母親が……いつもああやってるんだ……今回だってフェイトは何も悪くない、言われたことだってちゃんとやったんだ……それなのに……それなのにあの女は……う、ううっ、ぐっ……」

ずっと出てこなかった言葉をあたしはぶちまける。それが意味することを理解したのか、さすがのこいつも言葉を失ってるようだった。

よかった。あたしが異常だったわけじゃないみたい。こいつもあたしや昔のリニスと同じ認識なんだ。これが普通じゃないと感じているんだ。

そう思うと、涙がまた溢れてきた。溢れ出るたびに雫が地面に落ち、頬に筋を作っていく。気付けば、あたしは目の前のコイツに、敵である相手に縋りついていた。

「頼むよ……こんなこと、図々しいにもほどがある……今まで散々好き勝手言っただけのこととしてきた相手に……敵のアンタに、そんな義理がないのだから分かってる……けど、お願いだ……！ あたしなら後でどんな罰だって受ける……なんだから……だから……だから……だから、あの子を助けて……」

涙で滲むエースに向かって、あたしは精一杯告げた。

「フェイトを、守ってあげてよお……………」

掴んだ肩を強く握り締める。あたしは答えを聞くのが恐くて、ただ下を向いていた。あたしの手の上にアイツの手が置かれ、ゆっくりと剥がされる。

力が抜けそうになる身体。しかし、聞こえて来た声はあたしの絶望を打ち砕いた。

「退いてる。巻き添えになりたくなかったらな」

瞬間、全身が総毛立った。見上げた顔は髪に隠れ、ほとんど表情がわからない。だが、全身を押しつぶすような怒気だけは、はっきりと感じ取れた。

「っ！ あ、ああ！」

生返事をして脇に退避する。コイツが赤くなった腕を振りぬくのと、あたしが扉の向こう側を見たのは、ほぼ同時だった。

- Side out -

TO BE CONTINUED . . .

第十五話 潜入？ ～ 母の定義（前書き）

明けましておめでとございます。

何とか執筆するチャンスに恵まれたので、急ピッチで書き上げました。

変な文章とかになっていなければいいのですが……ともあれ、なんとか頑張っ行ってきたいと思います。

それでは第十五話、どうぞ！

## 第十五話 潜入？ ～ 母の定義

『口先だけでも親になりたい。あいつら………私の子でしょ？』

元海軍兵士 ベルメール

けたたましい轟音を響かせて、頑丈な扉が跡形もなく吹き飛んだ。鉄屑同然となったそれらが、鈍い音を立てながら地面に落下していく。壁もあわせて崩壊し、大量の土煙を撒き散らした。

「な、何事!？」

今まさに鞭を振り下ろそうとしていたプレシアが、いきなりの事態に叫びを上げた。その顔からは、久しく余裕がなくなっている。鞭を握った手は、高く掲げた状態で停止していた。

「一体な　くうっ!？」

と、煙の中から炎弾が放たれ、彼女の鞭を直撃する。腕に走った衝撃と熱に、プレシアは慌てて手を離れた。彼女が体勢を立て直す間に、炎弾はさらに数を連ねる。いくつかがフェイトを縛っていた戒めを撃ち抜き、その身体を横たえさせた。

硬い音と鈍い音が半々に響く。それを待っていたかのように、アルフが倒れたフェイトに駆け寄った。

「フェイト！ フェイトツ！ しっかりしておくれ！」

「アル……フ？」

抱き上げられた感触に開かれたフェイトの目が、驚愕の一色に染まった。しかしほどなくして、それは疑問へと変わる。浅く呼吸を繰り返し、息を整えながら自らが使い魔に目を向けた。

「どう……して……」

「それは……」

答えにくいと言うようにアルフの眉が寄せられる。その彼女の後ろからエースがゆっくりと進み出てきた。

「大丈夫か？ っと、大丈夫じゃねエから倒れてるんだったな」

「あ、あなたは……白い子、の……」

「おう、ポートガス・D・エースだ。今は翠屋のアルバイターだが、しがない海賊をやってる。好きな数は1番だ。以後よろしく」

再び笑顔で自己紹介をするエース。その表情は爽やかそのものだった。というか、言わなくてもいい肩書きもつけているあたり律儀な男である。

「あ、あなたがどうしてここに……？ ……ふあ、え、あれ……？ 昨日はあんなに怪我してたのに……あ、あれ！？」

「おーおー、混乱してんな。ともかく、立て込んでるトコ失礼するぜ。昨日ぶりつてとこか、フェイトの嬢ちゃん。とりあえず今は動くなよ？ 傷に障るからな」

寝てるよ、と起きようとしたフェイトを制し、怪我の具合を確認していく。傍にいたアルフも一緒にになり、心配げな表情で自らの主を見つめている。

対して、いきなりの事態に動揺していたプレシアは徐々に落ち着きを取り戻していた。突如乱入してきたエース、そしてフェイト達を見比べる。

「……………フェイト、これはどういうことかしら……………ここには誰も近づけないでと、母さんはあれほど言ったはずよ……………？ それだけは絶対、破ることは許さないと……………その私の言いつけを、貴女は破ったの……………？」

表情は邪悪にして無機質。眉はつり上がり、その瞳には攻撃的な光が浮かんでいる。フェイトは彼女の詰問に弱弱しく首を振った。

「え……………ち、違い、ます……………わ、私、そんなこと、して、ません……………」

「していない？ それはありえないわ。それが本当なのならば、こんなことになるはずがないもの」

娘の言葉を端から信用していないかのように、プレシアは冷徹に断定した。フェイトを看ていたエースの瞳に鋭い光がよぎる。

「フェイト、嘘はいけないわ。それにさっき言ったばかりでしょう、

母さんを失望させないようにと………いっただれだけ私の期待を裏切れば「うるせエ取り込み中だ！ 外野は黙って待っていやがれ！」なっ………!？」

焦れたエースが一喝を飛ばした。絶句するプレシアに再び背を向け、フェイトの様子を注意深く見続ける。そして、深刻なものがないことを確認すると、エースは立ち上がって二人を守るように背を向けた。

フェイトがその後姿へ問いかける。

「どうして、私を………？」

「さアな………ま、色々言いてエことはあるだろうが、ともかくこれじゃ話もできねエ。後で説明してやつから、今は黙ってそこにいろよ。コイツはおれが適当にぶっ飛ばしてといてやるから」

エースが安心させるように横目でにっこりと笑う。しかしその意図とは裏腹に、フェイトの顔はさっと青くなった。

「だ、だめ………あなた、殺され、ちゃう………！ 逃げ、て………」

「フ、フェイト!? 動いちゃダメだつて!」

アルフの制止を無視して、エースのズボンの裾を掴んだ。必死に首を振るその目には、ハッキリとした恐怖が浮かんでいるのが見える。自分に降りかかるものではない、エースが死ぬということを、フェイトは無意識下で恐れているようだった。

エースの口元から鈍い音が響く。

「私の事、は、いい、から……………早く……………お願いだから、逃げ「あーッ、うるせエ!」っ!?!」

なおも言い縋ろうとしたフェイトをエースは思い切り怒鳴りつけた。その大声量に身を竦めた本人は、怒られた理由が分かっていないようにその表情を震わせる。若干イライラした様子で、エースはその深紅の瞳を覗き込んだ。

「まったく、人の言うことに母娘揃っていちいちケチつけやがって! そつちの都合なんざ誰も聞いてねエよ! 俺がそうしたいんだ、それを逃げるもクソもあるか! 後の事は好きにすりゃいいが、今は黙っておれに助けられる! いいな!」

「……………は……………はい……………」

「よし!」

詰め寄られての半ば勢いまがいの口上に、戸惑いつつも同意するフェイト。それを確認すると、エースは力いっぱい頷いた。屈んでいた腰を立ち上げ、再びプレシアに向き直る。

「……………つつつわけだ。コイツらに手エ出すな」

「……………どうやら本当に母さんを裏切っていたようね。母さんを困らせてばかり……………どうしようもない子……………」

プレシアの目が冷たく細められ、フェイトがビクツと震える。そして睨みつけるエースに目をやると、リカバリーした杖を取り出して口を開いた。

「 【バインド】 」

「 うぐツ！? 」

「 あうっ！? 」

「 なっ、お前ら! 」

じやらんという金属音がくぐもった呻き声と悲鳴に重奏する。エースが後ろを振り向くと、同じく光を放つ鎖によって拘束されたフエイトが宙吊りになっていた。その隣には、同じく雁字搦めにされたアルフの姿もある。

「 どういうつもりだ！ お前の相手はおれのはずだろ! 」

「 うるさい、貴方の意見なんて聞いてないのよ。これは罰なの。私の望むことを実現できなかったこの子にとってのね 」

プレシアが蔑むように言うと、フエイト達の周囲に魔法陣が展開された。そのすべてから、バチバチと紫の火花を散っている。凄惨な笑みを浮かべるプレシアに二人は身を震わせた。

「 何でこんなことすんだ！ てめエは母ちゃんだろうが! 」

「 だからこそ、よ。出来損ないには、よりたくさんのお教育? をしなければならぬでしょう? これはその一環、前から必要だとは思っていたし、丁度いい機会だわ。ああ、失敗をカバーできない出来損ないの使い魔も一緒に躰けることにしましょうか。貴方はそのあとで消してあげる 」

再びその手に鞭が握られた。しかし、今度は無数の棘が張り出ている。あんなもので打ち据えられれば、みみず腫れどころでは済まないだろう。

それが振り上げられる。口元に笑みすら浮かべた女によって、震える少女へと風を切って迫る。

その瞬間、エースの中で何かがキレた。

【 やめろっつってんだろっつがア!!! 】

ゴオオオオオオオオオオッ!!!!!!

瞬間、三人の間を何かが駆け抜けた。風のように軽やかに、岩のような重圧を持った、強く心を揺さぶる強烈な何かが。

「……っ!?」「」

プレシアが身体へ叩きつけられた『それ』に、思わず鞭の手を止めた。同時にフェイトとアルフを縛っていた光も消失する。対する二人は身体に走った衝撃に目を見開き、

「あ ……」

「え……………」

一瞬後、糸が切れたように崩れ落ちた。どさりという鈍い音のあと、一瞬の静寂が大広間を支配する。それを破るように、虚を突かれたような声がエースの左手首から響いた。

『こ、これは、【霸王色の覇気】！？ マスター……………！？』

「い、いや、おれは出そうとしてねエぞ！？」

慌てているのはエールの主人も同じだ。何が起こったのか分からない、いや分かっているが理解できないとでも言うような、予想外の事態に戸惑っているように見える。

「どうなってんだ……………？ 覇気？ が勝手に出るなんて……………まさか、コントロールできてねエのか……………？」

柄にもなく呆然とした様子で、エースは自分の両掌、そして倒れたフェイト達を見つめる。エースの心中と同じ意見が、エールからも飛んだ。

『もしかすると、精神と肉体に差異が出てしまったことによる弊害ではないでしょうか。ピストルに砲弾が詰め込めないように、心に潜在している力がいくら巨大でも、身体が未熟になってしまったばかりでは引き出せる量にも限界がある、と……………現に今の覇気は子供の頃のレベルでしたし、発動した理由も怒りに呼応したからのようです。この分だと、霸王色以外も似たり寄ったりかもしれないですね……………』

参りました、と少々困り声のエール。一方のエースは、自分の中

で大体予想がつきながらも、一縷の願いを託してエールに向かって問いかけた。

「……………つまりアレか？　ちっこくなくなった身体じゃ、前みたいな覇気は引き出せねエ、と……………ってことは……………」

『以前のよう地道な訓練を重ねて、徐徐に引き出せる量を増やしていく他ないでしょう。しかし、マスターならその身体でも数年ほどで元に戻せますよ。一度は自由に使いこなしていたんですからね』

「な、何てこった……………」

予想通りだったとはいえ、エースは脱力感から内心頭を抱えた。覇気が満足に使えないというのはかなりショックだった。実力的に見ても、相当のパワーダウンだと言えるだろう。

いくら強大だろうと、制御できない力など何の役にも立たない。上手くいけばそれでいいだろうが、今のように暴発してしまうなんてことになれば何も力を持たないことよりよほど厄介である。

（まったく、本当に次から次へとややこしくなりがって……………まア、ここに悪魔の実の能力者なんていなさそうだからな。その分は気楽に構えられる。今は考えても仕方ねエヤ）

自分の中でなんとか結論づけをし、気持ちを落ち着ける。元々が軽い性格のため、プレシアへと再び目をやる頃には既にいつもの彼に戻っていた。気絶したフェイトを背にして、プレシアの前に進み出る。

「へっ、フェイトの母ちゃんだからって容赦はしねエぞ。無抵抗の

ガキにあそこまでやった罪は重い。一度痛目見せてやつから、きつちり反省するんだぜ？」

色々と思うところはあったが、とりあえず本題に取り掛かることにしたようだ。対する彼女もエースの視線に気を取り戻し、杖を構えた。

「くつ、妙な力を……………子供が調子に乗るんじゃないわ!!」

素早く杖が振られる。その先から、紫色の稲妻がエースに向かって襲い掛かった。

「つとぉ!!」

身体を捻って真横へと飛ぶ。言葉に嘘はないようだ、紛れもなく相手を倒す目的できている。なのは達のような敵の？無力化？ではなく、相手を消し去る？排除？。久々となる命の取り合い、この世界に来てから初めてといえるだろう。

普通なら認められず、戸惑う。だが、エースにはそんな気持ちもその理由も、とうに存在していなかった。

(悪イが、こっちはそれが普通なんだよ!)

生きること常に命を張る。そうやってずっと生きてきた。だから、エースは戦うことを躊躇わない。生きることとは、即ち戦うことだと知っているからだ。

「?火銃<sup>ヒガン</sup>?、連装!!」

鞭のようにしなった稲妻を、機関銃のごとき連射で撃ち払う。その隙を突くように、背後から二本迫る雷。視界に捉え、振り向きながら腕で円を描いた。

「? 炎鏡?!!」

追いつがるそれらを炎の盾で弾く。目標から逸れ、後ろの壁にぶち当たった雷が分厚い石壁を抉り取った。ガラガラと砕けた欠片が床に転がる。半分は溶け落ちてしまったようだ。

思ったより力が込められていることにエースは驚いた。どうやらフェイトの母というのは伊達ではないらしい。実力的にも彼女より上と見ていいだろう。

思わずニヤリと笑みが零れる。

「この、ちょこまかと……いい加減に落ちなさい!!」

プレシアは憤りを乗せて、杖で床を叩き突いた。同時に魔法陣が出現し、いくつもの雷が刃の形を取ってエースに迫る。

「へえ、乱火、? 火鼠?!!」

轟音が響き渡った。地を這ってきた稲妻を同じく地を駆ける炎で相殺する。電子と熱、相容れない二つの要素がぶつかり、その場に煙と爆風が散乱した。

視界が一瞬ホワイトアウトした。不意打ちを受けてはたまらないと、エースは急いでその圏外へ飛び退る。だが、その先に杖を高らかに掲げたまま笑うプレシアの姿があった。

「終わりよ」

上方から降り注いだ稲妻が、エースを直撃した。今までで最大級の雷が多量の光と音を伴い、周りのものを吹き飛ばしていく。煙を立ち上らせた広間の中心には、直径数メートルはあろうかという巨大な穴を空いていた。

「あなたが悪いのよ？　こんなところまで来てしまうから」

プレシアが穴を見下ろす。その顔には何の感情も浮かんでいない。氷のような、いや、機械じみた表情だった。

風が落ち着き、煙が徐々に晴れていく。今度はフェイト達の番だと、彼女は無言で背を向け歩き出そうとした。

ガラ・・・

無くなったはずの音が響いた。瓦礫が転がされるような、心を鷲掴みされたような鈍い音。耳朶に響いたそれにプレシアは足を止め、ゆっくりと振り向いた。

驚きを、隠す事はできなかった。

「なっ……………どうして!？」

深さ三十センチほどの穴の中心には、エースが立っていた。それだけなら、何も驚く事はない。別に彼の身体にも態度にも変化は見られない。

おかしいところはどこにもなかった。あれほどの雷をまともに受

けた彼の身体に、傷が一つとしてないという異常な事象を除いて。

「 そんな雷ものが、炎おれに効くか」

子供だとは思えない、威圧感漂う声を放ち、エースは視線を此方に向けた。彼の目の中には、うろたえた様子のプレシアしづんが映っている。映りこんだ自分の顔は、自身でも見たことのない表情をしていた。

不意に、その口元に笑みが浮かぶ。瞬間、風を切って接近したエースに、完全に懐へと入られていた。

「っ！ しまっ……！？」

慌てて迎撃体勢を取るプレシア。だが、その時はすでに遅い。強く握り締められたエースの右拳は唸りを上げ、

「 ……？ 火拳？ツ！！」

裂帛の気合とともに振り抜かれた後であった。

「 あ、ぐッ、あああああッ！！？」

轟音に掻き消され悲鳴を聞く者はいない。プレシアは炎化したエースの拳を受け、火炎の奔流もろとも大きく吹き飛ばされた。

壁をぶち抜き、暗闇の中へと消える。その後を追い、部屋へと飛び込んだエースは、奇妙な光景に足を止めた。

「 なんだ？ この部屋は……」

暗く閉じられ、窓一つない部屋。閉じ込められていた湿った空気が、外へ向かって流れ出している。部屋というよりも廊下のようなその両側には、蔦が巻きついた柱が所狭しと立ち並んでいる。

「こりゃ、研究室か……？」

独り言を呟き、周りに目をやりながら歩いていく。その先僅かな光が見えた。暗さだけを放出するこの空間でただ一箇所、光で満たされた場所をエースは見つけた。見つけて、しまったのだ。

この場所に、時の庭園に存在する唯一の光を。光の中、静かに眠る？彼女？の姿を。

「っ……………こいつは……………！？」

目に映ったものにエースは言葉を失う。呆然、という言葉を体現するが如く、目の前の光景に意識を完全に取られた。それ以外何も考えられないほどに。

どうなってるとか、どうしてとか、そういった曖昧な問いかけや疑問が駆け巡り、頭の中をゴチャゴチャに掻き回していく。

考えても分からない、実際に見ているのに分からない。浮かぶのは疑念、そして困惑だけ。

なんでこんなことになっている？　なんで、おれはこんなところにいる？　なんで、こんな光景を見る？

なんで、

「なんでだ……なんで、フェイトが二人いるんだよ……!？」  
カチリ、と。世界が回った気がした。

- T O B E C O N T I N U E D . . .

第十五話 潜入？ ～ 母の定義（後書き）

第十五話でした。

いや、冒頭の名台詞はこのお話を書こうと思った瞬間に決めましたね。何といっても、ワンピース世界で母と言ったら彼女が一番でしょうから。

さて、真実が目前に迫ったエースはこれからどうしていくのでしょうか。彼のクールな活躍を期待しつつ、本年度最初の挨拶とさせていただきます。

それでは皆さま、改めまして、本年もよろしくお願い致します！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5083n/>

---

魔法少女リリカルなのはACE

2012年1月1日01時06分発行